

八ヶ岳考古

平成 8 年度年報

研究活動報告

曾利式土器終末期の編年について

佐野 隆 7

土製円盤私考

山下 実司 25

山梨県北巨摩郡内における縄文時代中期初頭(五領ヶ台式)土器群の編年

竹田 清人 36

研究ノート

磨製石斧と集落遺跡

小宮山 隆 49

発掘調査速報

1 9 9 7

北巨摩市町村文化財担当者会

八ヶ岳考古

(平成 8 年度年報)

北巨摩市町村文化財担当者会

例　　言

- 1 本書は、平成8（1996）年度の北巨摩市町村文化財担当者会の事業をまとめたものである。
- 2 本書の執筆は、「組織と活動」を事務局が行い、Ⅰの「研究活動報告」は文頭に文責を記し、Ⅱの「発掘調査速報」については各調査担当者が行っている。
- 3 本書の編集は、高須秀樹（双葉町教育委員会）が行った。
- 4 本会の活動並びに本書の発行において、山梨県教育委員会学術文化課・北巨摩教育事務所・北巨摩市町村文化財審議会委員連絡協議会・郡内各市町村役場並びに教育委員会の皆様にご協力を頂いた。記して感謝致します。

目　　次

例言・目次

北巨摩郡周辺地形図（1/200,000）	
組織と活動	1
I 研究活動報告	
古利式土器終末期の編年について（佐野一隆）	7
土製円盤私考（山下孝司）	25
山梨県北巨摩郡内における绳文時代中期初頭（五領ヶ台式）土器群の編年（竹田眞人）	36
研究ノート：磨製石斧と集落遺跡（小宮山一隆）	49
II 発掘調査速報	
1 後田堂ノ前遺跡（韮崎市）	61
2 宮ノ前第5遺跡（韮崎市）	64
3 溝下遺跡（須玉町）	65
4 平林遺跡（明野村）	67
5 新井遺跡（高根町）	72
6 長坂上条遺跡（長坂町）	74
7 寺所遺跡（大泉村）	78
8 寺所第2遺跡（大泉村）	82
9 大原1遺跡（白州町）	83
10 真原A遺跡（武川村）	85
11 双葉町内遺跡詳細分布調査（双葉町）	87



北巨摩周辺地形図 (1/200,000)

(地図中の数字は、発掘調査を記載する道跡番号と一致する)

組織と活動

組織概要

北巨摩市町村文化財担当者会（以下、北文担と略す）は、平成7年4月より北巨摩郡内9町村と蓮崎市の文化財担当者を会員として組織され、文化財保護に関する普及啓蒙活動、文化財保護に関する調査研究、文化財担当者の資質向上のための研修、郡内文化財保護行政の概要を教知するための年報発行を行、活動の主眼としている。さらに、山梨県教育庁学術文化課長、北巨摩教育事務所長、北巨摩文化財審議会委員池谷協議会長を参与に迎え、その活動に指導、助言いただいている。会運営は各自治体の負担金収入を充て、年報発行のための収入と支出の枠は、負担金、事務局費、事業費とは別に設けている（文末、金附参照）。

そうした活動は、月1度の定例会により、企画、実施されている。定例会は特に定めはないが、郡内自治体の協力を得て施設を貸借し、開催している。

平成8年度北文担役員

平成8年度における北文担の役員は次のとおりである。

会長 山路恭之助（須玉町）

副会長 雨宮正樹（高根沢町）

参与 学術文化課長 小池光夫

北巨摩教育事務所長 中村勝一

北巨摩市町村文化財審議会委員池谷協議会長 山寺仁太郎

事務局員 伊藤公明（大泉村）、杉本充（白州町）

監事 山下孝司（川崎市）

以上の役員のほか、研究活動・年報編集のため、次のとおり委員が選任された。

研究活動委員 小宮山隆（長坂町）

年報編集委員 高須秀樹（双葉町）

平成8年度の活動

平成8年度においては、研修会を3回実施し、2遺跡の見学会、小・中学生を対象にした体験発掘会を主催した。また調査研究活動として、個々の資料により各自研究を行い年報において発表した。

4月18日 白州町中央公民館 定期総会。事業計画、会計、役員、金附について討議。

5月29日 蓼崎市公民会館 5月定例会。咲北土地改良事務所と調査計画について討議する。

5月31日 北巨摩教育会館 郡教育委員会連合会理事研修会において「文化財の保護と活用」について事務局で説明。

6月20日 大泉村総合会館 6月定例会。県事業委託調査時の体制等について検討。

6月23日 長坂農村開拓改善センター 山梨県考古学協会地域大会「縄文新発見～八ヶ岳高原を中心として」を後援、発掘資料を展示。

7月18日 長坂農村開拓改善センター 7月定例会。研修会について検討。

- 8月22日 高根町役場 8月定例会。見学会、研修会について検討。
- 9月19日 白洲町中央公民館 9月定例会。出土品（撒入繩文土器・在地土師器）を持ちより検討。
- 10月17日 明野村中央公民館 10月定例会。見学会、体験発掘会について検討。
明野村八代家住宅 研修会「民家のみかた」講師 坂本高雄氏。
- 10月26日 明野村平林遺跡 小・中学生を対象に体験発掘会を主催。
- 10月27日 薩崎市石之坪遺跡・武川村真原A遺跡 2遺跡の見学会を主催。
- 11月28日 小瀬町歴史活動センター 11月定例会。研修会「石造物の調査方法」講師 佐藤勝広氏
- 12月19日 武川村教育福祉センター 12月定例会。平成9年度発掘調査予定について検討。
武川村中山砦 研修会「中世山城調査法」講師 山下孝司氏。
- 1月23日 箕面町コミュニティセンター 1月定例会。峠北土地改良事務所と調査計画について協議。
- 2月19日 大泉村総合会館 2月定例会。研究活動、年報編集について検討。
- 3月19日 双葉町民会館 3月定例会。平成9年度事業計画について検討。



薩崎市石之坪遺跡見学会



武川村真原A遺跡見学会



明野村平林遺跡体験発掘会



平成7年度北巨摩市町村文化財担当者会計決算報告

収入の部

単位：円

項目	予算額	決算額	備考
市町村負担金	100,000	100,000	10市町村×10,000円
年報発行 特別予算	500,000	450,000	9市町村×50,000円 △50,000円
その他収入	0	40,046	生涯学習フェスティバル参加謝礼30,000円・祝儀・利子
合計	600,000	590,046	△9,954円

支出の部

項目	予算額	予算現額	決算額	比較増減	備考
事務局費	26,700	26,700	22,807	△ 193	事業費へ3,700円流用
通信費	17,600	17,100	17,100	0	
事務費	9,100	5,900	5,707	△ 193	高額路線使用料、ゴム印など
事業費	73,300	77,000	77,000	0	事業費より3,700円流用
月例会費	3,300	0	0	0	
見学会費	20,000	27,000	27,000	0	拡声器1台購入
講師謝礼	50,000	50,000	50,000	0	総会講師謝礼30,000円・研修会講師謝礼20,000円
年報印刷製本費	500,000	450,000	450,000	0	1,000×450部 △50,000!!
予備費	0	40,046	3,000	△37,046	否典
合計	600,000	590,046	552,807	△37,239	

収入決算額590,046円－支出決算額552,807円 = 37,239円（次年度繰り越し）

平成8年4月15日、関係書類及び帳簿を監査した結果、厳正にかつ的確に処理されていることを確認しました。

監事 山下隆司 印

I 研究活動報告

曾利式土器終末期の編年について ——茅ヶ岳山麓における新出資料による編年案——

佐野 隆

はじめに

曾利式土器は、山梨県内の縄文時代遺跡の発掘調査に携わるものにとってなじみ深い土器である。沈線、条線の地紋を特徴とする曾利式土器は、藤森栄一によって5段階を基本とした型式が設定されて以来、型式学的検討が繰り返され、より詳細な細分型式をめざす研究が進められてきた。

しかしながら、刊行される発掘調査報告書には、藤森栄一以来の曾利式を5段階する型式名が多用され続いている。曾利式土器は大局的にみれば5段階の変遷を基本とするとの考えが広く支持されているためであろうが、同時に細分を指向したこれまでの編年案が、資料の割約による不正確さを残していることも原因のひとつであろう。

近年八ヶ岳南麓および茅ヶ岳山麓では、曾利式後半期から終末期の遺跡調査例が増加している。それらには曾利V式様の遺構を土体とする遺跡もみられ、従来の編年案では遺跡の変遷過程を充分に解明しきれない事態が生じている(註1)。

拙論では茅ヶ岳山麓における新出資料の検討を基礎に、従来の編年案の成果をふまえて、曾利式終末期の遺跡の変遷分析により有効な編年を提示したいと考える。まず、曾利式終末期に注目して従来の編年案を振り返り、成果と問題点を指摘する。そして、山形真理子の編年案(山形1996)を支持したうえで、茅ヶ岳山麓における新出資料を報告検討して、口縁部紋様の変遷を軸とした編年指標の設定を試み、曾利式終末期の編年案を提示する。

なお、拙論における曾利式終末期とは、いわゆるハの字紋を地紋とする土器が土体となる、井戸尻編年の中の曾利V式、柳坪遺跡VII、VIII、IX段階(米田1986)、秋葉堂遺跡曾利新式4段階、新々式(小野1987)、山形(1996)の曾利新3式とそれ以降を指すこと、八ヶ岳南麓には塩川旧氾濫原の藤井平地域、塩川上流域を含むことを断っておきたい(註2)。

曾利式土器研究史

曾利式土器の研究史は山形1996などに詳しく論じられており、ここでは曾利式終末期に注目して、従来の主な編年の成果と問題点を指摘したい。

藤森栄一は八ヶ岳南麓における資料をもとに曾利式を設定し、5段階細分を行った(藤森1964、1965)。曾利V式は曾利IV式と後期初頭土器を型式学的に連続させる必要性から設定した型式であると述べている。型式内容の説明は、藤森独特の抽象的形容の文章であるが、提示された図版をあわせると、口縁部紋様帯が退化し、ハの字紋を主な地紋とした直線的に外反する琴形の土器群であると理解される。藤森の型式設定は、幾多の批判を受けることとなったが(長崎1973、米田1978)、曾利式土器の特徴を提示した意義は大きい。

米田明則は、藤森によって型式設定された曾利式に、より詳細な型式学的検討を加えた(米田1978)。器種毎に分類、系統化し、紋様構成、地紋、施紋具などの特徴を検討し、あらためて確認された曾利式5段階編年は、現在まで最も支持されている編年といえよう。曾利式土器は、沈線、条線地紋を土体とすると定義し、加曾利E式との共通点と差異を指摘したうえで、曾利V段階は藤森の曾利V式に対応し、渦巻紋の消滅、直線的に垂下する懸垂紋、蛇行沈線の消滅、櫛状施紋具による施紋、半截竹管の不使用などを特徴に追加し

ている。また、加曾利E III式、大木10式に併行する時間的位置づけをしている。

1980年の神奈川考古同人会主催のシンポジウム「縄文時代中期後半の諸問題」で、木本、米田、長崎らは八ヶ岳山麓を中心とした資料を集成し、曾利式の編年とともに加曾利E式編年との併行関係を論じている(木本ほか1981)。曾利式の変遷観は基本的に米川(1978)を踏襲するものであるが、敷島町金の尾遺跡2号特殊土坑出土資料を基礎に、曾利V式が新旧2段階に細分される可能性があることを付け加えている。また、蛇行沈線紋が一部に残存することを認めている。本シンポジウムでは戸田哲也が神奈川県内の事例をもとに、曾利V式2細分を支持するとともに加曾利E IV式終末以前に曾利式が終焉したことを主張している。

木本健は、曾利V式が区画紋の施紋手法、懸垂紋、区画紋の種類により3細分される可能性を示唆している(木本1981)。すなわち、縦帶をもって区画紋を表すものは古相で、沈線によるものが新相であるという。また、II字懸垂紋、逆U字懸垂紋は古相、II形区画紋が新相、区画紋のないものが最新相としている。曾利式と加曾利E式の終焉は同時期としている。

1986年、1987年は曾利式上器編年にとって重要な遺跡の報告書が相次いで刊行された。米田明訓は柳坪遺跡など八ヶ岳山麓の資料を中心に曾利式を9細分する編年案を提示した(米田1986)。曾利V式にはVII~IX段階をあて、3細分している。VII段階はハの字紋を多用し、蛇行沈線が消失し、共伴する加曾利E系土器は口縁部紋様を消失するとしている。VIII段階では加曾利E系土器は断面が半円形の隆帯による施紋がみられること、曾利式に施紋される沈線は浅く幅広い沈線に変化すること、区画紋が衰退する、などの特徴を挙げている。IX段階は加曾利E系土器に断面が三角形の隆帯が施紋されること、区画紋が消失すること、沈線は細く施紋が難になること、牛哉竹管を使用することとしている。

小野正文は丹戸尻編年以来の曾利式5段階変遷觀を大きく見直す変遷觀を示した(小野1987)。曾利I、II式にみられる、条線地紋に隆帯を貼付した大型深鉢を主体とする曾利古式と、加曾利E式などの影響を受け口縁部紋様帯が発達し、小型深鉢が主体となる曾利新式、さらに曾利式終末と考えられる新々式からなる3段階の変遷觀がそれで、從来の曾利V式には相当する段階として曾利新式4段階を設定している。その特徴は、口縁部紋様帯が消滅寸前であること、嚴手紋をもつ加曾利E 3式が共伴することを挙げている。

木本はかつて3細分を指向したにもかかわらず、曾利式V段階をa、bに2細分するにとどめている(木本1988)。括れの弱い器形、ハの字紋の多用、懸垂紋の退行、加曾利E系土器の増加などをV段階の特徴とし、ハの字地紋が密に施紋されるか、粗雑な施紋に変わることによりa、bに細分している。

平林彰は曾利式土器編年を主旨として扱った論考ではないが、曾利V式を古段階、新段階、最新段階と3細分している(平林1990)。古段階は口縁部紋様帯の喪失、新段階では区画紋間隔が狭くなること、巻巻紋の消失、逆U字形区画紋の施紋、まばらに施されたハの字紋、ハの字紋施紋具の多様化、最新段階では括れのない器形、区画紋の復活、非常に間隔が狭くしたハの字紋をそれぞれ特徴として挙げている。V式古段階は加曾利E III式に併行し、最新段階では加曾利E IV式が併行するとしている。この論考では、曾利式最終末にみられる上器群を、加曾利E式上器の影響により曾利式が変容したものという見解を提示している点が注目される。

山形真理子は、小野(1987)が提示した変遷觀を踏襲、若干の変更を加えて曾利式3大別、6細分の編年案を提示する(山形1996)。口縁部紋様帯を主な指標とし、曾利V式に相当する曾利新3式の特徴を、括れの弱まつた直線的器形、沈線による渦巻紋、円紋、楕円紋による口縁部紋様、II形区画紋、粗雑な条線紋、兩垂列点紋、ハの字紋が豪華することとしている。新3式は加曾利E 3式に併行し、加曾利E式木まで存続しないとしている。さらに注目されるのは小野(1987)が新々式とした加曾利E 4式に併行する段階、すなわ

ち金の尾遺跡2号特殊土坑例を、金の尾段階として曾利式の範疇から外したことである。つまり加曾利E式に伴う曾利式の系統を残す土器であり、曾利式としての型式名を与えることはできないとの見解である。

曾利式終末の変遷觀を概観した。藤森の型式設定以来、口縁部紋様、地紋、器形、区画紋、懸垂紋、共伴する加曾利E式土器など、様々な要素から組分指標が示され、変遷觀については、口縁部紋様の退行と消滅、器形の直線化、区画紋の退行と消滅、地紋の粗雑化などが共通理解として認められることが分かる。その反面、米田（1986）にみられる曾利V式3細分と山形（1996）の1細分（金の尾段階を含めても2細分）など、細分数と終焉時期をめぐる加曾利E式との関係については相違が認められる。

ここで、曾利式土器編年の一応の到達点を示すと考えられる米田（1986）と山形（1996）の編年案に特に注目して指摘したいのは、両者の口縁部紋様帶の捉え方に大きな違いがみられることがある。米田は曾利式IV段階に発達した肥厚した口縁部をもって口縁部紋様帶と考え、曾利VII段階以降、口縁部紋様帶が消滅するとしているのに対して、山形は肥厚口縁に限定せず、ハの字紋を地紋にもつ土器にしばしばみられる渦巻紋や怡円紋、円紋の施紋を指して口縁部紋様と呼んでいる。この理解の差異が両者の曾利式終末期区分にどう影響したか。山形は新3式の細分の可能性を示唆する見解を示していないため、にわかに想像しがたい。

曾利式終末期土器群には少なからず渦巻紋など、山形のいう口縁部紋様がみられる。従来の研究が明らかにしてきたように、紋様要素の多くが省略退行し、変遷の指標を見いだすことが難しい曾利式終末期の土器を理解しようと試みるとき、最も情報量が多いと考えられる口縁部紋様をどのように理解し扱うかは重要である。資料が限定されていたことが七因であろうが、口縁部紋様は消滅したと理解し、それ以外の要素から曾利V式の細分を指向した米田案には、自ずから限界があろう。その一方で、口縁部紋様に注目しておきながら新3式以後の口縁部紋様の変遷に言及しない山形案にも不満を感じざるを得ない。

とはいって、藤森以来の5段階細分に拘泥せず、曾利式を勝坂式の伝統を残す古式段階と加曾利E式などとの交差を認め口縁部紋様帯を発達させた新式段階とに人別し、口縁部紋様の消長から新式を3細分する山形案は、なお細分の検討を深め、より精緻な編年体系へと発展させ得る可能性をもった卓見であると評価したい。そこで拙論でも山形案に沿って、口縁部に施された尚美紋、円紋、横円紋などを口縁部紋様と理解し、以下で新山資料を検討したい。

茅ヶ岳山麓における新出資料

以下に報告する新出資料は、筆者が調査に従事する茅ヶ岳山麓における事例である。いずれも正式な報告は未刊であり、未発表資料を用いての検討を心苦しく思うが、口縁部紋様を七軸とした変遷觀を提示するうえで欠かせない資料と考え、やや詳しく報告したい。

諏訪原遺跡24号住居跡の出土資料

明野村上神取に所在する諏訪原遺跡は縄文時代中期中葉から末葉の遺構を中心とした遺跡で、これまでに竪穴住居跡40軒ほどが検出調査されている。遺跡の概要については平成7年度年報に報告してあるので参照いただきたい（佐野1996）。ここに紹介するのは曾利式終末期と考えられる24号住居跡から出土した土器である。

24号住居跡は円形のプランをもち、山形1996の曾利新1式段階と考えられる28号住居跡と切り合っている。竪穴掘り込みは30cmほどが残存し、壁際の一部に沿って床面よりやや浮いて襖が検出されている。遺物は炉南方に正位の座卓が1基と、覆土下層から上層にかけて、検索されたと考えられる底部を欠いた土器や甕に

半裁した土器が多数出土している(第1図)。覆土は1層から11層が分層され、概ねレンズ状に堆積し、遺構を埋めていることが分かる(図3)。

出土状況について詳しく報告したい。遺物の分布は第1図に示したとおりである。24号住居跡は図上方で28号住居跡と切り合う。遺物の整理が完全に終わっていないため、確実に24号住居に伴うと考えられる資料のみを提示した。埋甕(1)を除く覆土出土土器は、炉から壁際に向かって散在している。住居中央からやや壁に寄った床面直上から3層と8層にかけて4、5、6、7、8、9が分布し、炉により近い、4層に10、13、14、15が分布している。11は斜めに立った状態で出土しており、底部が8層上面、口縁部が1層上面にかかっている。縦に半裁された状態で出土した16は壁際に近いが、覆土上部に近い1層で検出されている。12は炉石上で出土している。

ハの字紋地紋の口縁部紋様をもつ深鉢形土器に注目したい。1、3、4、10は胴部が緩く括れた波状口縁器形で、波頂部下に溝巻紋をもち、溝巻紋からは縦の長楕円紋、逆U字紋などが疊する。6も柳条状工具による縦条線の地紋であるが同様の口縁部紋様と懸垂紋をもつ。12は平口縁で口縁部には横方向の長楕円紋が施紋されている。1、4には区画紋はみられないが、波頂部間を区画するかに施紋された蛇行沈線と懸垂紋がみられる。

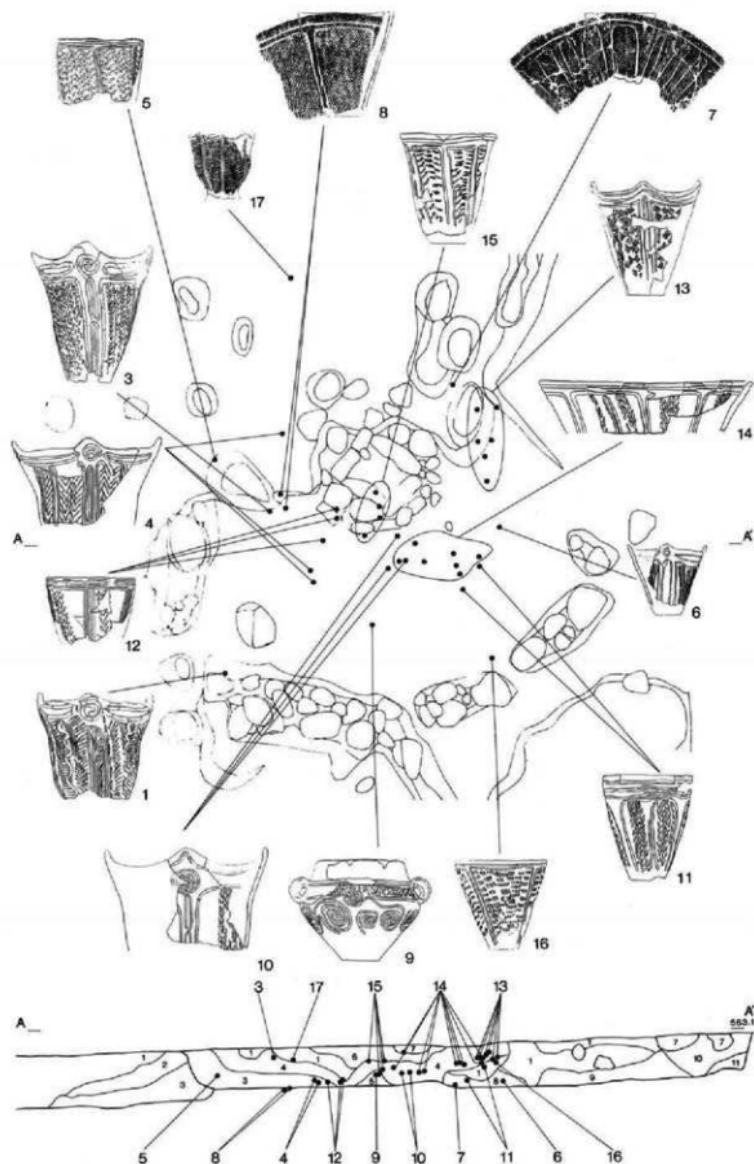
地紋に注目すると10、11、12、14に、区画紋内に空白部を大きく残して中央寄りに施紋された特徴的なハの字紋がみられる。ハの字紋は4が器底がある程度乾燥した時点で施紋した、やや浅く細いハの字紋であるほかは、しっかりと刻まれている。

24号住居跡以外では、24号住居跡の南6mほどに37号住居跡がみられ、正位の埋甕(第2図2)が検出されている。胴部が括れた波状口縁器形で、口縁部には沈線、溝巻紋、楕円紋が施紋され、溝巻紋下には蕨手状の縫部をもつU字形と逆U字形の懸垂紋をもつ。波頂部間を二分する区画紋が施放される。24号住居跡の東15mほどに44号住居跡が検出されている。24号住居跡に類似して、住居内に環状に窓が配される住居跡で、正位の埋甕が検出されている(第2図18)。この直線的器形の埋甕には、やはり又区画内に大きく空白を残した特徴的なハの字紋の施紋がみられる。

諫訪原遺跡の出土遺物の全てを検討、提示したわけではないため、都合の良い資料のみを選び出したとの観念を払拭し得ないが、24号住居跡については小器片まで含め十器を一通り検討したことを断っておきたい。そのうえで以上の資料から諫訪原遺跡における菅原式終末期の土器の変遷を考えたい(第2図)。

まず、出土状況から埋甕、覆土下層出土土器、覆土中層出土土器、覆土上層出土土器の順に変遷することが当然のことながら想定される。

埋甕はやや調部が括れる器形、深く削んだ長めの沈線地紋、口縁部の溝巻紋、横方向の楕円紋、溝巻紋から重する二重の逆U字紋、蛇行沈線が特徴とされる。覆土下層出土の4は埋甕と同様の特徴を持つが、蛇行沈線は無く、字紋はいわゆるハの字形へと完成している。溝巻紋下の懸垂紋には蕨手状紋がみられることにも注意したい。覆土中層部出土の10は口縁直下の横方向の楕円紋が波状口縁に沿った弧線紋に変化し、ハの字紋は1のように密に施紋されていない。一見して44号住居跡埋甕と同じ独特の施紋であることが分かる。覆土上層出土の13は柳条状工具によるハの字形に配された短条線紋を地紋とし、溝巻紋はみられないが、10と同様に口縁直下に弧線紋が施紋される。14も区画紋内にまばらに施紋される獨特のハの字紋をもつ。10、11、12、14は出土した高さに若干の差がみられるが、概ね24号住居にまず堆積した3層の上位に堆積した4層から出土し、44号住居跡埋甕と共に持つ獨特なハの字紋を施す共通点がみられる。この特徴的なハの字紋施紋はほかの遺構出土土器中にはみられず、10、11、12、14は、44号住居から24号住居へと施用された可能



第1図 諏訪原遺跡24号住居遺物出土位置図（縮尺不同）

生が高いと考えている。

第2図は以上の検討をもとに、土器の変遷をまとめてみたものである。上段から下段へと変遷すると考える、3は4層上部で出土しており、新相とした土器群に近い時間的位層が考えられるが、口縁部紋様、ハの字紋などの型式学的特徴はむしろ2や4に近いことから、古相を示す群に含めた。

以上をまとめると、口縁部紋様は渦巻紋と楕円紋の組み合わせから、渦巻紋と弧線紋、12にみられる楕円紋のみの紋様へ、地紋は理窓にみられる長い沈線から3、5の密な施紋、さらに10、11、12、14、18のやや穢らな施紋へ、器形は胴部が緩く括れる器形から18の直線的な器形へと、それぞれ変遷したことが推測される。

屋敷添遺跡の出土資料

屋敷添遺跡は茅ヶ岳西端の段丘面上に位置し、縄文時代中期初頭から後期中葉、平安時代の集落遺跡である(佐野1992)。曾利式終末期に該当する遺構は、25号住居跡、34号住居跡、50号土坑などがある。これらの遺構から出土した資料は第3図に示した。1～3は25号住居跡出上で、1が埋甕、2は炉跡直上、3は炉跡付近の覆土下層から出土している。1は荀齒状工具による羽状条線紋を地紋とし、蛇行沈線が垂下する。2は低い陣布でU形区画紋が施紋され、やや浅めに刻まれたハの字紋が施紋される。4～6、9は34号住居跡から出土し、4は埋甕である。10～14は34号住居床下から検出された3基の土坑より出土している。7は34号住居近くの土坑から出土している。34号住居も渉谷原遺跡24号住居、44号住居に似た、壁際に櫛や石器をめぐらせる敷石住居状の遺構である。15は遺構外出土遺物、16は50号土坑より出土している。

これらの遺構は渉谷原遺跡のような出土品全点の位置記録を採らなかったため、同じ精度で検討することは残念ながらできない。それでも以下の点が指摘できよう。

まず、34号住居跡および土坑出土土器の口縁部紋様帯に注目すると、飯能原遺跡でみられた渦巻紋、楕円紋が全くみられず、代わって5、10、15、16に沈線あるいは低縦帶の弧線紋がみられる。これは口縁部紋様が飯能原遺跡よりさらに退化した結果とみることができる(図1)。

懸垂紋では25号住居埋甕以外に蛇行沈線はみられず、逆U字形態華紋や旋方向の楕円紋、蓋手状紋もない。地紋は2、4で密に施紋したハの字紋が観察されるが、8、9、10、11、16ではやや疎らに、しかも長く間延びしたハの字紋が施紋される。実測図では刻みの深さまでは表現できないが、前者より後者の方が浅くか細い施紋に変化している。

器形は2以外に胴部が括れた器形はみられず、直線的に外反する器形が多く、10の口縁部がやや内湾する器形、16の胴部下位がやや膨れた器形が登場している。

X字状把手付大型深鉢は紋様構成、器形、地紋について3から9への変化がみてとれる。

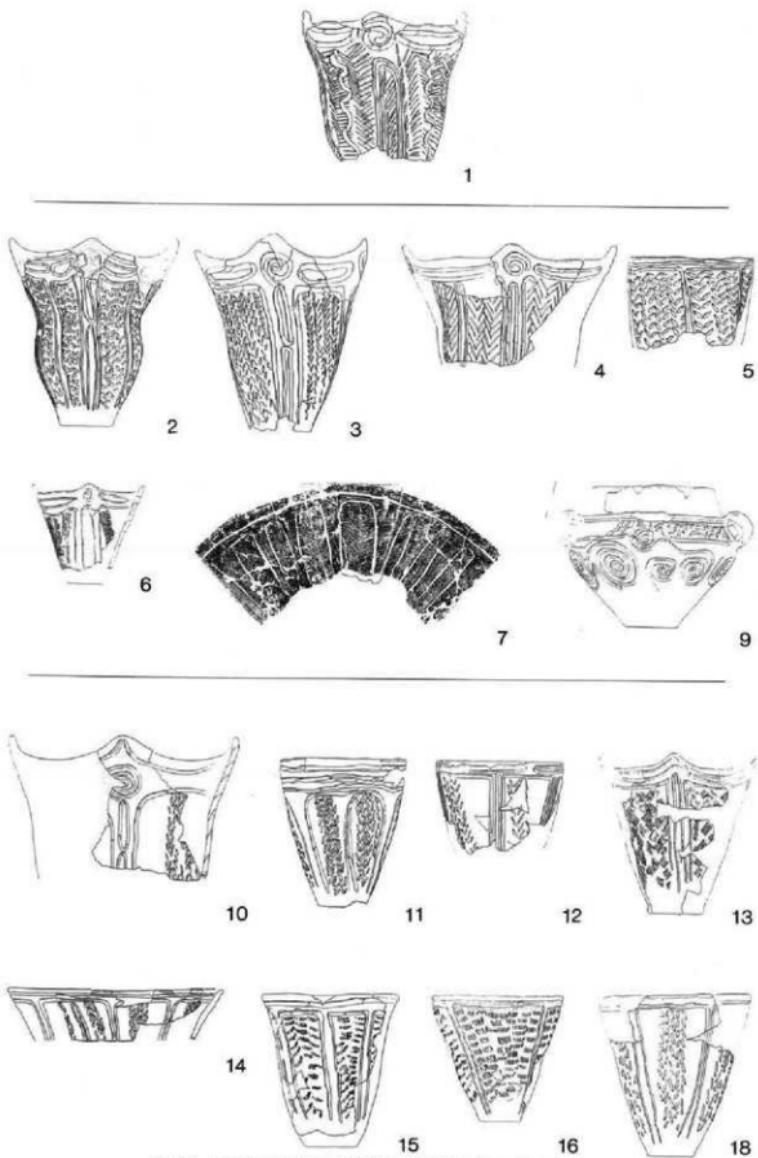
屋敷添遺跡では、微略起線による加曾利式IV式土器が遺構を伴って出土しているが、それらはここで挙げた曾利式土器とは出土地点を異にし、34号住居跡でも曾利式と伴出していない。

変遷指標の設定

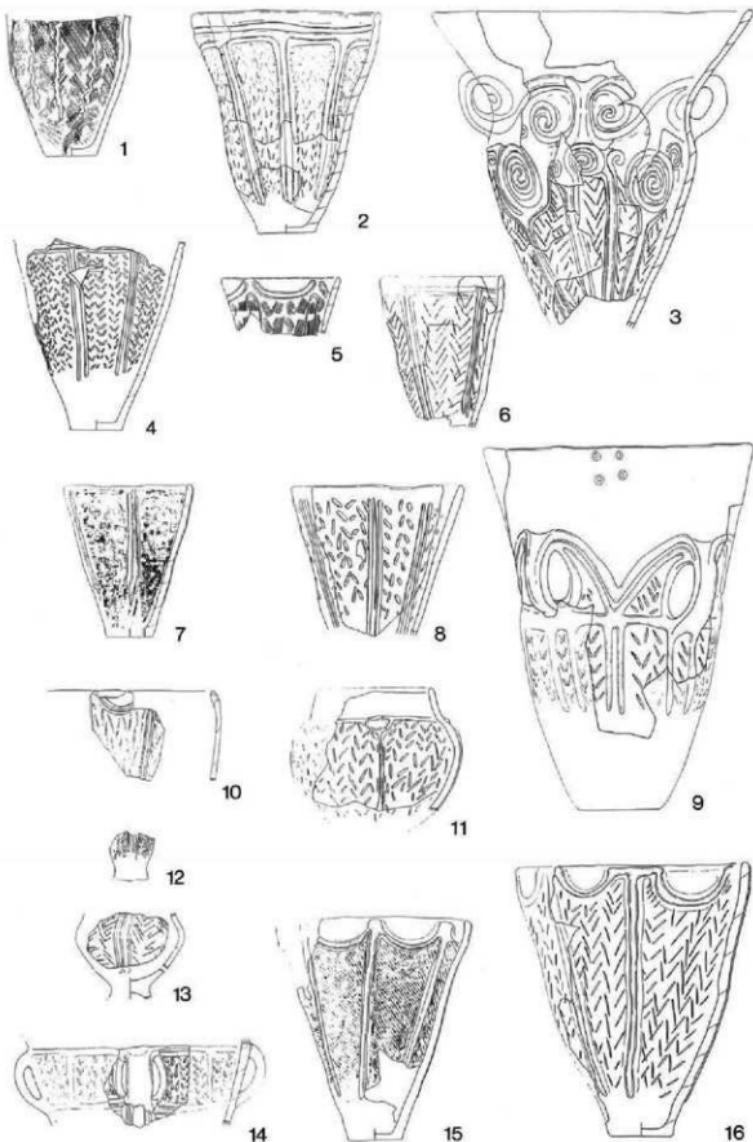
渉谷原遺跡と屋敷添遺跡の出土資料から抽出された曾利式終末期の変遷を示すと考える指標をここで設定しておきたい。

口縁部 細縁部紋様帯は渦巻紋、楕円紋の組み合せが古相を示すと考える。さらに楕円紋のみ、あるいは

絞様帯 は渦巻紋と楕円紋の退化形態と考えられる弧線紋の組み合せが新相を示す。さらに弧線紋のみの口縁部紋様帯が最新相を示す。



第2図 諏訪原遺跡における曾利式終末期土器の変遷（縮尺不同）



第3図 屋敷添遺跡出土の曾利式終末期土器（縮尺不同）

地紋 ハの字紋は強く刻まれた長めの沈線紋が初現的形態を示し、次に密に施紋された、いわゆるハの字紋を形成する。この段階のハの字紋は深めに強く刻まれたものが多い。ハの字の形は小ぶりで整ったものが多い。新相ではハの字紋の施紋が大きくやや疎らになり、刻みも浅く細くなる。ただしハの字紋の刻み方は、土器制作の際どの粒度器面が乾燥した時点で施紋するかなど、型式学的要素外の作用を多分に含み、地紋で古相、新相を一律に判断し得るかの評価は保留したい。

懸垂紋 古相では逆U字紋、縱方向の楕円紋、それらと獣手汎紋の組み合わせなどがみられる。蛇行沈線紋も存在する。新相では尾敷添遺跡のように縦に垂下する区画紋とも懸垂紋とも判断できない波線、陰帯に変化する。戻手状紋がみられる。

区画紋 古相の区画紋はII形区画紋、横二列に並んだII形区画紋、区画紋のない事例など多様である。一方、尾敷添遺跡ではII形区画紋がみられるものの、全般に退行傾向を示すと考える。

器形 古相では頸部がやや括れた器形が多い。ただし、口縁部紋様をもたない器形では直線的に外反する器形もみられる。新相では頸部の括れた器形が減少し、直線的器形が主体となる。尾敷添遺跡ではさらに口縁部が内湾する器形、胴部下位が膨れた器形が登場する。

以下ではここに挙げた変遷指標をもとに、とりわけ口縁部紋様帶の変遷を主軸に据え、八ヶ岳南麓と茅ヶ岳山麓の土器群の変遷を検討し、編年案を提示してみたい。編年表に用いた資料は、遺構単位の出土事例を可能な限り用いるように心がけた。

編年案の提示

編年案を提示、検討する前に、編年の主軸となる口縁部紋様をもつ上器について概観しておきたい。

第4図には八ヶ岳南麓における主な口縁部紋様を有する土器を示した。先述したとおり、口縁部紋様は基本的に渦巻紋と楕円紋の組み合わせ、渦巻紋のみ、楕円紋のみ、そして弧線紋のみの4通りから成ることを確認していただけるかと思う(註)。

さて、第5図に編年案を提示する。先述したとおり拙説では山形の編年案を補足する形で曾利新3式を3細分し、その後に金の尾遺跡2号特殊土坑例を新4式として付け加えた。各段階を実線で区切ったが、段階内の上器配置の上下は文中で特に指摘の場合以外は、基本的に古相、新相を意識していないことを断っておきたい。編年表に提示した上器の出土遺構名は本文に付す。

曾利新3式古段階（第5図1～39）

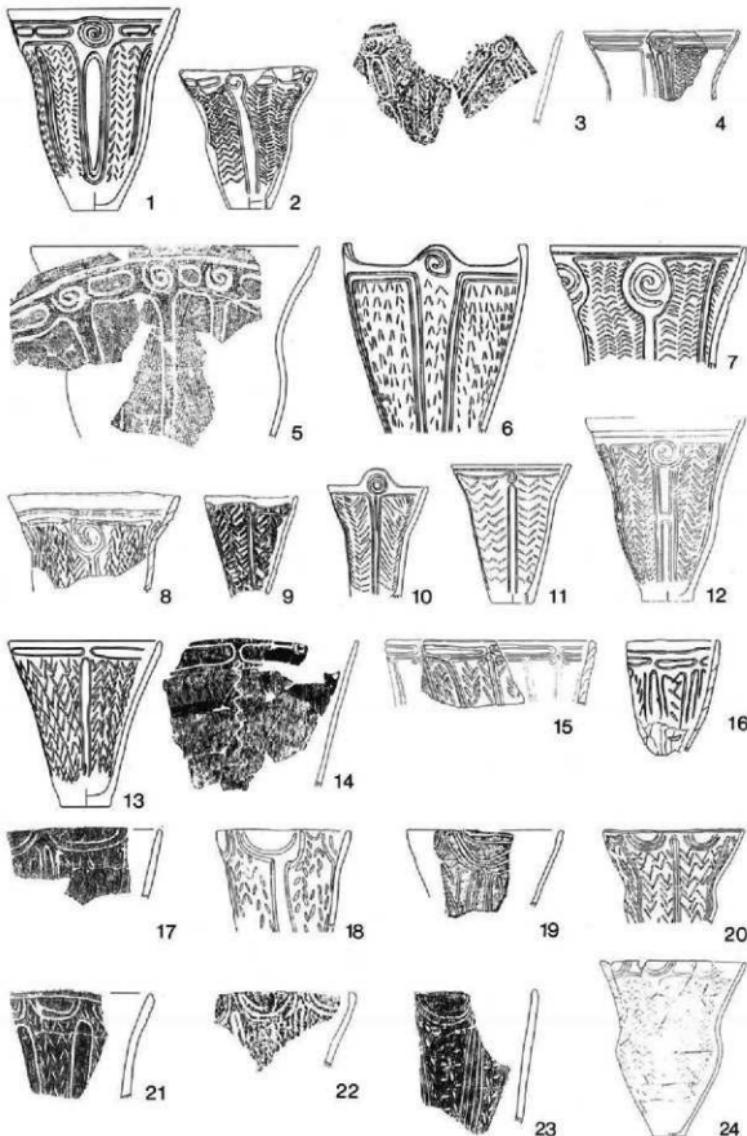
口縁部紋様帶に渦巻紋と楕円紋をもつ深鉢形土器とそれに共伴する器種からなる。以下に深鉢を主体とした特徴を変遷の指標として記す。

口縁部紋様

渦巻紋と楕円紋の組み合わせを基本とするが、渦巻紋のみもみられる。3にはさらに口縁に沿った沈線が施紋されている。5、8、11の口縁部紋様は渦巻紋のみである。区画紋施紋域に取り込まれた渦巻紋は、曾利新2式から存在する。古相を示す特徴として古段階に位置づけた。5、8は渦巻紋同士が連結し、山脇1996のいうつなぎ弧線の残影を感じさせる、やはり古相を示す特徴と考えられよう。4、5の渦巻紋は低茎帯で施紋され、沈線によるものより古相と考える。

懸垂紋

蛇行沈線紋はこの段階に確実に存在する。八ヶ岳南麓域で現在報告されていて、紋様構成が判明するハの字紋地紋土器は80個体ほどあるが、うち10例ほどの蛇行沈線紋施紋土器を指摘することができる。前段階に



第4図 八ヶ岳南麓の口縁部紋様をもつ土器 (縮尺不同)

ほとんどの土器に蛇行沈線紋が施紋されていたことと比較すると、減少傾向にあることは間違いないが、なお1割以上の土器に蛇行沈線紋が施紋されることから、蛇行沈線紋の消滅をもって曾利式終末期の糾分指標とすることは、適切ではないと考える。

麻手状紋もこの段階から目立つようになる。山形1987では曾利新式4段階に麻手状紋をもつ加曾利E III式が併行するとし、山形（1996）でもその考え方を変更していないようである。麻手状紋がこの段階から曾利式土器に受容され登場することができる。しかし、麻手沈紋をもつ加曾利E III式はより早い段階から曾利式土器圏に登場しており（註4）、曾利式土器への麻手状紋の施紋はより早い段階から存在する可能性もある。従って、ここでは麻手状紋が目立つようになるとだけ指摘しておきたい。

懸垂紋ではその他、縦方向の横円紋、細い逆U字紋とU字紋、両者が組み合ったH字紋（3、8、9、21、25、27）などがみられる。

区画紋

区画紋はH形区画紋を基本とする。14、15は低隆帯による区画紋で、沈線による区画よりも古相を示すと考える。1、6のように区画紋が施紋されない例も散見されるが、その場合は懸垂紋が区画の役割を代替している。

地紋

地紋にはハの字紋、櫛齒状工具による条線紋、繩文がみられる。

ハの字紋は傾向として、小ぶりで整ったハの字紋が密接して、深くくっきりと刻み込んだものが多い。1、2、12、13は長く強く刻んだハの字というより短沈線という方がふさわしい地紋で、櫛齒状工具による矢羽状条線紋をヘラ施紋の沈線に置換したと見なすことができる、初現段階のハの字紋と考えたい。19は丸みのあるハの字紋であり、古段階のハの字紋は多様であるといえる。

条線紋は矢羽状、蛇行するもの、直行するものがある。概して前段階と比べて施紋長が短く、短条線になる傾向がある。22のようにヘラ状施紋具で条線紋風に施紋するものもある。29は矢羽状に組み合わせた条線紋が一区面内に2対並んでいるが、ハの字紋風に短条線紋を施紋するものが多くなる。

器形

胸部に縫い折れのある器形と直線的に外反する器形とがある。直線的器形はこの段階から多くなる。波状口縁と平口縁とがあり、波状口縁の土器には渦巻紋など口縁部紋様が施紋される。20、27など、器形の直線化は条線紋を地紋とする土器により早くみられるようである。

その他の器種

X字状把手大型深鉢は互いに連結したX字状把手と1本低隆帯で施紋される腰部渦巻紋が特徴である。器形は頸部の折れがはっきりしている。ハの字紋、矢羽状条線紋が地紋に施紋される。胸部に渦巻紋をもつ両耳壺もこの段階と考える。35の壺種が登場する。

伴出する加曾利E式

柳坪遺跡B区3号土坑で、垂下する併行沈線が施紋される40、41が、疎らな施紋のハの字紋地紋土器と伴出している。大泉村姥神遺跡12号住居ではやや古相だが同様のタイプの加曾利E III式土器が20と並んで埋甕として出土している。この垂下する併行沈線をもつ加曾利E式土器はE III式からE IV式にかけて存在するが、垂下する併行沈線の磨耗し部は、新相ほど広がる傾向があることが指摘されている（谷井ほか1982）。40、41は伴出するハの字地紋七器の特徴から中段階まで下るものと考えられるが、基本的に加曾利E III式が古段階に併行すると考えたい。

曾利3式中段階（第5図42～66）

深鉢形土器の口縁部紋様に省略化傾向が強まり、溝巻紋のみ、横方向の楕円紋のみの口縁部紋様が登場する段階である。

口縁部紋様

42は古段階の特徴を強く残しながらも、楕円紋が欠落し、弧線紋のみが残っている。53も同様である。省略化は楕円紋、溝巻紋の欠落、あるいは両者の欠落の場合があり得た。45は楕円紋が欠落し、43などは溝巻紋が欠落した結果である。この3通りの欠落パターンに時期差が認め得るのかは現時点では判断できない。

懸垂紋

懸垂紋は省略化が進み、逆U字紋が主体となる。42の楕円紋が重なる懸垂紋は前段階の様相を残しているが、こうした懸垂紋は減少傾向にある。50、52のように蛇行沈線紋が僅かながらこの段階まで残存する。

区画紋

II形区画紋を基本とする。低隆帯による区画紋は消滅する。区画紋をもたない土器が共存するのは古段階と同様である。逆U字形の区画紋（48）が少数ながら登場する。

地紋

諫訪原遺跡24号住居跡例などは独得な施紋で、決して典型例とはいえないが、42、43、48、49に如実に表現されているように、ハの字紋列が減少し、密接に施紋するものは少なくなる傾向が認められる。ハの字形はまだ崩れない。条線地紋の特徴は古段階と同様である。

器形

肩部がやや括れた波状口縁土器は減少し、平口縁で直線的な器形が主となる。口縁部紋様の省略、とりわけ溝巻紋の欠落と同時進行した変化であろう。この段階から口径が40cmをこえるような大型の深鉢が散見されるようになることも注目される。

その他の器種

X字状把手付大型深鉢は、X字状把手の連結が無くなり、把手間は溝巻紋が欠落して方形区画紋に変化する。胴部溝巻紋も消滅し、車下する低隆帯などとハの字紋、条線紋が地紋に施紋されるのみとなる。頭部の括れが過まり、より直線的な器形へと変化する。器形の変化とともに把手も扁平化する。川又南遺跡の63、66は並んで出土した埋設土器であり、溝巻紋が消失した63と、溝巻紋が残存するが頭部の方形区画紋が崩れ、直線的器形になっている66との前後関係が注目される。ここでは66が新相ながら、溝巻紋が一部に残存すると考えておきたい（図7）。

両耳壺もX字状把手付大型深鉢に似た変化を示す。腹部の溝巻紋が消滅し、把手間は古段階に比べて簡略化され、楕円の区画紋に変化する。把手もやや扁平化する。

併出する加曾利E式

柳坪遺跡B区13号住居跡でハの字列が1列しか施紋されない深鉢と67、68が、また旗無遺跡では44と69が併出している。在地化しているものの67は、横位の波状沈線を胴部に施紋した加曾利E式系の土器と考えられる。55は縄文地紋で口縁部紋様に楕円紋と円紋が施紋される。加曾利E III式と曾利式の折衷した土器と考えられ、編年表のこの位置に置くのは不適切であるかも知れないが、いずれも加曾利E III式との併行関係を示す事例と考える。70は、66、72、77とともに検出された埋設土器群のひとつで、中段階ないしは新段階に併行すると思われる。

曾利新3式新段階（第5図71～85）

深鉢形土器の口縁部紋様に弧線紋が登場する段階である（註1）。

口縁部紋様

口縁部紋様は弧線紋が主体となる。渦巻紋は消滅する。管見に触れた弧線紋と併生する横円紋の事例は、八ヶ岳南麓域では知らない。しかし、大月古中谷遺跡では併出例があり、横円紋はこの段階に一部残存すると考えておきたい（註2）。

懸垂紋

逆字紋、垂下沈線、垂下隆帯がみられ、全般に省略化が進む。

区画紋

II形区画紋を基本とするが、区画紋が省略された土器が多くなる。区画紋の有無をもって時期差を考え得るかの判断は現時点では避けたいが、省略傾向は指摘しうる。

地紋

ハの字紋はさらに大きくなり、疎らになり、浅く弱い施紋が多くなる。条線地紋の土器は減少するようである。77のようなハの字形が崩れた施紋は新規を示すと考えられよう。

器形

直線的な器形に加えて、調部が強く括れる器形、調部下位が彫れる器形が登場する。波状口縁は八ヶ岳南麓域では今のところみられない。口縁部紋様は、大型の深鉢形土器に多い傾向がみられる。

その他の器種

X字状把手付大型深鉢は把手間の区画紋が崩れる。器形はより直線的となり、把手も扁平化する。胴部に施紋されるハの字紋は疎らになる。

両耳壺は頸部紋様が横走隆帯のみになり、疎らなハの字紋が地紋に施紋される。82は破片資料で、把手の有無は不明である。83の加曾利E式の両耳壺がこの段階から登場する。84のような器種もこの段階に存在すると考える。

併出する加曾利E式

次節構造跡47号土坑で弧線紋を口縁部紋様にもつ74と86と同じ対向U字紋を施紋する加曾利E式上器が併出している。加曾利E式上器編年ではこうした土器を加曾利EIII式とするかEIV式とするかで見解が分かれているため、ここでは加曾利EIII式後半からEIV式前半が併行するとしておきたい。

曾利新4式（第5図87）

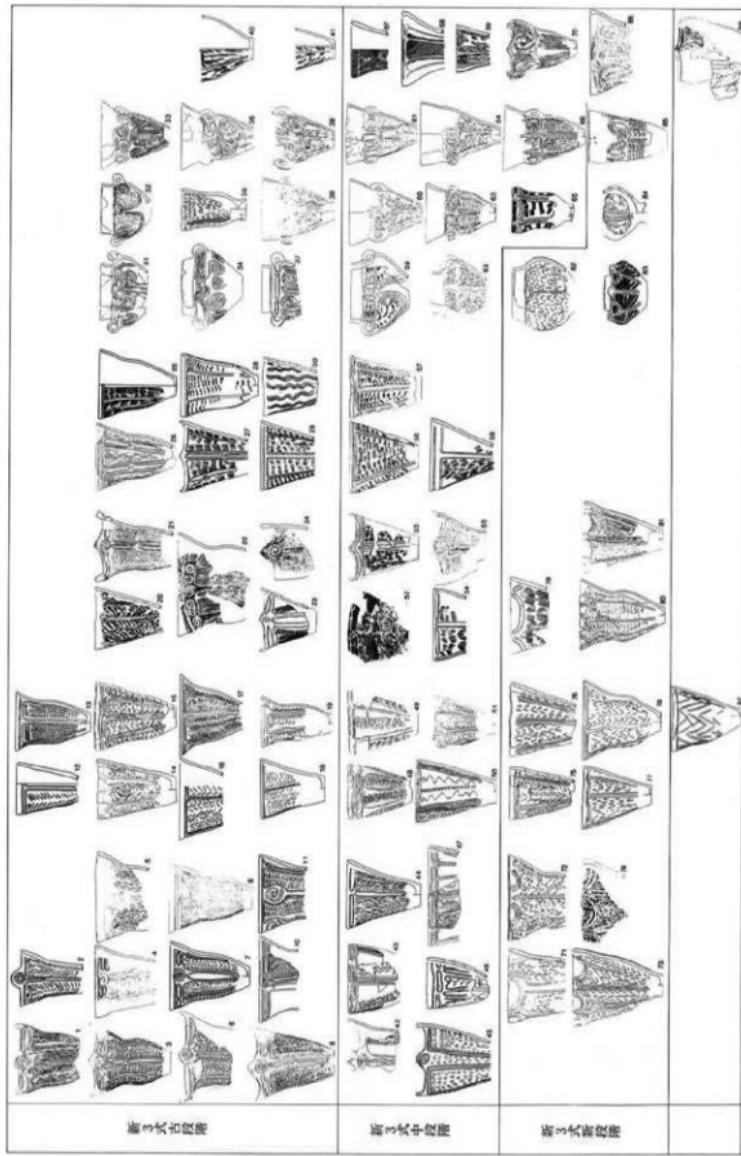
山形（1996）のいう「金の尾段階」に相当する。口縁部紋様、懸垂紋、区画紋が消失し、ハの字紋は大きく崩れる。現在のところ、深鉢形土器以外の器種は知られていない。

おわりに

やや冗長に過ぎたが、口縁部紋様を主軸にした曾利式終末期の変遷を、筆者なりに考察してみた。ここで今後に検討されるべきいくつかの問題点を指摘しておきたい。

まず、曾利式終末期に限らず上器の変遷を検討するに際しては、遺跡調査時に出土位置、状況を可能な限り正確に記録することの必要性を痛感する。拙論は源助原遺跡24号住居跡資料の出土状況から着想したが、編年表を作成するに際して、土器の出土状況の検討ができない遺跡が間々あった。ひどい場合には埋葬以外

第5图 贝利斯3式隔牙表 (缩尺不同)



の土器の出土位置の記述すらない報告がある。豊穴住居埋没の過程と時間幅を明確に説明できない場合が多いだけに、そうした記録を極力報告してほしいと思う。

また、源助原遺跡に限らず、上器の紋様には遺跡独自ともいえる特徴がみられることがある。八ヶ岳南麓といった地域単位の編年検討以前に、まとまった資料が得られた場合には遺跡内での土器の変遷を検討することが重要であるように思う。そうした積み重ねがより正確な編年体系の構築に寄与することはいうまでもない。

さて、拙論では、山形の「金の尾段階」を曾利新4式として扱ったが、妥当であろうか。その評価は、個々の研究者が87のような土器を曾利式と考えるかどうかにかかっていよう。87は口縁部に横走沈線、腹部に半斜竹管による間延びしたハの字紋を施紋し、やや歪んでいるが70と同じく胸部下位が膨れた器形である。新3式の変遷の延長上に位置する紛れもない曾利式土器と考えて良い。山形（1996）においても「崩れたりとはいえ……曾利式系統の土器」と考えている。

にもかかわらず、この段階を細分型式と考えることに躊躇するのは、筆者も同様である。それは87のような上器の出土事例があまりに少数で、かつ加曾利E式土器が圧倒的に卓越するためであろう。しかし、型式学的思考に則った細分型式と、実際にその細分型式を時間の尺度として評価、利用することは、別問題であり、やはり一網分型式を与えておく方が妥当と考えている。

この段階は曾利式と加曾利E式の終焉が同時期であるか否かの問題とも関連している。山形（1996）が明示したとおり、八ヶ岳南麓域でも郷藏地遺跡1号住居跡例のように曾利式を伴わない加曾利EIV式段階があることは明らかであり、筆者も曾利式は加曾利E式に先立つて終焉したと考えている。しかし、山本孝司は神奈川県新戸遺跡資料の検討から、曾利式は中期終末まで存続すると結論づけている（山本1992）。平林の指摘にもある姿容した曾利式系統の上器、西関東地域における在地化した曾利式様の上器をどのように評価し、編年的位置づけていくべきか、型式としての曾利式土器の消長を考えるうえで、避けて通ることのできない課題であろう。

時間の尺度としての編年の有効性を高めるのであれば、終焉問題よりもここに提示した各段階と加曾利E式との併行関係をさらに追究する方が有意義である。拙論でも新3式占段階から新段階に併行する加曾利E式に不明瞭さを感じている。八ヶ岳南麓域に良好な資料が欠けていることが大きな理由であるが、加曾利E式当体の編年にある混乱も原因である（註10）。曾利式と加曾利E式の併行関係については、八ヶ岳南麓資料の検討とともに、中谷遺跡、大月遺跡など最近調査事例が増えつつある甲府盆地東部の正式な報告を待って再検したいと考えている。

秋迦堂遺跡後の甲府盆地東部の新資料は、盆地東部と西部の地域性をより明確にすることにも寄与するであろう。中谷遺跡資料の実見を通して、当然予想されることではあるが盆地東部域では加曾利E式の影響が強く、口縁部紋様、又彫紋、器形などに、八ヶ岳南麓域とは人きな違いが生じていることに気付かされた。この点についても稿を改めて再論したい。

なお、拙論を配すにあたっては伊藤公明、今福利恵、閑間俊明、柳原功一、小宮山隆各氏から有益なご教示、ご指摘を得た。雨宮正樹、伊藤正彦、笠原みゆき、小池岳史、長沢宏介、福島邦男、保坂康夫、守屋昌文、山下孝司各氏には、資料実見に照して便宜を受けた。金川道、恩田勇、柏木善治、栗原伸好各氏には参考文献入手に際してご高配を受けた。末筆となつたが、記してそのご厚意に感謝したい。

本文の引用参考文献一覧からは文中で引用した以外の遺跡発掘調査報告書を割愛させていただいた。紙数の制限とはいえ非礼をお詫びしたい。

註

- 註 1 例えば高根町次郎構遺跡では10軒ほどの曾利式終末期の住居跡が検出されており、全てが曾利V式、米田1986の第VII段階あるいはVIII段階、小野1987の曾利新式4段階、山形1996の曾利新3式に位置づけられる。これまでの中期木梁の遺跡の在り方をふまると、曾利式終末期に10軒の住居が併存したとは考えにくく、いくつかの時期に区分されるべきものと考える。また、著者が発掘調査に従事する寺ヶ岳山麓では中期木梁の敷石住居に類似した遺構が複数検出されているが、それらを類例と比較する際に、もっとも細分した米田1986案におけるVII段階以降の内容が不明瞭であるため、時間的な位置づけができるないでいる。(雨宮1996、佐野1992、1996)
- 註 2 いわゆるハの字紋は、橢円状工具による矢羽状条線地紋と隣帯による口縁部紋様帶地紋が主体をしめる曾利IV式に相当する段階から登場する。例えば蘿崎市治尻遺跡第27図237などがそれである。拙論でも初現段階のハの字紋を想定しているが、あくまでハの字紋が地紋の主体となる段階をもって曾利式終末期と考える。
- 註 3 第1回覆土層位は次のとおりである。
- 1 層しまりのない黒褐色土
 - 2 層しまりのない黒褐色土に黄褐色土:ブロックが混じる
 - 3 層ややしまった暗褐色土に黄褐色土粒子が混じる
 - 4 層しまりのない黒褐色土に灰、焼土粒子がわずかに混じる
 - 5 層しまりのない黒褐色土
 - 6 層しまりのない暗褐色土
 - 7 層耕作土
 - 8 層ややしまった暗褐色土に黄褐色土:粒子が混じる
 - 9 層ややしまった暗褐色土
 - 10 層しまりのない暗褐色土に黄褐色土ブロックが混じる(別遺構の覆土)
 - 11 層ややしまった黄褐色土(別遺構の覆土)
- 註 4 米田明訓は桃坪遺跡4区疊層出土資料の検討から、同様の変遷を明らかにしている(米田1986)。
- 註 5 4、15は高根町次郎構遺跡報告書に原本で報告された上器を実測したものである。実測にあたっては高根町教育委員会向井正樹氏の了解を得た。
- 註 6 蘿崎原遺跡28号住居は24号住居に切られる、曾利新2式段階の住居跡で、覆土より蔽手状紋をもつ加曾利E III式土器片が出土している。28号住居覆土上にハの字紋地紋の土器片はあまりみられない。次郎構遺跡4号住居跡では、地紋に矢羽状条線地紋を施した、加曾利E III式との矢羽状地紋が出土しており、蔽手状紋が施されている。搬出する土器から曾利新2式段階と考えられる。
- 註 7 方城第一遺跡1号配石出土土器とそれに類似した川又南遺跡出土土器も中段階から新段階にかけての時期に置かれるに判断したい。
- 註 8 弧線紋の系譜については、これまで言及されたことがなかった。拙論でも明らかにしたとおり、弧線紋は曾利式終末に登場する口縁部紋様で、逆弧紋土器からの系統を追及することはできない。その系譜は、つなぎ弧紋、横円紋などの口縁部紋様の退化形とするか、あるいは併行する加曾利E III式の対向U字紋土器からの影響とするか、どちらかを想定することが妥当と考える。前者の場合、星敷池遺跡34号住居跡の事例(第3図5)を挙げることができる。後者の場合については、弧線紋から垂下する懸垂紋の施紋位置には、弧線紋が接触する位置から垂下する場合と、弧線紋の頭が下がりきった、中央部から垂下する場合があることに注意したい。つまり、加曾利E式の対向U字紋土器には、U字紋が入り組む場合と向き合う場合とがあり、曾利新3式新段階の弧線紋

の二様に対応する。どちらが妥当であるか、現時点での判断はできないが、中谷遺跡5号住居には弧線紋の系譜を考えるうえで、興味深い土器がみられる。正式な報告を待ちたい。

注9 中谷遺跡12号住居跡出土土器は口縁部弧線紋を主体とし、それらとともに横円紋をもつ土器が1点出土している。出土状況の詳細は未報告のため不詳だが、共伴する可能性は高いと考える。なお公表前にもかかわらず、中谷遺跡資料実見を快諾下さった山梨県埋蔵文化財センターの長沢宏昌、並原みゆき両氏のご厚意に感謝したい。

注10 前田秀則らは町工市木曾森野遺跡報文で、曾利V式の型式としての存在意義に疑問を呈している（前出1993）。前田らの見解に立つて加曾利E式に併行する曾利式は存在しないわけであるが、それを曾利V式空洞化と表現することは妥当であろうか。曾利式と加曾利E式は互いに強く影響し合いながらも、個別に変遷したと考えられる。確かに曾利V式は、前田らが指摘するとおり、曾利IV式が退行していく過程に過ぎないとみることも可能である。しかし、拙論で示したとおり、割分型式として設定しうる実体をもっているのも事実であり、曾利V式の存在意義は確かに認められると考えたい。そのうえでより重要なのは、加曾利E III式がIV式へと変遷していくのに併行して、曾利V式（拙論の曾利新3式）が急速に退行化の方向で変遷し、加曾利E式に先だって終焉を迎えることを確認することであろう。

第5回引用資料一覧

2、12、16長坂町柳坪遺跡B区16号住	4大泉村大和出第2遺跡遺構外	5、14、20、21大泉村姥神遺跡12号住
7長坂町頭無遺跡3号住	8小瀬沢町中原遺跡5号住	10、25高根町次郎橋遺跡6号住
11、16、17、54頭無遺跡1号住	18、29頭無遺跡10号住	19、30次郎橋遺跡2号住
22、31、32蔚崎市北後田遺跡A区8号住	24蔚崎市宮ノ前遺跡遺構外	26、27、28頭無遺跡2号住
35北後田遺跡A区5号住	36、38、39、60、61、64、80蔚崎市後田遺跡C区2号配石	
37、45柳坪遺跡B区3号住	40、41柳坪遺跡B区3号土坑	44、58、69頭無遺跡16号住
46次郎橋遺跡3号住	47、65次郎橋遺跡49号土坑	50、55次郎橋遺跡181号土坑
52次郎橋遺跡12号土坑	59、62次郎橋遺跡94号土坑	63、66、70、72、77須玉町川又南遺跡
67、68柳坪遺跡B区13号住	71須玉町柳坪地遺跡遺構外	74次郎橋遺跡47号土坑
78飯島町企の尾遺跡1号特殊土坑	83次郎橋遺跡41号土坑	86次郎橋遺跡82号土坑
87、88金の尾遺跡2号特殊土坑		

引用参考文献

- 雨宮三樹 1996 「次郎橋遺跡」高根町遺跡調査会
- 福村晃嗣 1991 「加曾利E系列の土器群」『調査研究集録』7 横浜市埋蔵文化財センター
- 戸田哲也 1977 「都留市海ノ遺跡出土土器と中期末期年に就いて」『丘陵』1・3・4 丘陵考古学研究会
- 奥 隆行
- 小野正文 1987 「曾利式土器」『歴史象』山梨県教育委員会
- 佐野 雄 1992 「『黒畠派』明野村教育委員会
- 佐野 雄 1996 「諏訪原遺跡」「牛根半成7年度」北巨摩市町村文化財担当者会
- 木木 健 1981 「曾利式土器」「縄文文化の研究」4 雄山閣
- 木木 健 1988 「曾利式土器様式」「縄文土器大観」3 小学館

- 末木 健ほか1981 「曾利式土器編年と現状と課題」
- 『神奈川考古11 繩文時代中期後半の諸問題』神奈川考古同人会
- 長崎元広 1973 「八ヶ岳南麓の繩文中期集落における共同祭式のありかたとその意義」信濃25-4・5
- 平林 彰 1990 「中部高地の中期最終末及び後期初頭の土器群」
『調査研究集録』7 横浜市埋蔵文化財センター
- 藤森栄一 1964 「伝説境曾利遺跡調査報告」『長野県考古学協会誌』1 長野県考古学会
- 武藤雄六
- 藤森栄一 1965 「井戸尻」中央公論美術出版社
- 前田秀則 1993 「木曾森野遺跡II」町田木曾森野地区遺跡調査会
- 柳沢清一 1991 「神奈川県加曾利E式後半編年と山根跡」『古代』92
- 山形亮理 1996 「曾利式土器の研究（上）」『東京大学文学部考古学研究室紀要』14
- 山本孝司 1992 「加曾利E3-4式と曾利V式について」『古代』94
- 米田明訓 1978 「曾利式土器編年の基礎的把握」『長野県考古学会誌』30 長野県考古学会
- 米田明訓 1986 「中期後半土器の諸問題」『柳坪遺跡』山梨県教育委員会

土製円盤私考

山下孝司

1はじめに

縄文時代の遺跡から出土する遺物の中には、使用方法・目的が不明なものが多い。土製円盤もその数たるものの中の一つである。

土製円盤は、縄文時代早期からあるが、中期後半から後期・晩期に多くなる傾向がある。その名称については研究者・報告書によって、「土製円盤」(1)・「円盤状土製品」(2)・「円板状土製品」(3)・「土器片円盤」(4)・「土製円板」(5)などと、微妙に異なっている(6)。

土製円盤は、土器破片を利用して円盤状に加工した土製品を指し(補注)、無孔品、円盤の中心に凹みのあるもの、円盤の中心に孔のある有孔品の三種類がある。本製品→中途品→完成品とする見方があるが、東北地方の土製円盤について比較検討した藤村千子氏によると「円盤状土製品の無孔品、穿孔中途品、有孔品のそれぞれは異った性格をかね備えているものと考えざるを得ない」としており、無孔品は「半端で出土する遺跡が多い」ことを指摘している(7)。山梨県内の例でも、中谷遺跡(8)(都留市)・中道遺跡(9)(垂崎市)・金生遺跡(10)(北口原郡大泉村)・駿河堂遺跡(11)(東八代郡一宮町・東山梨郡勝沼町)では無孔品が主体となっており、森村氏の指摘のように「有孔品と無孔品は本来全く違った用途をもつ遺物である可能性」が高い(12)と考えられるので、本稿では有孔品・凹みのあるものを除いた無孔品を対象とすることとし、その用途についてみていくことにする。なお、土製円盤の大きさは、駿河堂遺跡では直径3.5cm、厚さ1cm前後が一般的(13)(第1図)で、金生遺跡では直径3~5cmが多く厚さは駿河堂遺跡のものよりも薄い(14)(第2図)。厚さの違いは時代などによる土器の相違に基づくものであり問題とならないであろう。

2祭祀論的考察

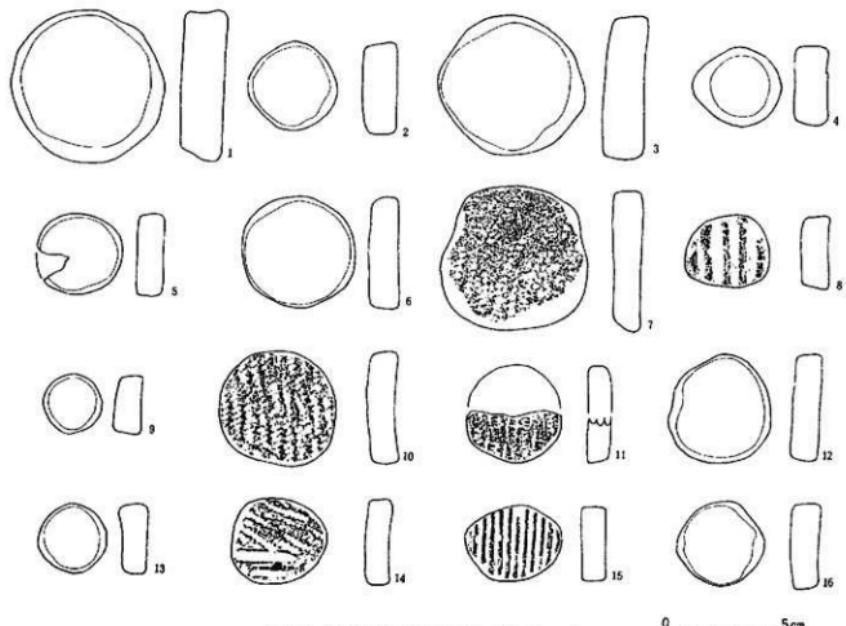
土製円盤の用途をめぐっては、上器の補修具(15)・埋葬に際しての副葬品(16)・祭祀用のもの(17)・換算具(18)・蓋(19)・研磨具(研削具)(20)等あまたの所説がある。これらの内容は人別すると、実用的な側面でとられたものと、祭祀・呪術的な場に用いられたとする見方にわけられる。実用論は土製円盤の形態をとりあげ、祭祀論では出土状況に重きをおいているようである。

何かに使用され廻棄されたものであろうことは想像できる。まず出土状態をながめ、祭祀的に解釈するはどうなるか。

駿河堂遺跡(東八代郡一宮町野呂原地区)からは、土器捨て場・グリッドから186点、住居址から27点、土壇から6点、表塚7点が出土している。土器捨て場およびその周辺からの(遺構外)出土が圧倒的に多い。製作・使用時期は中期中葉~後期初期としている。土器捨て場からは、土偶・顔面把手・獸面把手・有孔鉢付土器片など特殊な遺物も出土しており、僅かながら骨片も出土している。報告書では「特殊遺物の出土状況からは、土器捨て場の特殊性、言い換えれば住居内への廻棄より遠かに多く土器捨て場に特殊遺物が捨てられていることから、土器捨て場に捨てるものがある程度選択されているように見受けられる。」としている(21)。

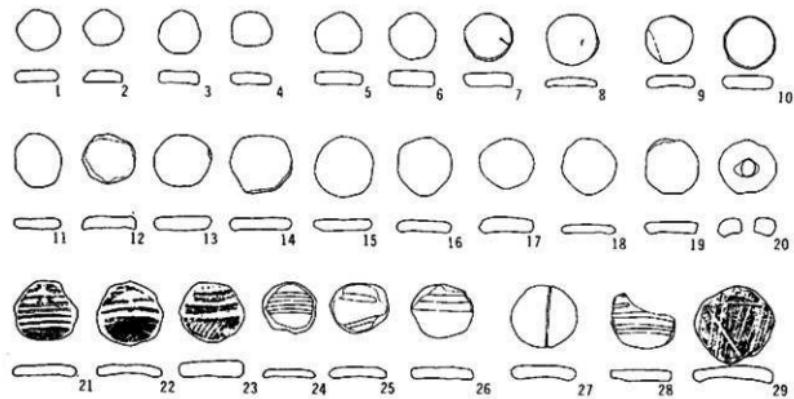
中谷遺跡からは、配石遺構から把手・耳栓とともに、土製円盤が3点出土している。配石遺構からは獸骨とみられる骨片が多数認められている。土製円盤は縄文時代後期以降に属するものとされている(22)。

中道遺跡からは、晩期に属すると思われる27点が報告されているが、遺構は伴っていない。土製円盤を多



第1図 秩湖堂遺跡出土土製円盤(報告書より)

0 5cm



第2図 金生遺跡出土土製円盤(報告書より)

0 10cm

く出土したF-4グリッドからは、耳栓・土偶の破片・ミニチュア上器が出土している。²⁹

金生遺跡からは111点出土している。製作・使用時期は、氷I式期のもの9点、羽状沈頭の七器1点、壺之内1式1点で他は不明であるが、ほとんどが晚期を主体としたものであろう。³⁰ 上製円盤は土偶・耳飾り・土製品・ミニチュア土器・石剣・石棒等といった特殊遺物とともに、出土の分布を図化してみると第3図のようになる。この状況を観察すると、土製円盤は第13・15・25・26・27号住居址に各1点、第17号住居址に3点と遺構に伴うものは少なく、D-11グリッドに数多く集中し、その周辺に広がりをもっている。配石遺構には、土偶・耳飾り・土製品・石剣・石棒が集中するが、土製円盤は第1号配石3点、第2号配石1点、第5号配石2点と極端に少ない。上製円盤と他の特殊遺物の分布は異なった様相を示していると言ふことができる。

上製円盤を出土した遺跡を任意に選びかいつまんでみてきたが、糸謹堂遺跡での特殊遺物とともに捨てられる状況は、祭祀の後の処理とも考えられる。中谷遺跡では配石遺構にかかわったあり方をみせているが、中造跡・金生遺跡では配石遺構といった祭祀遺構とのかかわりは積極的にはみられない。

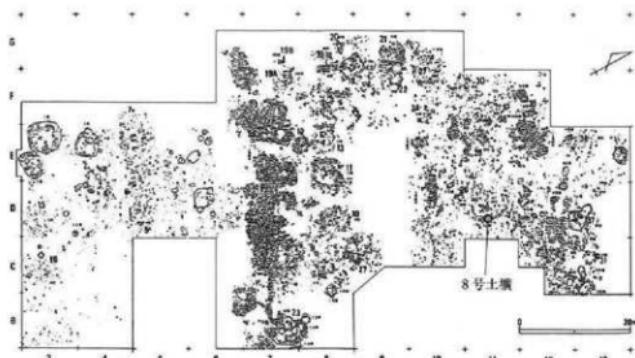
特殊遺物との伴出、配石遺構とのかかわりという点から、土製円盤は祭祀に用いられたとすると、中期の段階では土偶など他の特殊遺物とともに使われ廃棄にいたり、後期では配石遺構といったある地点に集中して他の特殊遺物とともに出土することから祭祀の場での使用が考えられる。他所の事例をあげると、福島県伐毛遺跡では、中期末葉～後期前葉の土製円盤148点が出土しており、C区の配石遺構区域に集中している。ここからはほかに、上器片を三角状に加工した三角上器片が多く出土し、土偶も若干みられる。³¹ 岩手県立石遺跡からは、中期末葉～後期初頭の上製円盤471点が、配石遺構にかかわり、土偶の集中箇所や石棒・石剣といった特殊遺物と重なるようにまとまって出土している。³²

ところが、晩期になると金生遺跡にみられるように、配石遺構や他の特殊遺物とのかかわりは薄くなる。晩期の遺跡である岩手県小川遺跡においては、土偶の集中した区域を除むように271点の上製円盤が出土しており、何らかの区別が行われているようである。³³

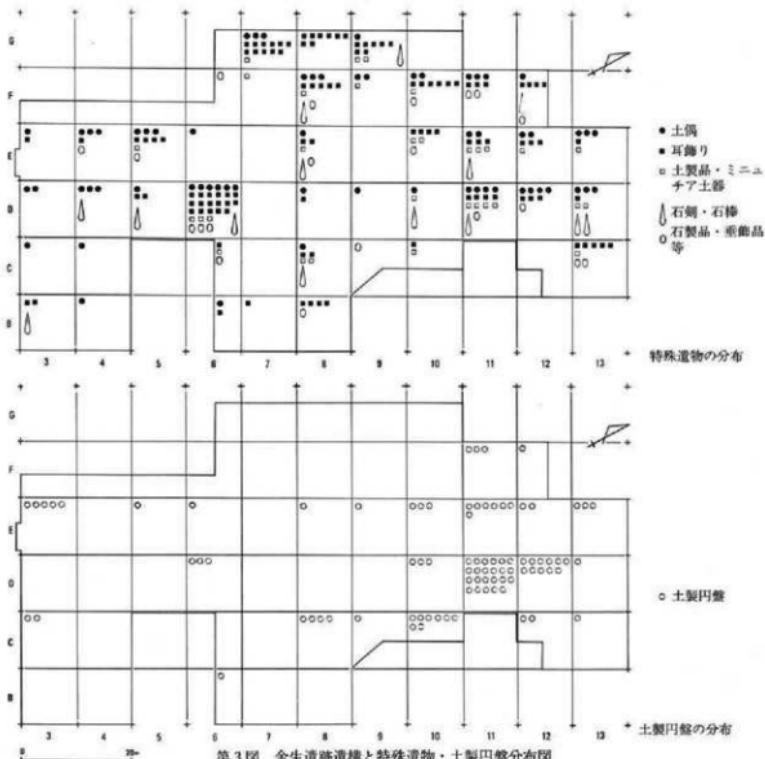
少々大雑把に言ってしまうと中期は上器捨て場への廃棄、後期では配石遺構全体へ捨てられ或はばら撒かれ、晩期になると配石といった明確な遺構以外の地域に捨てられ或はばら撒かれることになる。時代によって土製円盤の扱われ方が異なるのである。

では土製円盤が祭祀に使用されたとするならば、祭祀にかかわる他の特殊遺物のほかに、何と関係をもっていたのかということになる。先にみた山梨県内の遺跡からは、共通して骨が確認されている。糸謹堂遺跡の上器捨て場から僅かではあるが骨片の出土があり、中谷遺跡では配石遺構に撒かれたのように長さ1cm以下の獸骨片が散乱しており、金生遺跡からも焼けた骨片が出土している。金生遺跡では特に晩期終末期に位置付けられる第8号土壙から138個体分の焼けたイノシシの下顎骨が出土している。³⁴ 他所の事例であげた博毛遺跡でも焼骨片が後期初頭の配石・螢石遺構のあるC区全域から出土している。³⁵ 土製円盤は骨しかも獸骨と関連するという推測ができる。

金生遺跡について少し詳しくみてみると、金生遺跡における晩期の遺構変遷は、新津健氏によりI～IV期にわけられており³⁶、時期のわかる土製円盤の氷I式期は、晩期のIV期にあたる。遺構は第17・26・29号の各住居址に第2・3号配石が伴い第17号住居址は氷I式期、第29号住居址はやや古い。第8号土壙は29号住居址を切っている(第3・4図)。土製円盤の分布は、このIV期の遺構分布(集落の区域)に微妙に重なり、特に分布の中心域であるD-11グリッドの中央東よりにはイノシシの下顎骨を出土した第8号土壙が存在しており、獸骨と土製円盤のかかわりが想定できることになる。

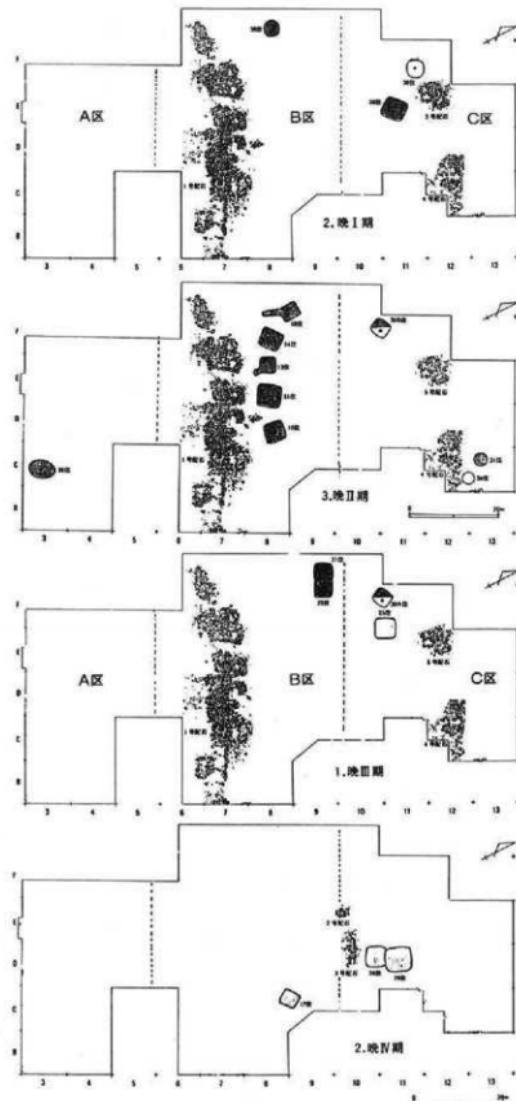


金生遺跡全體図（新津健「縄文晩期聚落の構成と動態—八ヶ岳南麓・金生遺跡を中心に—」
『縄文時代』第3号より、一部加筆）



第3図 金生遺跡遺構と特殊遺物・土製円盤分布図

新津氏は金生遺跡を中心後・晩期の遺跡から出土する獸骨の分析を行い獸骨——とくに焼けた獸骨について、「その場で焼かれた」・「埋納された」・「捨てられた（撒かれた）」状況が観察できるとし、食料以外の目的で骨が焼かれ埋納されるようになるのは中期後半で、断続的ではあるがその後後期には増加し、「後期中葉を画期として、焼骨の出土状況に多様性が認められ、晩期には一層顕著になる傾向」を指摘している。さらに「焼く」・「埋納（埋置）」・「撒く」といった状況を「獸骨を焼き、下頸骨や肩胛骨、それに角といった一部は特定の場に埋納（埋置）し、残った他の部分は更に碎き、集落内に撒く」という一連の祭祀行為として受けとめ、焼く行為に火による淨めを規定し、「火を媒體とした獸骨にかわる祭祀」は、「大きくは豊獣や狩獵の無事を祈ることに含まれようが、細かく碎き、そして撒くといった点からすると、新しい生命となって再生することを願うまつりとも考えることができる」としている。すなわち新津氏



第4図 金生遺跡の縄文時代晩期遺構変遷
(新津健「縄文晩期集落の構成と動態」より)

によるところの「獸骨の祭祀」は、食料にされた獸の不必要部位の骨、最終的にこった骨に対して、火を用い淨めを行い、さらに撒くことによって再生を促す狩獵儀礼ということができる。

獸の特定の部分を祭ることはフレイザーの『金枝篇』に、「中部セレベスのボソでは、獵師たちは自分が仕止めた鹿や野猪の顎骨を、その家の炉辺に保存して置く。そして顎骨に向かって『お前さんの祖父、あるいは甥、あるいはまた子供たちが逃げ去らぬよう、仲間に叫んで告げなさい』という。死んだ鹿と野猪の靈はその顎骨のあたりに残っていて、生きている鹿と野猪の靈を説き、獵師の鬼に引きこんでしまう」というのが彼らの考え方である。狩猟な未開人はこのように、生きている動物をその運命に説きこむ圖として、死んだ動物を使うのである。⁽³⁰⁾」とひかれているように、豊獵を期待する意味もあると思われる。しかし豊獵をいくら期待し願っても、獸が繁殖しなければ絶対量は減るばかりである。そこで新しい生命的の誕生、再生への祈りが必要となってくる。より多く再生産されればそれだけ獲物は増加することとなる。「獸骨の祭祀」において細かく碎いて撒くことは、数多くの再生を願うものであったのだろう。

魔品となった土器片を利用してつくられた土製円盤は、壊れるか使用不能になり一度廃棄された土器の破片に手を加え再び製品として活用するという再利用される側面を重視するならば、再生にかかる行為が行われていることができる。このようにみると、焼いた獸骨片を撒く上に、さらに土製円盤を用い再生への効力を高めたとも考えられよう。

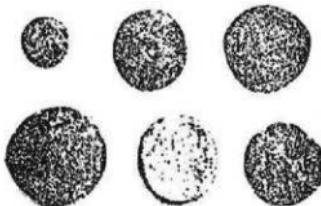
土製円盤は、中期には他の特殊遺物とともに祭りにおいて使われているが、後期から晩期にかけてはとくに狩獵儀礼との関連が深くなり、晩期には金生遺跡にみるように配石における祭りの場——石棒・丸石等の石を媒体とした祭祀⁽³¹⁾とは異なった、狩獵祭祀(「獸骨の祭祀」)といったものの中で再生を祈る場面で使用されていったとみなすことができるであろう。

土製円盤の形態についてみれば、大小の差、周縁加工の粗・蜜(研磨されたものをより丁寧に仕上げたものとすると)は、それをつくったであろう個人の作成意識の違いのあらわれと考えればよい。しかしそこには「まるくする」という共通認識があることになる。何故円くするのであろう。結論的なことから言うと、円は死と再生にかかる意匠ではないだろうかということである。

時代は下るが、弥生時代の銅鐸には満巻き・鋸歯状の文様が施され、古墳の壁面には満巻き・同心円・円・三角形が描かれる。これらは死・再生の祭りに深く関係するものであろう。満巻きは円運動であり、鋸歯状の文様は三角形の連続である。土製円盤ばかりではなく、博毛遺跡出土の三角土器片もやはり死・再生とのかかわりあいが強い形の物とことができよう。円ではなく満巻きということでみると、縄文時代の土器にはこの図案が至るところに用いられている⁽³²⁾。縄文人の死生觀を感じることができそうであるが、縄文人の精神世界への追及はこれ以上はラビリンスのなかに迷い込んでしまいそなので、その可能性を指摘するにとどめておくこととする。

ところで、土製円盤は日本列島ばかりでなく中国でも発見されている。湖北省黄石市東方鄉遺跡からは、陶片を用いた大小20点の土製円盤が出土している⁽³³⁾。「用碎陶片磨削的大小不同的圓餅」と記しているので磨いて作成してあるのであろう。時代は新石器時代晚

期(今から4000年前頃まで)龍山文化に属するとされ、第5図 東方鄉遺跡出土土製円盤(高応勤・周拖權「湖北黄石市大處古遺跡調査紀要」より) ている。報告では大きさが明記されていないが、防錫



車の半成品（中途品）としている。図版中（第5図）の1点に有孔品が掲載されているので筋輪車との関連でとらえているらしい。しかし長さ10mの焼土が確認されており、各種の獸骨片の発見が付記されているので、出土状況の詳細は不明ながら獸骨との関係で考えてみたいところである。

3 実用論的考察

土製円盤について祭祀的な面から狩獵祭祀の再生に關係するものとしたが、次に実用的な所で検討をしてみることとする。

土製円盤は土器片を円形状に整形し、粗・密の差はあるが周縁を磨いてつくられる以外にこれといった特徴は認められない。出土状況も造構にともなうものは少なく、捨てられたと思えるようなものである。これら一見して見落としてしまうような特徴からその用途を推定することは困難なことである。

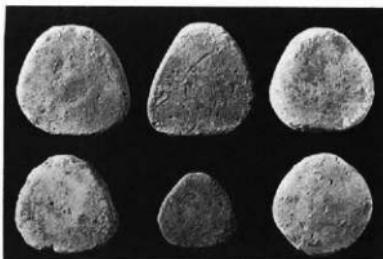
土製円盤と類似の形態で焼成された状態で出土する遺物の例をもとめてみると、パキスタンのモヘンジョダロ遺跡に同様なものがある。それは、テラコッタ・ケーキあるいはクレイ・ケーキと呼ばれる隅円三角形状の蒸焼きの陶板（第6図）で、インダス文明の特徴的な遺物のひとつとなっている⁽³⁶⁾。

テラコッタ・ケーキはモーティマー・ウィーラーによると「三角形（時には角のとられたもの、あるいは角ばったものの別がある）に粘土を焼いて作ったさしわたり1.5インチから4インチほどの大きさの土製ケーキ（粘土の小板）は供物としてか、あるいは墓の副葬品としてか、それはともかく、宗教的な目的をもった『ケーキの模造品』と考えられてきた。この解釈は實際には証明もされていないし、ありそうにも思われない。このいわゆる『ケーキ』は

難に作られてはいるが、両面とも平たく、隅が円くつくられているという点以外にはとくに定まった特徴というものをもっていない。非常に多量であること、とくに排水溝に多いことは、今日の田舎で土の塊が時々用いられているように、あかすりであったか、あるいはトイレット・ペーパーに代わるものであったか、ともかく化粧用に用いられたものであったろうという推定と符合するものであろう。」⁽³⁷⁾と紹介されている。ここにみたテラコッタ・ケーキの、大きさが4~10cm程（『世界考古学事典』では厚さ2~3cm）の平板な形態的特徴と集中的多量出土状態は、土製円盤に非常に類似していることがわかる。ウィーラーはその用途も推測しているが、別に「奇妙な三角形土器（いわゆる供物用ケーキ）は、おそらくトイレットでつかわれたものであろう。よく下水溝のなかでみつかる。」⁽³⁸⁾とも記している。テラコッタ・ケーキニトイレット・ペーパーということになろう。西岡秀雄氏は「かどに丸味をつけた土製の板なので、石のように熱くならず、肌ざわりも悪くない。」⁽³⁹⁾とトイレット・ペーパーとしての使用に満足感を表している。

形態的特徴の類似から即座に使用方法が同じであったとするのは早計であろうが、土製円盤はトイレット・ペーパーとして使われたのではないだろうかと推測できることになる。

テラコッタ・ケーキは粘土から成形され焼かれ、最初からその形でつくられる点で土製円盤と相違があるが、土器片をトイレット・ペーパーに転用する例をさがしてみると、李家正文氏によると中国では「多くは石や、煉瓦や瀬戸物の破片など、なんでも手のとくものを用いるのだが、タケベラやわらも使っている。」⁽⁴⁰⁾



第6図 テラコッタ・ケーキ
(SIR MORTIMER WHEELER『THE INDUS CIVILIZATION』Third Editionより)

と記している。これは1940～1950年代頃のことであろうか。また、「安平の俗習によると、男女はみな瓦のかけらや小石を用いて紙に代えた。」(41)とも記している。森吉南北鏡の頃と思われるが、安平が現在のどこかは明示されていない(42)。ともかく中国のなかで焼物の器片をトイレット・ペーパーに使っていたことは事実であろう。器片を土製円盤のように仕上げて使用したかどうかは不明であるが、二次利用の点で共通する。縄文時代において土製円盤がトイレット・ペーパーとして使用された場合もあったと推定することは、あながち無理のないことであろう。

何故人は尻を拭くのであろうか。それは他の哺乳類と違い自然脱肛ができるないことによる。人は直立歩行することにより、肛門に内臓その他の重みがすべてかかることになる。それ故肛門括約筋によって直腸末端の肛門をたえず緊張させしめておかなければならなくなり、自然脱肛ができなくなつたのである。大抵の哺乳類は排便するとき肛門が自然に外へとびだし、脱糞の後は再びもとへもどる。突出した部分から糞がでて、用がすむと中へひっこむと肛門の周囲は汚れないことになる。人の場合には（かたく切れのよいウンコだとその必要はないのであろうが）肛門から直に脱糞するため、まわりにどうしても残ってしまう。そこでその残りを拭くことになる(43)。

現在日本では紙を事後処理に使用しているが、つい最近までチューキと呼ばれる箋状の木片や、ワラ・葉っぱ・棒でぬぐいとっていた地域があった(44)。昔、紙は貴重品だったのである。世界でトイレット・ペーパーに紙を使うのは、総人口の3分の1にすぎないといふ。ほかは何で拭くのかというと、石・ロープ・砂・海綿・木・藁・水等と実際に様々である(45)。またすべての人が排便後拭くのかというと、そうでもなくそのまま通してしまう人もいるようである(46)。

縄文人すべてが排便後尻の始末をしたのかどうかは疑問であり、また拭いた場合でも色々なものを用いたとも考えられるが、土器片を利爪する文化地域、あるいは集団、あるいは人々があつてもよいと思われる。

海老原都雄氏は「直径が4cm前後が多いのは片手で持ち力が入れやすい大きさ」(47)と、土製円盤を観察している。まさに尻を拭くのに適したものと言えよう。大きさの大小、周縁加工の差は使用する人の肌に合わせた結果とすることができる。ただあまりに小さいとウンコが手についてしまう感覚もある。

土製円盤がトイレット・ペーパーであるとの実証は難しいものがあると思われるが、人のウンコはこの場合がある。糞石である。人のウンコが形を変えずに十中において化石化したもので、当時の食生活等を知るうえで貴重かつ重要な遺物となっており、各地で発見例が増えつつある(48)。この實行が大量に発見された縄文時代前期の福井県鳥浜貝塚からは、土製円盤が発見されている。しかし有孔品7点・凹みのあるもの1点・無孔品1点とごく僅かであり、報告書では漁網用の繩の可能性を推測している(49)。無孔品の少なさなど鳥浜貝塚の出土例からは、土製円盤とウンコのかかわりは薄いと言わざるを得ないが、最近これら糞石は大のものであるとの見方が強くなっているので(50)、なお箋錐の余地があろう。

近年トイレの考古学が脚光をあびている(51)。土製円盤の多く出土する土塗の土を分析すれば、新たな発見があるかもしれない。

4 おわりに

土製円盤は縄文時代ばかりではなく、各時代を通して発見され中、近世にも出土している。材質は各時代によって異なるが、基本的には焼物の器の破片を用い凹形に加工するという同様な形態を呈している。中世では副葬品の冥錢としてつかわれたものとか、子供の玩具とする物もあるが(52)、これら各時代円盤の用途については有効な手がかり——有力な説が無いまま今日までできているのが実情である。

土製円盤ばかりでなく遺跡から出土する遺物、あるいはひとつの考古遺物はどれ程の情報量をもっているのであろうか。我々は遺物からどの程度、どこまでその情報を引き出すことができるのでしょうか。寡黙な遺物は積極的にこちらから働き掛けなければ語りはしない。対象に接近する手段は、客観的・実証的でなければならず、合理的な分析方法によって明らかにしていかなければならることは言うまでもない。しかし、ここに展開した考察は極めて主観的なものである。土製円盤の諸説について検討を加え、資料を集積し実証的に論を進めたわけではない。本稿での祭祀論と尖端論は、例えば土製円盤=トイレット・ペーパーとする、配石遺構といった祭りの場でウンコをしたというようなおかしなことになってしまいむ容れない論である。それは部分的な共通事象に着目することによって他の異質部分をうやむやにし、あるいは捨て去って論拠としたものであるからである。

恣意的な解釈で独断と偏見に満ちたものであり、誤断の繋みと批判されそうであるが、土製円盤に対する筆者の思索のあらわれとして心情的に意をくみとていただければ幸である。

本稿をまとめるにあたり、新津健・小野正文・中山誠二・櫛原功一・畠大介・渡辺正・中村良幸・島中清隆・鈴木稔の各氏には文献提供や御指導、御教示をいただいた。本稿ではあるが記して感謝するとともに、お礼を申し上げる次第である。

註

- (1) 山梨県教育委員会 「金生遺跡II(縄文時代編)」 1989。
- (2) 宮城県教育委員会 「日精貝塚II 土製品・石器・石製品編」 1986。
- (3) 宮城県教育委員会 「上深沢遺跡」 1975。
- (4) いわき市教育委員会 「大畠貝塚調査報告」 1975。
- (5) 中郷村教育委員会 「施峰遺跡発掘調査概報」 1987。
- (6) その形態からすれば「土器片円盤」が適当かもしれないが、本稿では山梨県内の一般的呼称である「土製円盤」を用いた。
- (7) 鳥村千子 「東北地方の円盤状土製品」『法政史蹟』第10号 1983。
- (8) 郡留市教育委員会 「中谷・宮籠遺跡」 1981。
- (9) 坂崎市教育委員会 「金山・下木戸・中道遺跡」 1986。
- ⑩ 註(1)と同じ。
- ⑪ 山梨県教育委員会 「糸池堂III」 1987。
- ⑫ 註(7)と同じ。
- ⑬ 註(8)と同じ。
- ⑭ 註(1)と同じ。
- ⑮ 中野勇 「青森県三戸郡川村中居石器時代遺跡調査概報」『史前学雑誌』第2巻第4号 1930。
- ⑯ 町田信 「土器片利用の土板」『考古学ジャーナル』78 1973。
- ⑰ 佐々木嘉宣 「岩手県出土の石製円盤・土製円盤について」『紀要VII』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1988。
- ⑱ 鈴木正博・鈴木加津子 「縄文時代の決算具」『常総台地』第11号 1979。
- ⑲ 上野佳也 「縄文時代の土製円盤について」『古代学叢論』 角田文庫先生古稀記念事業会 1983。

- 脚注
 例 海老原都雄 「所謂土製円盤の用途について」『栃木県考古学会誌』第9集 1988。藤巻正信 「土器片円盤について」『新潟考古学談話会会報』第3号 1989。
- (1) 註(1)と同じ。
 (2) 註(8)と同じ。
 (3) 註(9)と同じ。
 (4) 註(11)と同じ。
 (5) 高野村教育委員会 『海毛遺跡』 1985。
 (6) 大迫町教育委員会 『立石遺跡』 1979。
 (7) 大泊町教育委員会 『立石遺跡』 1979 182頁。
 (8) 金子浩昌 『第VI章 企生遺跡(川上)の歌骨』『企生遺跡II(縄文時代編)』註(1)と同じ。
 (9) 計測と同じ。
 (10) 新津健 「縄文時代後晩期における焼けた歌骨について」『日本史の黎明——八幡岳南葬・企生遺跡を中心に——』『縄文時代』第3号 縄文時代文化研究会 1992。
 (11) 新津健 『縄文時代後晩期における焼けた歌骨について』『日本史の黎明——八幡岳南葬・企生遺跡を中心に——』『縄文時代』第3号 縄文時代文化研究会 1992。
 (12) フレイザ著 水橋卓介訳 『金枝篇』(四) 岩波文庫 1951 91~92頁。なお、イノシシなど接觸獸の下類骨を飾る風習は日本にもあった。(早川孝太郎『猪・鹿・蟹』講談社学術文庫 1979 28頁)。
 (13) 新津健 『企生遺跡発見の中空土偶と2号配石』『研究紀要』1 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 1983。
 (14) 千田稔 『うずまきは跡る』 桜武書店 1991。
 (15) 寛心勤・周抱櫻 『湖北黄石市六庵古道址調查紀要』『文物參考資料』第12期 中国古典芸術出版社 1956。
 (16) 小西正徳 「テラコッタ・ケ・キ」『世界考古学事典』上 平凡社 1979。
 (17) ウィラー著 曽野寿彦訳 『インダス文明』 みすず書房 150頁。
 (18) モーティマー・ウィラー著 小谷伸男訳 『インダス文明の流れ』 刊元社 1971 25頁。
 (19) 西岡秀雄 『トイレットペーパーの文化史』 论創社 1987 35~36頁。
 (20) 李家正文 『廻まんだら』新装版 雪華社 1972 111~112頁。
 (21) 計測103頁。
 (22) 諸侯歟次 『大便和辞典』卷3 大修館書店 1956。によると「安平」と名の付く地は數箇所掲載されている。
 (23) 香原忠勢 「人間はなぜ紙類するか——その自然人類学的考察」小西正徳監修『スカラベの見たもの——お尻をめぐるアンソロジー』 TOTO出版 1991。
 (24) 馬場良雄 「きたない話で恐縮ですが」『信濃路』No.3 1976。
 (25) 言穂の文献。西岡秀雄 『世界のトイレ事情と日本』『太田区立郷土博物館紀要』創刊号1990年度。
 (26) 言穂の文献。また現在はどうか知らないが、1900年頃のチベットの習慣では、大使の後尻拭わないという。(河口慈海『チベット旅行記(二)』講談社学術文庫 1978 163頁)。
 (27) 計測の海老原都雄論文。
 (28) 益世重隆 「石になった糞」『岡説廻まんだら』 INAX 1984。
 (29) 福井県教育委員会 『高浜貝塚——縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査』 1979。
 (30) 萩村道雄 「縄文時代のウンコの化石、トイレはどこだ?」文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』 No.350 第

・法規出版 1992.

60 「特集 トイレの考古学」文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』 No.350 第一法規出版 1992。

62 「元興寺極楽坊IV 位牌・物忌札・冥錢・石塔類」『日本仏教民俗基礎資料集成』第四卷 中央公論元術出版 1977
47~51頁。

補記

成稿後、スチュアート・ヘンリ著『はばかりながら「トイレ文化」考』(文春文庫 1993)を知った。平安時代の土師器・須恵器片が尻拭きに使われていたことを記している(135~136頁)。その引用文献と思われる市毛照「平安時代三ヶ島の共同廐考」(『早大所沢文化財調査月報』No.12 1986)では、早大所沢校地中央のお伊勢山北側緩斜面下に発見されたLoc. 17溝2と呼ぶ平安時代の溝が、集落より一段低くしゃがむと集落から見えないこと、出土した土師器・須恵器の上器片の磨耗が激しいことから水量が豊富で排泄物をきれいに流しこってしまい異臭もなかったと考えられることから、廐と想定している。さらに多量に出土した土師器・須恵器の破片をチュー・ギの代用品とし、「土師器・須恵器の表面の長合と、口辺の内外への反り、肥厚をもつ土器などは、尻ふきには最適であったと思われる。」と述べている。これらの破片が円盤状かどうかは示されておらず、また筆者も実見していないが、『はばかりながら「トイレの文化」考』に「まるく磨耗している」とあるので円形なのかも知れない(ただしまるくなってしまった理由を水流によるものとしている)。上器片をトイレット・ペーパーに用いたとの視点は有効であろう。なお、スチュアート氏は「後述するように上器片は尻を拭くのに使われた可能性が高いこと」(136頁)と書いているが、書中にはそれが見当たらない。ご教示頂ければ有り難い。

補注

本稿では、土製円盤を円形に加工する、あるいは加工したものとみなす立場から論を展開しているが、枚正の段階で閑間俊明氏により、土製円盤は一方で土器破片を利用し、使用した結果として円盤状になったものとのとらえ方もある、との指摘を受けた。研削貝・研削貝とする実用論的解釈がこれに当たり、一考を要するが、円盤周縁の状態を使用目的とするか、使用結果とするかの判断は非常に難しい。加工面もしくは使用面の細かな観察・分析が用途解釈のひとつの鍵をにぎるであろう。

付記

本稿は研究ノート的なものとして1993年9月27日に書き上げたが、公表の機会が得られないまま3年余の歳月がたってしまった。当時の考え方を重視しそのまま掲載することにした。

山梨県北巨摩郡内における縄文時代中期初頭(五領ヶ台式)土器群の編年

竹田眞人

はじめに

縄文時代中期初頭の土器群、いわゆる五領ヶ台式が設定（山内1937・江坂1949）されて以来、数多くの研究がなされてきた。しかしながら、その土器の多様性や研究史による混乱、遺構の少なさによる層位的な検証の難しさなどもあり、五領ヶ台式土器の編年は、その研究史などを正確に把握していないと、理解できないというような状況さえあるといえる。このような中で、筆者は山梨県北巨摩郡武川村によって平成2年に発掘調査がなされた¹⁹⁹³実原A遺跡の整理作業及び報告書作成をすることになった。この遺跡についての詳細は後述することとするが、五領ヶ台式から新道式までの遺構及び遺物が検出されている遺跡である。報告書作成にあたって五領ヶ台式の土器を見て、参考文献をひらき、見比べてみるとどうもしっくりこない、よく分からぬという印象であった。そこで、自分なりに編年を試みることにした。そのため、今回の研究の目的は五領ヶ台式土器の編年であり、それ以上のものではないことをあらかじめ断つておく。

1. 研究史とその課題

五領ヶ台式土器の研究は関東と中部高地を中心に行われてきた。ここでいう中部高地とは八ヶ岳西麓や諏訪湖の周辺であり、山梨県に焦点をあてた研究はほとんどなされていない。（山梨県内の該期の研究として代表的なものに小林謙一の研究（1994）がある。）五領ヶ台式土器の研究は数多くあり、研究史についてもすぐれた記述がなされているため、ここでは、小林の研究を概観し、必要に応じて研究史に触れ、編年研究の開発点を考えることとする。

五領ヶ台式土器の研究は、先にも述べたように関東または中部高地という大きな地域の中で展開してきた。このような状況下で、小林はその一連の研究（小林1984・1988・1993）の中で限定的な小地域の土器群の生成、また土器分布図の抽出を行い、「真光寺タイプ」などのサブタイプを設定している。これらのサブタイプは伝統的土器群（勝坂式系・阿玉台式系）の間で折衷土器が、地域的タイプとして系統をなしていったものとしている。このような手法は該期の研究として非常に有効なものと思われる。多系統の土器が存在する該期においては、大きな地城を対象にしたときに、地域差と時間差、系統の違い、折衷タイプの意識を見失ってしまう危険性が非常に大きくなる。これが、型式の乱立や、混乱を招いた一つの原因であると思われる。五領ヶ台式土器は、小地域の変遷や動態を観察し、その集大成によって理解されるものであろう。

編年については、依然住居址の切り合など良好な資料に恵まれない該期においては型式学によって推測せざるを得ない。小林は文様要素及び文様モチーフの型式学的な経緯によって編年を組み立てている。文様要素・文様モチーフによって系統立て、時期設定を行うという方法自体は多くの研究者が採用しているものである。しかしながら、五領ヶ台式期には多彩な器形をもつても関わらず、器形について多くの注意が払われることは少ないようと思われる。三上（1987）では、器形を円筒形のものとキャリパー形のものを取り上げて、編年作業をしているが、関東から中部高地を全て対象としているため、地域性を見ることがないものとなっている。

小林は編年だけにとどまらずに、山梨県内における遺跡の分布と動態や地域との関連を積極的に述べているが、本稿では編年だけを目的としているため、ここで触れるることはあえて避けることとする。

研究史を振り返ったとは言えないが、以上のことから本稿の基本姿勢は次の2点である。対象とする地域

は、限定された小地域であること。編年あたり、型式学的手法を用いるが、第一の要素として、器形を位置づけ、その上で文様要素及びモチーフについて検討していく。では、具体的に上記2点について検討していくことにしたい。

2. 地域の選定について(図1・表1)

地域の選定は、現在の行政区画である北巨摩郡を扱うこととする。立地的に北巨摩郡は、八ヶ岳南麓(小淵沢町・大泉村・高根町・長坂町)、甲斐駒ヶ岳山麓(白井町・武川村・韮崎市の一帯)、茅ヶ岳山麓(明野村・須玉町・韮崎市の一帯)、平府盆地の周辺(韮崎市の一帯・双葉町)からなる。北巨摩郡は、北に八ヶ岳、西に甲斐駒ヶ岳、東に茅ヶ岳と比較的小さくまとまった空間を形成している。韮崎市の一部と双葉町などは半府盆地周辺であり、地形的に八ヶ岳山麓などと一緒に扱うことには疑問がもたれるが、ここでは、あくまで任意の区分として「北巨摩郡」を扱う。土器の分布から見た小地域の設定などは編年案を提示した後に行いたい。

ここで、今回縄文時代中期初頭期の土器編年をする契機となった武川村実原A遺跡について紹介することとする。

○ 実原A遺跡(山梨県北巨摩郡武川村黒沢字実原1369-1外)(図2)

立地

本遺跡は実原・山高・黒沢などの集落がある大武川右岸の高位段丘面上に位置し、遺跡周辺の標高は567m前後である。この段丘面は実原・山高・黒沢にかけての広い平坦地で、以前より縄文時代の遺跡が数多いことで知られており、本遺跡と村道をはさんで位置する実原B遺跡からは、縄文時代草創期と思われる有舌尖頭器が出土している。

調査の経過

本遺跡の発掘調査は、神代公園施設事業に伴い、工事予定期間2,270m²を対象に、武川村教育委員会が調査主体となって行われた。現地調査期間は平成2年(1990)7月10日から同12月8日までの約6ヶ月間で、現在報告書刊行に向けて整理作業中である。

遺構

発掘調査によって、縄文時代中期の住居址10軒と上塙5基が検出されたが、長年農地として使用されていたため、耕作による搅乱が著しく、遺存状態は良好ではなかった。なお、これらの住居址は、出土遺物から縄文時代中期初頭(五領ヶ台式)及び中期前業(祭式式→新造式)に位置づけられ、ほぼ中央部に埋蔵炉を持つのが特徴である。(3号住居址のみ埋蔵炉の確認ができなかったが、出土遺物等から同時期と推定される。)前述したとおり、各住居址とも遺存状態は悪く、床・壁面ともはっきりと確認できず、がの検出によって住居址として確認されたものが多い。また重複関係は6・8号住居址にみられ、遺物もそこに集中する傾向がみられた。

本遺跡中最大の住居址は3号住居址、直径8m前後の円形を呈する。他の住居址は床面や柱穴の確認が難しかったのに対し、3号住居址は掘り込みも深く、床面が非常に堅緻なのが特徴である。

遺物

遺物は、遺構の残存状況が悪かったのに対し、中期初頭から前業にかけて深鉢の土器を中心に良好な資料が得られた。中期初頭の上器は、五領ヶ台式に比定され(今村1985)、遺構外から破片資料が出土した前期末(諸職C式→十三苦提式)の土器とは時間的な空白が認められる。しかしながら発掘面積が非常に狭かっ

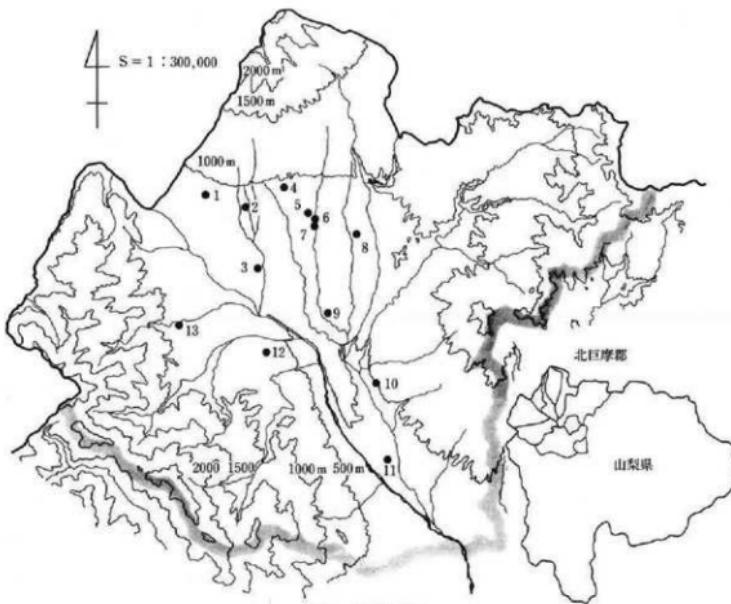
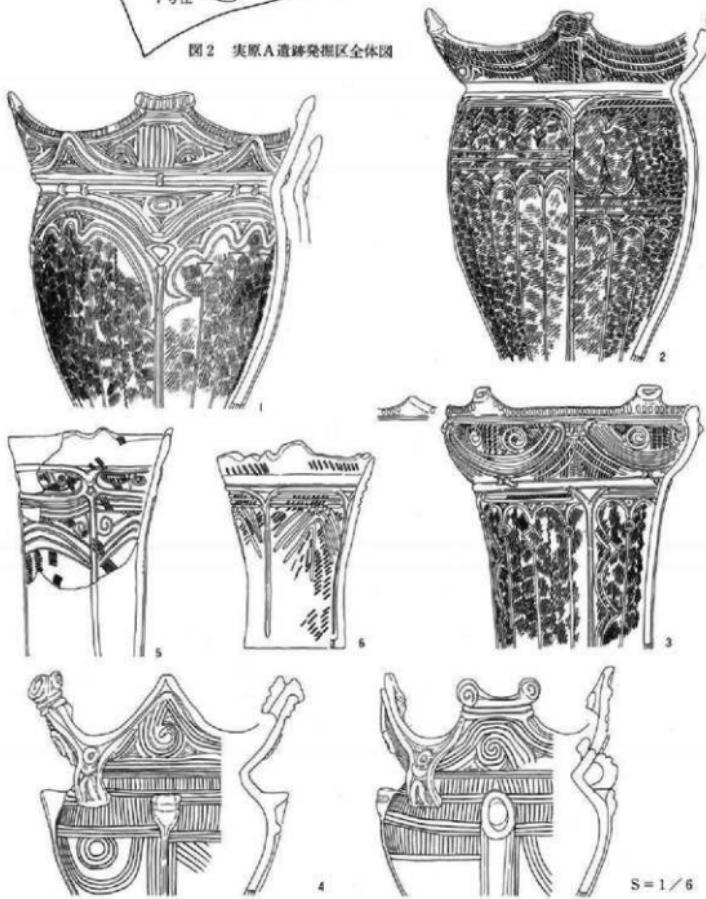
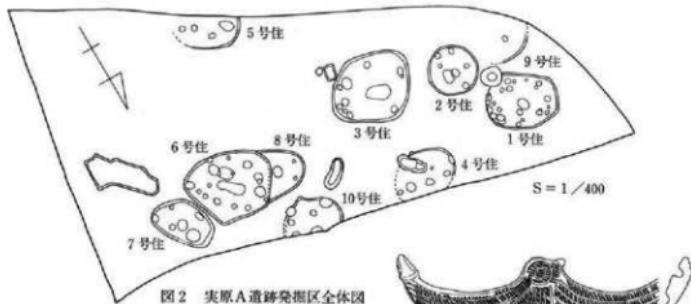


図1 遺跡分布図

No.	遺跡名	所在地	文献
1	上平出	小淵沢町	山梨県教育委員会1974『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書-北巨摩郡小淵沢町地内-』
2	中込	長坂町	山梨県教育委員会1990『中込遺跡』
3	健康村	長坂町	健康村遺跡調査団1994『健康村遺跡』
4	小坂	大泉村	山梨県教育委員会1991『小坂遺跡』
5	天神	大泉村	山梨県教育委員会1994『天神遺跡』
6	宮地第3	大泉村	大泉村教育委員会1991『宮地第2遺跡宮地第3遺跡』
7	甲ヶ原	大泉村	山梨県教育委員会1992『甲ヶ原遺跡概報1』
8	旭東久保	高根町	高根町教育委員会1985『旭東久保遺跡』
9	日影田	高根町	山梨県教育委員会1995『日影田遺跡』
10	屋敷添	明野村	明野村教育委員会1993『屋敷添』
11	山影	韮崎市	韮崎市教育委員会1997『山影遺跡』
12	寒原A	武川村	未報告
13	大原1	白州町	北巨摩郡文化財担当者会1997『速報 大原1遺跡』『年報』2

表1 遺跡分布図対応表



たことを考慮に入れると、今後の調査によって、前期末から中期初頭にかけての遺構が発見される可能性は充分にあるだろう。また、中期初頭においては、北陸の新保・新崎式と思われる深鉢が出土している点も注目される。

本稿で扱う上器は実原A遺跡出土資料のうち、8号住居址覆土より出土した6個体である。出土状況など詳細は不明であるが、いずれも中期初頭の上器である。

実原A遺跡8号住居址覆土出土土器（図3）

1 4単位の波状口縁をなし、胴部の膨らむ器形である。口唇部には竹管状の工具により刺みの列が施される。口縁部文様帶は三叉文、玉抱三叉文を基調として間隙を沈線で充填する。胴部はY字状の隆線を垂下させることにより、4単位に分ける。地文はRL単節繩文に筋節が施されている。

2 1と同様の器形である。やはり、RL単節繩文を地文とし三叉文を多用する。頸部から胴部に4単位のY字状の隆線を垂下させる点においても共通する。工具はやはり竹管状の工具を使用している。

3 口縁部は外側に膨らみ、胴部は腰やかに内側にそる器形である。口縁部には、突起をもつ。口唇部には刻みが施される。RL単節繩文を地文にもち、胴部にはY字状の隆線、三叉文を多用するという点は1・2と同じである。しかしながら、口縁部文様帶に1・2では沈線であった文様に、一部角押文が施されている。

4 大波状縁を持ち、胴部は膨らむ器形である。波状縁は、三角形状と台形状が2単位ずつの4単位である。波底部からは大きな輪状の把手が4単位取り付けられている。口縁部文様帶には、渦巻き状の降線に沿って、半截竹管による沈線が施されている。胴部は欠損部分が多いため、詳細は不明であるが、横位に沈線をめぐらせ、間隙は縦位の沈線によって充填されている。胴部下半には他のモチーフが施されているようであるが、不明である。波頂部下の胴部には隆線が施されている。1・2・3・5・6の上器が褐色であるのに対して、この土器だけが灰褐色というべきか、白っぽい色調をしている。胎上の粒子も細かい。

5 半縁の口縁部に小突起をもつ、円筒状の器形の土器である。口縁部の文様帶はRL単節繩文のみである。頸部に隆線によって4単位の格凸凹向がつくられる。凹向の接点より、隆線が垂下する。区画内は竹管状工具により渦巻きなどの沈線が施される。胴部にも同工具により渦巻きや弧状の沈線が施されている。

6 5と同様な器形である。やはり口縁部文様帶はRL単節繩文のみである。頸部に沈線がめぐられ、4単位のY字状の隆線が垂下する。胴部には竹管状の工具により、沈線が施される。

3-1. 器形（図4）

前期末から中期初頭にかけて多種多様な器形が現れるようになる。北巨摩郡下では概ね以下の器形が見られる。該期においては、波状口縁が少ないとともあり、口唇部の形状は文様要素の一つとして考えることとする。このため、自ずと対象とする土器は器形の復元が可能なものに限定される。また、浅鉢、無文の粗製土器は今回は対象外とする。

器形①：この器形は口縁部から底部まで真っ直ぐのもの、口縁部が外反し胴部が内反するものなど、細かく見る同じ器形とは言えない部分もあるが、円筒状の器形で、頸部が特定しづらいという点で同一の器形とする。

器形②：中期初頭に特徴的に現れる器形である。頸部で外側に屈折し、口縁部文様帶で内側に屈折する。

器形③：頸部で外折し、口縁部は中程が膨らむ器形である。

器形④：いわゆる金魚鉢の器形。前期末から中期初頭に特徴的な器形である。

器形⑤：胴部が膨らむ器形。

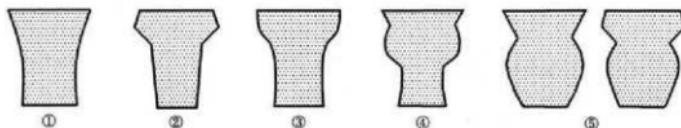


図4 器形模式図

3-2. 系統

五領ヶ台式土器の編年には従来より縄文系（細縄文系）及び沈線文系（集合沈線文系）という大きく二つに分ける方法がある。本稿では基本的に器形に加え、この2大別を使う。基本的にとしたのは、縄文系と沈線文系の折衷、前述の器形にあてはまらないもの、または型式学的に飛躍のあるものが考えられるからである。これらの土器については、北巨摩郡下における変遷をおいつつ、先行研究を参考に位置付けを行うこととする。

沈線文系及び縄文系の中で器形により類分けを行い、以下のようにA～Hの8類に分けるものとする。

Hは北巨摩郡内において一つの類として認め難いもの（沈線文系と縄文系の折衷や異系統の土器）。

	器形①	器形②	器形③	器形④	器形⑤
沈線文系	A	B	—	—	C
縄文系	F	—	D	G	E

表2 A～E類分類表

4 時期設定

本稿では、五領ヶ台式期を1～5期と5期区分する。代表的な先行研究との対応関係は以下の通りである（表3）。

	五領ヶ台I		五領ヶ台II			落沢	
	Ia	Ib	IIa	IIb	IIc	大石・神谷原	
今村1985							角押文I
数野1984							
中山1993	Ia	Ib	Ic	IIa	IIb IIc	落沢	
小林1988	八辺I		八辺II	八辺III	八辺IV	阿玉台Ia	
小林1994a	CM		CS Ia CS I b	CS I c	CS II	CZ I a	
本稿	1期	2期	3期	4期	5期	落沢	

表3 編年対応表

1期から5期までの基準の概略は、

1期 前期末からのモチーフ・文様を引き継ぐもの。

2期 1期のモチーフ・文様の簡略化。口縁部文様帯または、頸部付近の隆線貼り付け。

3期 2期のモチーフ・文様の簡略化（胴部文様に顯著）。頸部から胴部へかけて隆線垂下。

4期－沈線文系 3期のモチーフ・文様の簡略化（頸部無文化）。

－縄文系 弧線文が主文様モチーフとなる。

5期－沈線文系 未出または北巨摩郡内において消滅。

－縄文系 隆帶・沈線による区画状のモチーフ出現。角押文の出現。

以上の基準に従って、北巨摩郡下で出土している土器を対象に前述のA～H類の順に説明を行う。

また、主な流れの模式図を図5に示した。模式化するにあたり、胴部下半が欠損しているものなどあり、十分でないものもあるが、ご了解願いたい。

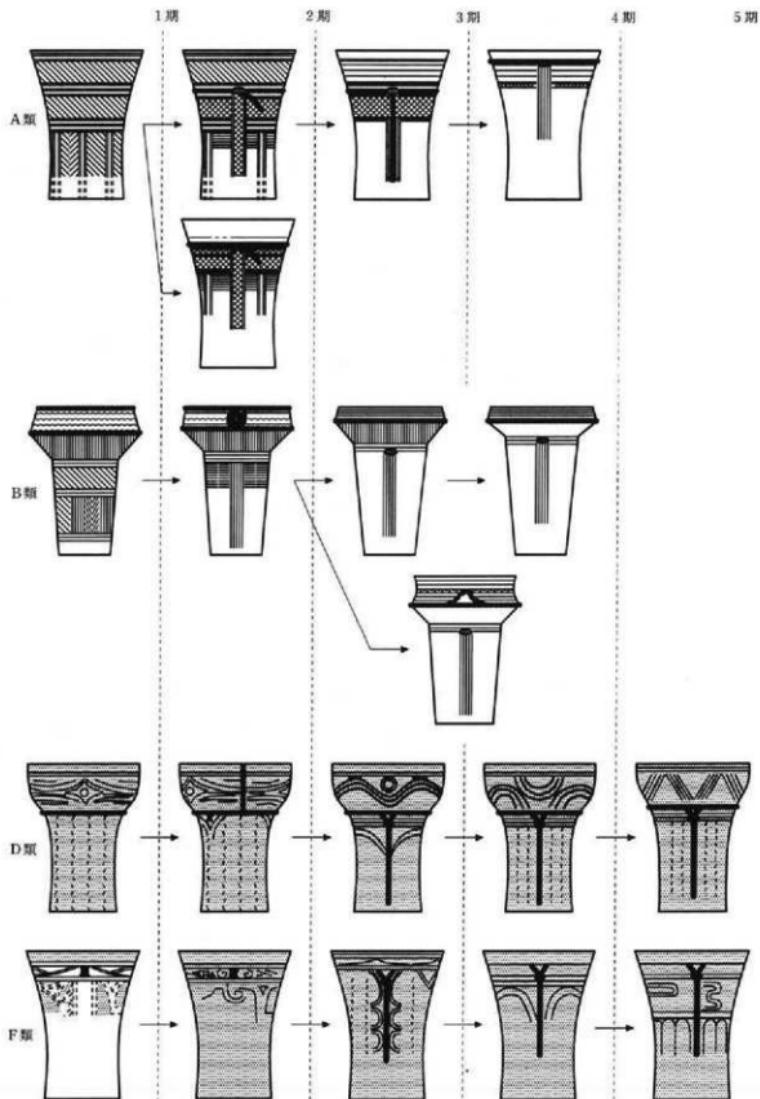


图5 编年模式图

周		A	B	C	D	E	F	G	H
1		1(5)	7(3)	8(4)	25(5)	37(4)			51(4)
2	周	2(6)	10(5)	11(5)	19(1)	25(2)	38(4)	50(6)	52(10)
3	4(8)	15(7)	12(13)	13(1)	21(6)	27(5)	39(5)	47(10)	53(10)
4	期	14	20(1)	22(10)	23(10)	28(5)	39(5)	48(10)	55(10)
5	期	17(10)	16(4)	18(7)	24(11)	29(5)	30(5)	40(5)	56(10)
4	期	6(1)	35(12)	36(12)	31(12)	41(9)	43(12)	45(12)	46(9)
5	周					32(11)	42	43	58(11)
									59(12)
									60(11)

：沈家文系
：國文系 () 内は遺物No.

前漢式系

図 6 北巨摩郡下における中期初列士器群編年表

5 北巨摩郡下出土土器の編年

ここで編年の対象とした上器は、北巨摩郡下出土の60個体である(図6)。器形復元が可能な個体と想定するため、双葉町や須玉町など、実際には扱えなかった地域もあることを断っておきたい。

A類(図6-1~6・15): 沈線文系で、器形①の上器である。工具は半裁竹管が使われる。

1期 前期木からの文様帯構成を引き継ぐ。多段であり斜沈線などで充填される。

2期 脊部まで文様は施文されるが、1期に比較し文様帶の段数が少なくなる。横方向の区画から、縱方向の区画へと変化するためである。また、口縁部文様帶ないし、頸部付近に隆線の貼り付けがされ、そこから沈線が垂下する。2の土器は、頸部より隆線が垂下するという新しいと思われる要素を含んでいるが、頸部全体が沈線で充填されていることをもって、2期としておく。

3期 口縁部文様帶が簡略化し、頸部から隆線が垂下するものが多くなる。頸部文様帶は頸部下に格子状の沈線などが残るが、頸部より垂下する沈線や、隆線以外は無文となる。15の土器は器形①とは言えないが、口縁部文様帶の簡略化や頸部からの沈線の垂下、頸部以下の格子状の文様帶など器形①との類似が多いため、器形①の「一つのバリエーション」として捉えることとする。

4期 口縁部文様帶がほぼ消滅、頸部の文様帶も簡略化する。

5期 現在のところ5期に相当すると思われる上器は認められない。

B類(図6-7~14・17・18): 沈線文系で、器形②の上器群である。工具は半裁竹管が使われる。基本的な流れはA類と変わらない。

1期 A類と同様に、多段の構成を持ち、斜沈線や山形沈線、格子状沈線等で口縁部から刷部まで充填される。

2期 A類と同様である。口縁部ないし頸部に隆線の貼り付けがされる。

3期 脊部はやはり頸部から垂下する沈線以外は無文となる。また、口縁部文様帶は、非常に狭くなる。14の土器は口縁部第II文様帶が空白となり、新しい様相を示す。しかし、器形①で見られた頸部下の格子状沈線が施文されているため3期としておく。また、口縁部第I文様帶に舟形区画状の隆帶が施されており、4期との中間形態とも考えられる。

4期 口縁部第II文様帶の沈線が消失し、無文となる。しかし、口縁部第I文様帶が再び強調され広くなる傾向にある。口縁部第I文様帶には隆線により区画状などの貼り付けが施される。

5期 現在のところ5期に相当すると思われる土器は認められない。

C類(図6-19~24): 沈線文系で、器形⑤の上器群である。工具は半裁竹管が使われる。

1期 現在のところ1期に相当すると思われる土器は認められない。

2期 19の土器をここでは2期としておく。しかしながら、脊部に文様が充填されること以外、次の3期や、2期のA・B類との類似性がほとんど認められず、異類とすべきかもしれない。

3期 B類3期と同様である。器形⑤のような脊部が膨らむ器形の確実に出現している時期である。23は文様帶構成などは3期のものであるが頸部下の沈線が、角押文となっている。4期以降に下がる可能性もある。

4期 24の土器は文様帶構成は3期と変わらないが、3期には無文であった脊部の空白部に沈線により円・弧状の文様が施文される。脊部を沈線による文様で充填するという点では1期や2期とも考えられるが、円や弧状の文様はA類にもB類にも見られない。この文様は、長野県にはよく見られるものであるため、長野県側からの影響が考えられる。

5期 現在のところ5期に相当すると思われる土器は認められない。

D類(図6-25~32):縄文系で器形③の土器群である。工具は主に竹管状の工具が使用される。

1期 前期末からのモチーフ・文様を引き継ぐもの。施文工具は半截竹管か、棒状の鋭い工具を使用している。D類の1期にあたる土器は現在のところ25の上器をあげているが、この段階には、細線文の施された土器があたり、25は2期に入る可能性もある。

2期 1期のモチーフ・文様が簡略化されたもの。橋状把手がつく。工具は半截竹管である。

3期 2期のモチーフ・文様が簡略化されたもの。また、頭部よりY字状をした隆線が施されるようになる。弧線文の出現時期でもある。工具が竹管状工具に変わる。

4期・5期 29や30の土器のように3期の簡略化というものと、31のように、より弧線文が盛行していくものの2つのバリエーションとして捉えたい。31の土器には、弧線文だけでなく、土壇三文・三文文が非常によく使われているのも特徴であろう。29・30と31の前後関係については軽然としないが、31のような土器は4期に出現し、5期まで継続し消失してゆき、29・30は5期には、より簡略化し32のような土器へと変化していくことが想定される。31は口縁部文様帶に角押文が使用されていることをもって、5期により位置づけておく。

E類(図6-35・36):縄文系で器形⑤の上器群である。工具は竹管状工具を使用する。

4・5期 D類の31の土器と同様である。

F類(図6-37~46):縄文系で器形①の上器群である。工具は主に竹管状の工具を使用する。

1期 前期末からのモチーフ・文様を引き継ぐもの。施文工具は半截竹管を使用している。

2期 D類2期と同様に簡略化したと思われる文様構成である。また、橋状把手が施される。頭部には沈線によりY字状のモチーフが施文される。

3期 口縁部文様帶が狭くなり、簡略化される。頭部よりY字状の隆線が垂下する。

4期 口縁部文様帶は施文のみとなる。頭部からはやはりY字状等の隆線が垂下する。そして、頭部の間隙には弧線文などの沈線が施文される。

5期 4期の土器に、横方向の区画が施されるのが5期である。44の土器は頭部付近に横円状の区画が施され、45では頭部に垂下した隆線間を沈線によって上下に区画している。

G類(図6-47~49):縄文系で器形④である土器群。

1期 現在のところ1期に相当すると思われる土器は認められない。

2期 47は4単位の橋状把手に区画された間隙を、半截竹管による短斜沈線で充填している。48は前期末からのモチーフの簡略化したものと思われる、沈線による文様が頭部に施文される。沈線は竹管状工具が使用されている。また、口縁部文様帶に、隆線貼り付けがなされ、3期への過渡期であるかもしれない。

3期 49はG類の中に入れているが、沈線文系の土器である。文様帶構成などA・B類の3期ないし4期と類似しており、縄文系と沈線文系の折衷である。また現在、北巨摩郡下では4期以降に該当すると思われるG類の土器は存在せず、3期と4期を境に消失していくものと思われる。

H類(図6-49~59):北巨摩郡内において類として認め難いもの(沈線文系と縄文系の折衷や、異系統の土器)。H類は、要するによく分からぬものといったまとまりがあるので、類とする事には問題があるが、ここでは便宜的にH類とすることとする。

1期 50は沈線文系の土器で、半截竹管により、頭部を多段に区画し間隙を沈線で充填している。頭部の中程に、「蓮華」状の文様がある。これは、長野県飯山市の深沢遺跡や、同中野市鶴ヶ沢遺跡などで出土し

ている土器に見られるモチーフである。これらのことから、50は長野県の北信地域の土器であることが推測される。51は、器形が特殊である。前半期の特徴も色濃く残しているが、胸部の沈線文によるモチーフをもって、沈線文系の1期として理解するものとする。

- 2期 52は器形②であるが、縄文が地文となっている。地文の縄文を取り除けば文様自体はB類2期のものとなる。縄文系には器形②ではなく、この上器を類の中に組み込むことはできない。縄文系と沈線文系の折衷の土器であろう。53は五領ヶ古式と思えない部分もある。53は町野村屋敷添遺跡400号土器出土の土器であり、400号土壙は図6-47を伴う401号土壙に切られている。53は単純に考えれば47の上器以前のものとなる。また、横状の把手が施されていること等から2期としておく。54は概観するとF類の2期であるが、頭部で上器自体に段差を設ける手法をとっている。北巨摩郡下には他にこのような土器はなく、異系統の上器、もしくはその影響と考えたい。55・56は縄文系で比較的大きな柄状の把手を持つ。55は把手の間際に棒に沿って、沈線と截痕文が施される。この截痕文は、北陸系の土器に見られる截痕文とは違い、平向形態は三角形である。三角印刻文が変化したと考えられるこの截痕文を持つ55の土器は、東関東系の土器または、その影響を受けた上器であると言える（今村1985、中山1992）。56は把手の間際に沈線でY字状というべきか、つらら状というべきか、形容のしがたい文様が施されている。いずれも時期決定などの根拠に乏しいが、輪状把手をもって、2期としておく。
- 3期 57は縄文系で、F類とは少し異なるが器形①に該当する土器である。口縁部文様帯が狭く、頭部に幾縦貼り付けがなされていることから、3期としておく。この土器には平面形態が三角形ではないが、截痕文状に刺突が施されている。東関東からの影響を考えられる土器である。
- 4期 58は沈線文系と捉えられるが、器形⑤であり、沈線文系にはない器形である。縄文系と沈線文系の折衷であると思われる。
- 5期 59は沈線文系と考えられるが、このような大きな波状口縁をもち、横状の把手を施されている土器の類例をみない。武川村実原A遺跡8号住居址から出土した、図4-31・35・36・42・45とはば変わらない時期として、4期としておく。60は縄文系で、波状口縁でありながら、口縁部文様帯が非常に狭い。波頭部下には漫巻状の角押文が施される。八辺式に相当するものと思われる（小林1988）。

6 まとめ・今後の展望と課題

以上、北巨摩郡下における編年案を示してきたが、ここでまとめとして、本稿の編年案に対する反省と、今後の展望と課題を挙げておきたい。

ここでは、中期初頭・五領ヶ古式土器の編年を行ったわけであるが、その前後の前期末晩Jc・十三苦提式と落窓式との関係を明確に提示する事ができなかった。このことによって、非常に中途半端な編年案になってしまったことをお詫びしたい。

地域の設定として、任意の区分として北巨摩郡という現在の行政区画を用いたため、ここでもう一度、この区分について考えておきたい。基本的に該期の土器群は、北巨摩郡の中で系統立て流れを追うことができるが、町野村屋敷添遺跡、蘿崎市山影遺跡については、北巨摩郡内だけでは理解に余る土器がある。蘿崎市山影遺跡の土器は、関東系の土器、またはその影響を受けたものとして甲府盆地とのかかわりの中で解釈することができると思う。しかしながら、屋敷添で出土している土器は、截痕文など関東系の要素を見て取ることができるものの、図4-46・53のように頭部付近で段差をつけるものなど、理解に余る土器が多い。今後、茅ヶ岳山麓での該期の発掘成果に注目したい。

本稿では、前述したように、極めて限られた地域を対象としているため、該期の土器分布圏の大きな動態については、予測することができない。今後の課題として、他地域においても今回と同様な編年を組み立てなければならないと考えている。

また、沈線文系と縄文系の共伴関係について野代が述べているように(野代1995)、この両者が共伴関係を持って出土していることが少ないとあげられる。今回は器形復元できる個体だけ扱っているため、完全な傾向は提示できないが、対象とした60個体の出土地点・出土状況を見てみると、例えば、大泉村天神遺跡では、A区9号住居址では埋葬炉3個体全て沈線文系、B区2号住居址の埋葬炉3個体全て縄文系、B区29・35号住居址出土の土器は埋葬炉も含めて縄文系、B区22・24号住居址の埋葬炉はそれぞれ2個体あり、縄文系、沈線文系が1個体ずつである。土壌出土は2個体あり、いずれも縄文系である。該期の上器を多く輩出する長野県の大石遺跡についても同様な傾向が見られる。また、全体の傾向として、上塙から出土する土器は縄文系が多いようである。このような傾向が、詳細な分析によっても見て取れるのかを含め、今後の課題としたい。

7 おわりに

北巨摩郡にいながら、多くの土器を実見する事のないままに、本稿を執筆してしまったことを深く反省している。勉強が不十分であったために、非常に解りにくいものになってしまったことをお詫びしたい。筑波大学に在学中に、西田正規先生が、「解りにくいことを、解りやすくするのが研究だ」とおっしゃられたことを思いだす。記号などをできるだけ使わず、文章を解りやすくするということも今後の課題として研究していきたいと思う。

本筆ながら、本稿執筆にあたり、未出の資料を見せていただきなど、多くのご協力を賜った北巨摩郡埋蔵文化財の担当者の方々や、ご助言、ご指導をいただいた方々、図版作成に協力いただいた方々に感謝の意を表したい。

＜参考文献＞

- 今村啓南・吉田裕 (1972) 「宮の原貝塚」
- 今村啓南 (1985) 「五箇ヶ台式土器の編年—その細分及び東北地方との関係を中心に—」
『東京大学文学部考古学研究室紀要』4
- 今福利恵 (1990) 「勝坂式土器様式の個性と多様性」『考古学雑誌』76-2
- 岩佐今朝人ほか (1981) 「頭嫁沢遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書—茅野市・原村その3—』
- 上守秀明 (1995) 「東関東の様相」『第8回 縄文セミナー 中期初頭の諸様相』
- 高岡幸雄 (1977) 「平出三類△土器の編年的位置づけとその社会背景」『信濃』29-4
- 江坂輝弥 (1949) 「相模五箇ヶ台貝塚調査報告」『考古学集刊』1-3
- 数野雅彦 (1984) 「角擗文土器の研究」『三陵』10
- 数野雅彦 (1986) 「北陸系土器研究序説—縄文時代中期窯業の編年対比を中心として—」
『山梨考古学論集』I
- 加藤三千雄 (1995) 「北條の様相」『第8回 縄文セミナー 中期初頭の諸様相』
- 小林謙一 (1984) 「中部・関東地方における勝坂・阿丘台式土器成立期の様相」『糸奈川考古』19
- 小林謙一 (1986) 「中部・西関東における縄文時代前期窯業—中期初頭の土器群について」『小黒坂南遺跡群』

- 小林謙一（1988）「東関東地方縄文時代中期初頭段階の土器様相
—「八辺式」土器群の設定とその編年的いちについて—」『村上徹君追悼論文集』
- 小林謙一（1988）「縄文時代中期勝坂式・阿玉台式土器成立期におけるセツルメント・システムの分析
—地域文化成立過程の考古学的研究(2)—」『神奈川考古』24
- 小林謙一（1989）「縄文時代中期勝坂式・阿玉台式土器成立期における土器群組成比の分析」『考古学の世界』
- 小林謙一（1991）「第6節 縄文時代前期末葉から中期にかけての三矢田遺跡」
『真光寺・広布遺跡VI、三矢田遺跡 遺物考収編』
- 小林謙一（1993）「多摩における勝坂式成立期の様相」『東京考古』11
- 小林謙一（1994a）「甲府盆地周辺における勝坂式成立期の土器様相」『山梨考古学論集』III
- 小林謙一（1994b）「五領ヶ谷貝塚出土土器について」『民族考古』2
- 小林謙一（1995a）「庄内関東の様相」『第8回 縄文セミナー 中期初頭の諸様相』
- 小林謙一ほか（1995b）「多摩丘陵、武藏野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」
『シンポジウム 縄文中期集落研究の新地平』発表要旨・資料
- 佐藤達夫（1974）「土器型式の変遷—五領ヶ谷式と勝坂式の同一」『日本考古学の現状と課題』
- 谷井創也（1982）「縄文中期土器群の判斷」『研究紀要』
- 坂本勝也（1995）「勝木原の様相」『第8回 縄文セミナー 中期初頭の諸様相』
- 寺内隆夫（1984）「角印文を多用する土器群について」『下総考古』7
- 寺内隆夫（1987）「五領ヶ谷式土器から勝坂式土器へ 型式変遷における一視点」
『長野県埋蔵文化財センター 紀要』1
- 守崎裕助（1995）「新潟県の様相」『第8回 縄文セミナー 中期初頭の諸様相』
- 中山真治（1992）「五領ヶ谷式土器—その段階設定と系統について」『東京考古』10
- 野代幸祐（1994）「山梨県に於ける縄文時代前期末から中期初頭の様相」『健康村遺跡』
- 野代幸祐（1995）「第1節 縄文時代の遺構・遺物について」『日影田遺跡（第1・2次調査）』
- 伴信夫ほか（1976）「大石遺跡」『反対県中央道埋蔵文化財発掘調査報告書—茅野市、原村その1—』
- 藤森栄一（1965）『井戸尻』
- 細田勝（1995）「埼玉県の様相」『第8回 縄文セミナー 中期初頭の諸様相』
- 松村恵司（1974）「縄文時代中期初頭土器研究史—五領ヶ谷式系土器群の編年研究をめぐって—」『史館』3
- 松本茂（1995）「東北南半の様相」『第8回 縄文セミナー 中期初頭の諸様相』
- 二上徹也（1986）「縄文時代中期初頭土器の分類と検討」『梨久保遺跡』
- 二上徹也（1987）「梨久保式土器 再考」『長野県埋蔵文化財センター 紀要』1
- 山口達弘（1995）「群馬県の様相」『第8回 縄文セミナー 中期初頭の諸様相』
- 三上徹也・上田典男（1995）「長野県の様相」『第8回 縄文セミナー 中期初頭の諸様相』
- 山内清男（1937）「繩紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1
- 山本寿々雄（1959）「山梨県に於ける縄文土器の展開」『県立富士国民立博物館研究報告』2
- 山本典男（1988）「五領ヶ谷式土器様式」『縄文土器大観』3 中期II
- 吉田裕（1963）「山梨県東八代郡下向山遺跡—縄文中期五領ヶ谷式土器の研究」『考古学雑誌』48-3

研究ノート：磨製石斧と集落遺跡

小宮山 隆

1はじめに

石器の様相から縄文時代集落を解釈・説明することは、集落への多様な視点を導くための有効な手段の一つといえる。その場合に各々の集落遺跡でとりあげられる手法は、その集落遺跡でどのような石器種類を多く出土したのか、つまり表面的な石器組成の時間変化や遺跡間の比較がしばしば検討される（例えば木本1989、新津1992、小宮山1994など）。しかし齊藤英生氏はこのような石器組成の実体に疑問を提示し、「解釈する側の意図によりいかようにも恣意的に操作することが可能である」と指摘する（齊藤1992）。その要因は、多様な生活用具の、また道具の使用場面のごく一部をしめるに過ぎない「道具の死体」（渡辺1996）を一括して並べ立て、その百分比を検討するという研究方法の有効性にこれまで大きな関心が向けられなかつたからにはならない。とくに石器の数量や割合が検討される場合、そもそも出土量に地域的・時間的に変移幅の大きい石器とそうでない石器があり（前山1991）、出土数が少なく時間的変化にも乏しい器種は、実数でも百分比でも表・グラフ内でその存在が隠没する。磨製石斧はその代表的器種といってよい。他の遺物、例えば八ヶ岳山麓の遺跡では打製石斧とか磨石、石器といった器種は発掘調査区だけで数百点、数千点出土し、1軒の生居址からも数十点以上出土することが珍しくもないのに比べると、磨製石斧はごく一部の遺跡を例外として調査区全体で数十点単位、住居址からの出土数はさらに少なく全石器点数の数%をしめるにすぎない（早川1987）。そのためか例えば小林康男氏の中部高地を中心とした石器組成論（小林1974、1975）など從来の研究においては、数量的に埋没してしまう磨製石斧への関心は比較的薄かった。

多くの磨製石斧は樹木伐採と木材資源の獲得や加工に用いられた、「機能的特定性 (special-use) をもつ行為」（堤1997）であり、中韓度森林帯を切り開いて定住生活

を営む縄文時代社会にあって重要な道具の一つと推測できる。そして、発掘調査で予測される集落の規模変化や移動、廃絶は、生活空間規模や建築材の需給に変化をもたらし、磨製石斧の必要性も姿質した可能性がある。この点に磨製石斧出土量と縄文時代集落の消長との接点を整理する意義があると考えたい。しかし、磨製石斧に関する從来の研究は大森隆志氏がまとめているように、斧の大きさや形態の分類とその時間的展開に議論が集中してきた（図1）（大森1989）。そこでは磨製石斧と遺跡や集落の変遷過程との関係について触れられることはほとんどない。石器組成から語られる縄文時代集落論と磨製石斧研究との間の距離はなかなか縮まらないのが現状である。

ここでは、縄文時代集落の変遷過程とその時代ごとの違いをさぐることを目的に、磨製石斧の出土量を一つの素材としてとりあげて大きな傾向を指摘する。事例としては、遺跡としてまとまりのある範囲を比較的大きく調査された集落遺跡をとりあげる（図2）。そして、およそその時期が



図1 磨製石斧の形態内訳変化（大森1989）

判明している住居址から出土した磨製石斧の出土量を時期を追って検討する。とくに居住の連続性が結果的に断絶する時期の状況、すなわち集落の縮小、廃絶、移動といった局面における磨製石斧の出土量に着目する。もちろん、石斧麻糬の時期推定のおよその目安になること以上に、住居址出土の石斧を扱うことが、携帯・保管方法のよくわからない石斧の使用と廃棄という過程をどの程度反映しているのかを積極的に議論できる材料はない。なお、住居址が多數確認されているても、時期推定が不明なものが大半をしめる調査事例、および遺構の保存状態などの原因で、住居址からの出土遺物がそもそも発見されていない調査事例は除外する。

2 事例の検討

(1) 阿久遺跡(図3-1) 前期初頭～諸穢b式期。諸穢b式期はそれ以前と比較して磨製石斧の出土量が微増、住居址数は逆に微減するので住居1軒あたりの出土数は増加する(長野県教育委員会1982)。

(2) 十二ノ后遺跡(図3-2) 早期末～諸穢b式期。諸穢b式期より新しい段階では五領ヶ台式期に1軒住居があり、その

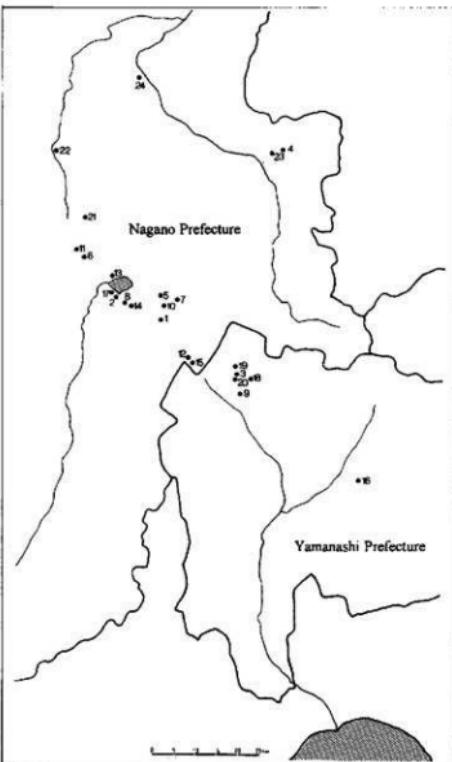


図2 遺跡の位置(文中遺跡番号に対応する)

後は中期後半曾利Ⅱ式期まで住居址は発見されていない。時期決定が困難な住居址が比較的多いが、中越式期、黒浜式期、諸穢c式期、諸穢b式期はそれぞれ1軒あたりの磨製石斧出土数が同程度である。なお時間差をおくが五領ヶ台式期でもこの数値はほぼ同じである(長野県教育委員会1976)。

(3) 大神遺跡C地区(図3-3) 諸穢b～五領ヶ台式期。諸穢b式期から諸穢c式期にかけて磨製石斧出土数は一貫して減少傾向にあるようで、1軒あたりの出土数も大きく減少し五領ヶ台式期では出土していない(山梨県教育委員会1994)。

(4) 川原田遺跡(図3-4) 新道～加曾利E2式期。その後の段階は若干の土器片が出上しているにすぎない。加曾利E2式期は中期既半に比較して住居址数が減少するのに対して、磨製石斧の出土数はほぼ一定(加曾利E1式期に比べると増加)なので、1軒あたりの出土数は増加する(御代田町教育委員会1997)。

(5) 棚畑遺跡(図3-5) 諸穢c～曾利V式期。ただし後期から晩期にかけては柱穴群がある。曾利V式期にかけての住居址数の減少傾向ほど磨製石斧のそれは人さくないため、1軒あたりの磨製石斧出土数は微増する(茅野市教育委員会1990)。

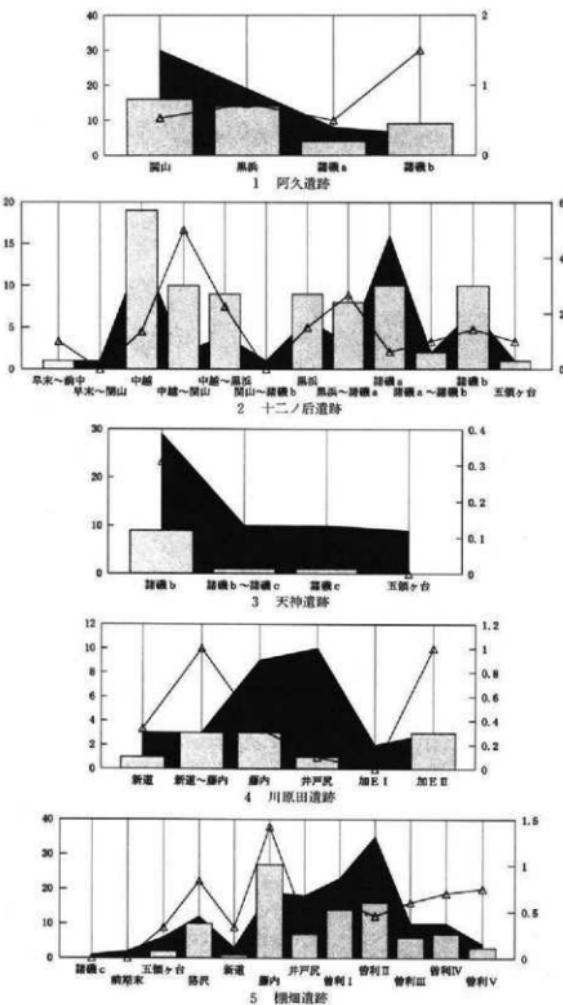
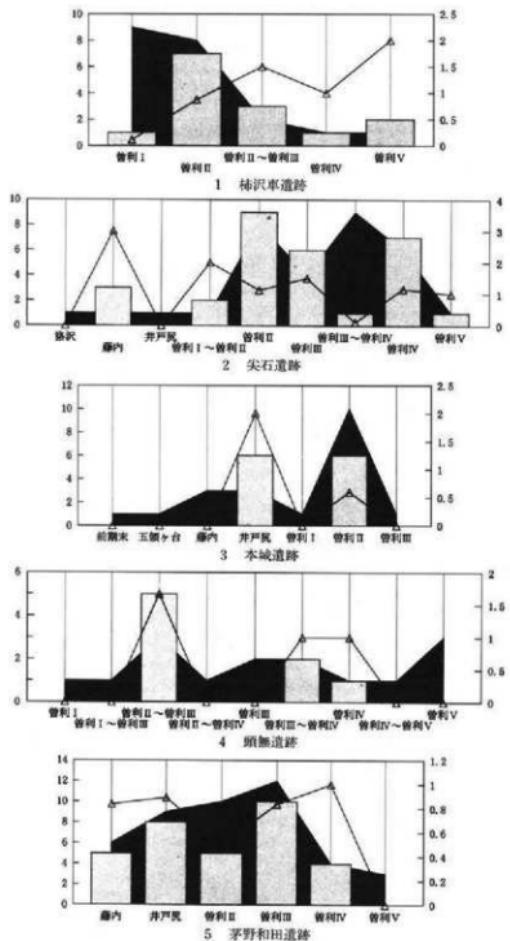
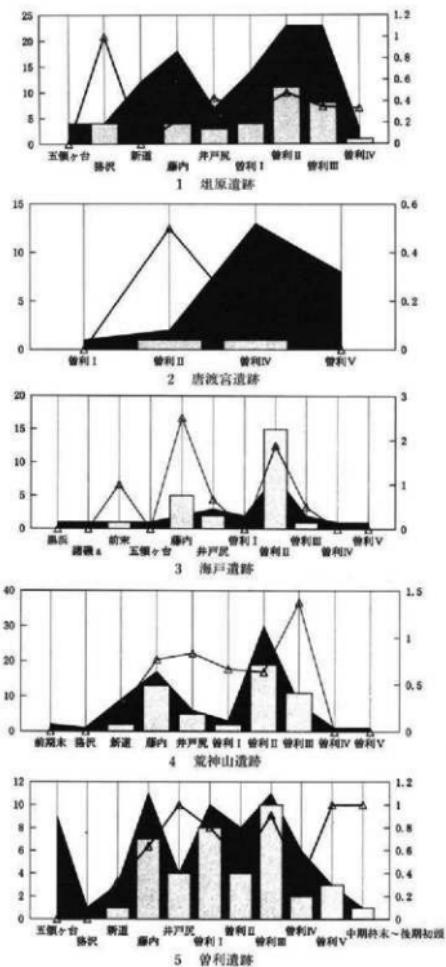


図3 石笄出土量の変化1



■住居址数 □石器出土数
△住居址1軒あたりの石器出土数

図4 石器出土量の変化2



■生居址数 □磨削出土数
▲生居址1軒あたりの磨削出土数

図5 石斧出土量の変化3

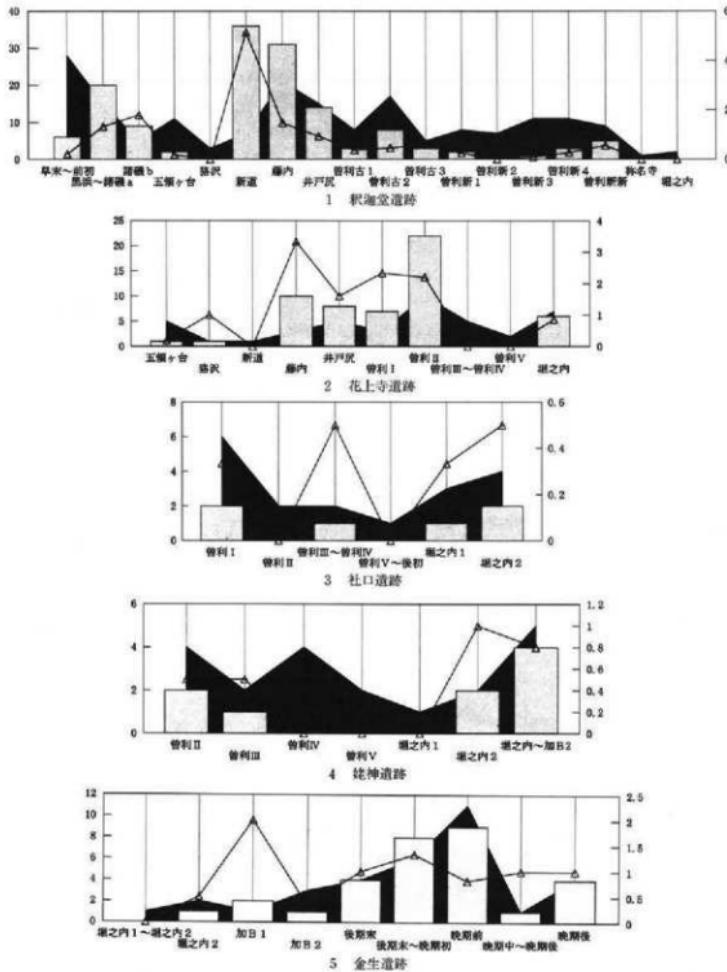


図6 石斧出土量の変化4

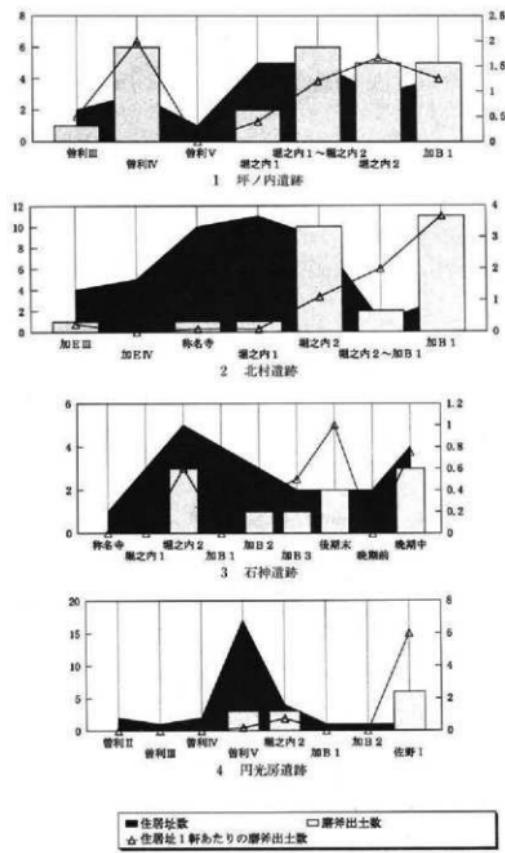


図7 石斧出土量の変化 5

(6) 植沢東遺跡（図4-1） 倭利I～倭利V式期。磨製石斧の出土数は減少するが、住居址数の減少率に比較すると小さく、1軒あたりの磨製石斧出土数は増加する（塩尻市教育委員会1984）。

(7) 尖石遺跡（図4-2） 猿沢～倭利V式期。倭利V式期にかけての住居址数と磨製石斧出土数は同程度の減少傾向にある（宮坂1957）。

(8) 本城遺跡（図4-3） 前期末～倭利III式期。ただし猿沢・新道式段階の住居址は発見されていない。井戸尻式期と倭利II式期の住居址のみから出土する。倭利III式期の住居址からは磨製石斧は出土していない（長野県教育委員会1975）。

(9) 頭無遺跡（図4-4） 倭利I～倭利V式期。倭利V式期の住居址からは磨製石斧は出土していない（山梨県教育委員会1975）。

- (9) 茅野和田遺跡東台地（図4-5） 藤内～曾利V式期。曾利V式期の住居址からは磨製石斧は出土していない（茅野市教育委員会1970）。
- (10) 鳩原遺跡（図5-1） 五領ヶ台～曾利IV式期。曾利IV式期にかけて大きな変化はない（塙尻市教育委員会1986）。
- (11) 唐渡宮遺跡（図5-2） 曾利I～曾利V式期。住居址からは2点のみ出土。曾利V式期では出土していない（富士見町教育委員会1988）。
- (12) 海戸遺跡（図5-3） 黒浜～曾利V式期。曾利IV・V式期の住居址からは出土していない（長野県考古学会1967、岡谷市教育委員会1968）。
- (13) 岩神山遺跡（図5-4） 前期末～曾利V式期。曾利IV・V式期の住居址からは出土していない（長野県教育委員会1975）。
- (14) 曾利遺跡（図5-5） 五領ヶ台～後期初頭。ただし同じ台地上の隣接地に後晩期の大花遺跡がある。1軒あたりの磨製石斧出土数は0.5～1点程度の範囲で推移している（富士見町教育委員会1978）。
- (15) 釧遊堂遺跡（図6-1） 早期末～前期初頭～堀之内式期。称名守式期以降、磨製石斧は出土していない。中期前半の折糞～堀之内式期に比べると中期後半から出土量が少ない（山梨県教育委員会1986、1987）。
- (16) 花上寺遺跡（図6-2） 正領ヶ台～堀之内式期。曾利III～V式期にかけて住居址数、磨製石斧出土数とともに増加（岡谷市教育委員会1996）。
- (17) 杜口遺跡第3次調査（図6-3） 曾利I～堀之内2式期。堀之内2式期にかけて住居址数、磨製石斧出土数ともに微増（高根町教育委員会ほか1997）。
- (18) 鶴神遺跡（図6-4） 曾利II～加曾利B2式期。後期の住居址は時期の確定が困難。曾利式後半と堀之内・加曾利B式期とで対比させた場合、磨製石斧出土数と1軒あたりの磨製石斧出土数とともに増加傾向にあるといえる（大泉村教育委員会1987）。
- (19) 金生遺跡（図6-5） 堀之内1式期～晩期後半。やや時間幅があるが曾利式前半の住居もある。住居址数と磨製石斧出土数が同様の増減変化をする。後期末以降、晩期後半まで1軒あたりの磨製石斧出土数が約1点前後で安定する（山梨県教育委員会1989）。
- (20) 坪ノ内遺跡（図7-1） 曾利III～加曾利B1式期。堀之内1式期以降磨製石斧出土数は増加し、堀之内2式期から大きな変化はない（松本市教育委員会1990）。
- (21) 北村遺跡（図7-2） 加曾利EIII～加曾利B1式期。堀之内2式期以降、住居址数の減少とは対照的に磨製石斧出土数と1軒あたりの出土数ともに増加する（長野県教育委員会1993）。
- (22) 石神遺跡（図7-3） 称名守～晩期中葉。堀之内2式期以降増減を繰り返すが、後期前半から後期末・晩期中葉にかけては増加傾向にある（小諸市教育委員会1994）。
- (23) 円光房遺跡（図7-4） 曾利II～佐野I式期。ただし住居址の時間的連続性は曾利V式期と堀之内2式期、および加曾利B2式期と佐野I式期の間でそれぞれ断続する。佐野I式期の26号住居址からは6点出土し、他時期より多い（戸倉町教育委員会1990）。

3 集落断絶期の磨製石斧出土量

以上の事例は、北巨摩とその周辺地域において偶然に大規模開発があり、かつ住居址が比較的多数出土した調査報告を任意にとりあげたものにすぎない。また、各グラフに示したような住居址数や石斧出土数の変遷は一見、集落の系統的な変遷とイメージが重なるおそれがあるが、発掘調査時の技術的限界や土器型式か

ら任意に設定された時間幅や連続性の曖昧さの問題がある。そして、結果的に廃棄されるまでのいわば石斧ライフサイクルと住居のそれとがどのような関係にあるのかを検討できる調査報告事例もなく、同じ遺跡空間で集落生活がさらに継続するなかでは、住居へと廃棄された石斧の量の変化を追求することに直ちに重大な意味を見いだせるとも考えにくい。

しかしながら、発掘調査から予測される集落断絶時の石斧出土量を、それ以前の時期と比較する場合は次のような傾向がある。検討のかぎりでは中期後半（加曾利E・曾利式期）のいずれかの段階で断絶する事例では11遺跡中6遺跡で住居址1軒あたりの石斧出土量が大きく減少し、さらに全く出土しない事例が多い（本城・頭無・茅野和田東・唐渡宮・海戸・荒神山）。中期後半で明らかに増加傾向にあるのは3遺跡だが、そのうち棚畠遺跡では後期以降にも柱穴群があり、これを集落機能の延長とも解釈でき、中期後半に集落が断絶したのかは不明である。ところが、後期から晩期のなかで断絶する事例では10遺跡中9遺跡においてその出土量は同程度か増加し、減少するのは駿遊室遺跡1例にとどまる。このように少なくとも中期後半と後期以降とで、集落断絶時の石斧出土量およびその推移に比較的明瞭な相違を指摘できる。このなかには後期以降に出土事例が増加するといわれる儀器・装飾品的な小型石斧（鈴木1991）に属するものもあるが、管見のかぎりではごく少数で、この傾向に影響を与えるものではない。石斧形態に関しては図示しなかったが、集落断絶時に石斧出土量が増加する中期後半では少數グループの川原田・棚畠・柿沢東の3遺跡では、断絶時住居址出土の石斧全てが定角式である。後期以降では定角式が数の上で圧倒し、とくに北村遺跡ではほぼ全点が定角式に属するという（長野県教育委員会1993）。

集落断絶期における石斧出土量の増減は石斧保有量の大規模な変化、石斧の用途・機能の変質、そして石斧廃棄のあり方などいくつかの要因が考えられる。中期後半と後晩期の出土傾向の相違もこうした背景を一つ一つ検討する必要がある。石斧はニューギニアなどの民族例ではその耐用年数が数年から十数年におよび（佐原1994）、一部の剥片石器や打製石器のように使用する現地付近で簡単に調達する使い捨ての消耗品というよりは、長期間にわたり大切に使った「耐久消費財」の部類に石斧は入るだろう。そうだとすれば、ある一定量の石斧を破損などの理由により廃棄するときは、常にそれに代替する必要量を製作・入手していただろう。打製石斧や磨石など他の石器類をはじめ土器などの「廃棄物」が出土する中期後半の住居址で、磨製石斧が全く出土しなくなる事例が多いことは、断絶期の集落周辺において石斧を使用する場面がそもそも少なかったこと、そしてその集落内に廃棄することもあまりなかったことが考えられる。想像を遥しくすれば、中期後半の傾向は石斧の使用・廃棄場面が旧米の集落地からより離れていく方向にあり、後晩期では少なくも廃棄が旧米の集落地周辺でとりおこなわれ続けたのかもしれない。このことを北巨摩地方など中部高地で顕著な遺跡・集落跡の数と分布にみられる、中期後半における増加・拡大および後晩期の減少・収斂（小宮山1996、保坂1997）という現象に即断的に関連させることはできないが、縄文時代の集落の定着性を考える一つの視点として今後に論点を整理していかたい。

引用文献

大泉村教育委員会1987『佐久間遺跡』

大森隆志1989『縄文時代の磨製石斧について』『山梨考古学論集』II 169-189頁 山梨県考古学協会

岡谷市教育委員会1968『海戸 第2次調査報告』

岡谷市教育委員会1996『化上寺遺跡』

小林康男1974・1975『縄文時代生産活動のあり方(1)～(4)』

- 〔信濃〕26-12 59 69頁、27-2 66-81頁、27-4 25-42頁、27-5 73-85頁 信濃史学会
- 小宮山隆1994「縄文時代中期後半の遺跡分布と集落変遷」『筑波大学先史学・考古学研究』5 1-31頁 筑波大学歴史・人類学系
- 小宮山隆1996「八ヶ岳南麓周辺の縄文遺跡」『山梨考古』59 2-3頁 山梨県考古学協会
- 小諸市教育委員会1994『石神』
- 齊藤基生1992「当間石器造成」「人間・痕跡・遺物—わが考古学論集2」147-153頁 発掘者談話企
- 佐原 真1994『糸の文化史』 東京大学出版会
- 塩尻市教育委員会1984『塩尻東地区県立公園整備事業発掘調査報告書』
- 塩尻市教育委員会1986『長野県塩尻市旭原遺跡発掘調査概報』
- 木本 鮎1989「縄文時代集落の生産活動と祭祀」『山梨考古学論集』II 147-168頁 山梨県考古学協会
- 鈴木道之助1991『石器入門事典 縄文』 柏書房
- 高根町教育委員会はか1997『社口道路第三次調査報告書』
- 茅野市教育委員会1970『茅野和田遺跡』
- 茅野市教育委員会1990『櫻坂』
- 堤 隆1997「浅間山南麓における縄文社会復原に向けて」『川原田遺跡 縄文編』611-630頁 御代田町教育委員会
- 戸倉町教育委員会1990『円光房遺跡』
- 長野県考古学会1967『海ノ・安源寺』
- 長野県教育委員会1975『長野県中央地理文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その3—』
- 長野県教育委員会1976『長野県中央地理文化財包蔵地発掘調査報告書—諏訪市その4—』
- 長野県教育委員会1982『長野県中央地理文化財包蔵地発掘調査報告書—原村その5—』
- 長野県教育委員会1993『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書II北村遺跡』
- 新津 健1992「縄文晚期集落の構成と動態」『縄文時代』3 96-129頁 縄文時代文化研究会
- 早川正一1987「磨製石斧」『縄文文化の研究』7 60-74頁 越山閣
- 富士見町教育委員会1978『曾利 第三、四、五次発掘調査報告書』
- 富士見町教育委員会1988『青波古』
- 保坂康夫1997「山梨県下の遺跡・住居地変動と通史的理解」
- 『山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』13 31-46頁
- 前山耕明1991「縄文時代の石器」『李尚考古学』35 30-33頁 雄山閣
- 松本市教育委員会1990『松本市坪ノ内遺跡』
- 宮坂英式1967『尖石』
- 御代田町教育委員会1997『川原田遺跡 縄文編』
- 山梨県教育委員会1975「山梨県中央地理文化財包蔵地発掘調査報告書—北巨摩郡長坂・羽野・蘿崎池内—」
- 山梨県教育委員会1986、1987「駒淵堂」I・II・III
- 山梨県教育委員会1989「金生遺跡II (縄文時代編)」
- 山梨県教育委員会1994「大神遺跡」
- 誠道 仁1996「遺物から道具へ」『先史考古学論集』5 1-9頁 安齋正人編

II 発掘調査速報

1 後田堂ノ前遺跡

所在地 藤崎市藤井町北下条字後田・坂井字堂ノ前地内

調査原因 市道建設事業

調査期間 1996年4月25日～12月20日（中断を含む）

調査面積 1,800m²

調査主体 藤崎市遺跡調査会

担当者 伊藤正彦



後田堂ノ前遺跡は市内藤井町を南北に貫流する塩川右岸の河岸段丘上、通称藤井平に位置し、藤崎市文化ホール前通り線建設工事に伴い調査を実施した遺跡である。遺跡が位置する藤井平は古来より「藤井五千石」と称される穀倉地帯として知られており、肥沃な土地を背景として古来より人々の生活の舞台となってきたことは近年の開発事業に伴う発掘調査によって明らかとなってきた。工事は現況道路を直線化する改良拡幅工事であったため、調査対象地は幅約10m、長さ約140mに及ぶ狭長な範囲となり、東側から一筆ごとに第1区～5区として各区ごとに調査を行った。道路を挟んだ反対側には昨年度調査を行い、住居址4軒（古墳時代後期2軒、奈良時代2軒）を検出した坂井堂ノ前遺跡が位置する。

検出された遺構は弥生時代から平安時代の住居址16軒（弥生時代後期6軒、古墳時代後期4軒、奈良時代2軒、平安時代2軒、時期不明2軒）、土坑5基、墓石土坑1基、溝状遺構4条、水田址が検出された。ここでは古墳時代と奈良時代の成果について触ることとする。

古墳時代

今回の調査では古墳時代後期に位置付けられる住居址4軒を検出した。市内ではそれまで検出例の無かった当該期の遺構を昨年度の後田第2、坂井堂ノ前遺跡につづいて検出した。これまで他地域の例から推し測っていた当該期の様相を市の資料から考察することが出来つつある。ここでは坂井堂ノ前遺跡も本遺跡と道路を隔てた反対側に位置するため、その成果をも含めて述べていく。本遺跡から検出した遺構は住居址4軒、坂井堂ノ前遺跡からは2軒の住居址が調査された。合わせて6軒の住居址を検出したことになる。住居址の規模は一辶4～5mとなる。出土した遺物は土師器壺・碗・甕・壺・鉢・瓶などがある。壺は丸底で体部と口縁部の境に稜を有し、口縁部が緩やかに内湾しながら外反し、口唇部に至り内湾する内湾口縁壺が大部分となる。しかもこれら壺には既に扁平化の様相が窺われる。甕はほとんどが長胴となり、ハケ整形されたものが主体を占めるようだが、本遺跡6号住出土資料はヘラケズリされるものが多くなっている。8号住から出土した甕は最大径が口縁部にあり、既に長胴化が極限まで達していることが知れる。本遺跡及び坂井堂ノ前遺跡出土土器は年代的には7世紀前葉に位置付けられよう。前述したように昨年度からの調査によって市内の歴史的空白期間が埋まりつつある。既に古墳時代前期には藤井平との比高差約70mを有する七里岩台地上に住居址約100軒を検出した坂井南遺跡が存在し、前期を通じ比較的安定した居住が認められる。その後古墳時代中期の遺跡は市内では調査例が少なく、僅かに本遺跡から南東へ約900m、塩川の河岸段丘崖近くに位置し、住居址3軒を検出した枇杷塚遺跡のみが知られる。資料の絶対数が足りない現状で多くの語ることは慎まなければならないが、古墳時代中期以降それまで前期を通じ七里岩台地上に存在した居住域は藤井平に移動し生産域と近接して、更に言えば土地とより緊密した状態となって經營が行われたと考えられる。

今回検出された水田址などは残念ながらその時期を特定できなかったが、集落の縁辺に存在する低湿地を利用して経営されており、こうした状況が古墳時代後期においても推定できるであろう。

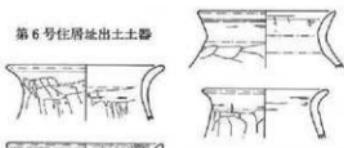
奈良時代

今回の調査では奈良時代に位置付けられる住居址を2軒検出した。また坂井堂ノ前遺跡からも2軒の住居址を検出していることから、ここでもその成果を含めて述べていく。検出した住居址の規模は一込3~4m程となり、カマドは東壁に作られている。出土した遺物は須恵器蓋・坏・甕・壺、土師器坏・甕・鉢などがある。特に坂井堂ノ前遺跡4号住からは盤状坏と甲斐型坏の出現期のもの及びクロクロ整形土師器甕などが良好な一括資料となっている。時期的には両遺跡から検出されたいずれの住居址も8世紀前半に位置付けられよう。特に甲斐型土器研究グループによる研究成果により、甲斐型土器の出現が從来より約50年遅る結果となり、それまで奈良時代におかれていた盤状坏も8世紀前半に押し込められる状況となった現在では奈良時代前半の土器様相について再考すべきであろう。更に今回古墳時代後期の住居址と共に奈良時代の住居址が検出されたことは注意を要する。市内において今まで奈良時代の遺構は藤井平を中心として検出されているが、古墳時代後期から引き続き居住が認められる遺跡の検出は坂井堂ノ前遺跡を含めた本遺跡のみである。特に調査面積19,000m²にも及び、奈良・平安時代の住居址417軒を検出した宮ノ前遺跡では6~7世紀代からの居住は認められず8世紀前半から突如として生活の痕跡が現れる。こうした現象を報告者は開墾獎勵政策による計画的移住とみて、宮ノ前遺跡を開墾集団の集落と解釈しているが、一方では本遺跡のような弥生時代に始まり、少なくとも古墳時代後期より連続と形成され続けたわざ伝統的な集落も同時に存在したことになる。今後こうした2類型の集落が設定出来るのか事例の集積を待って考えてみるべきであろう。尚、これは過去の調査における地点・範囲の制約を、また古墳時代後期の遺跡が昨年度になってようやく検出されたこと等当然に考慮しなければならないが、宮ノ前遺跡の事例を勘案するならばなお一考を要すると思われる。

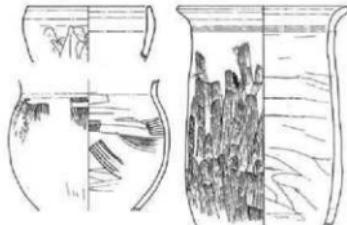
第5号住居址出土土器

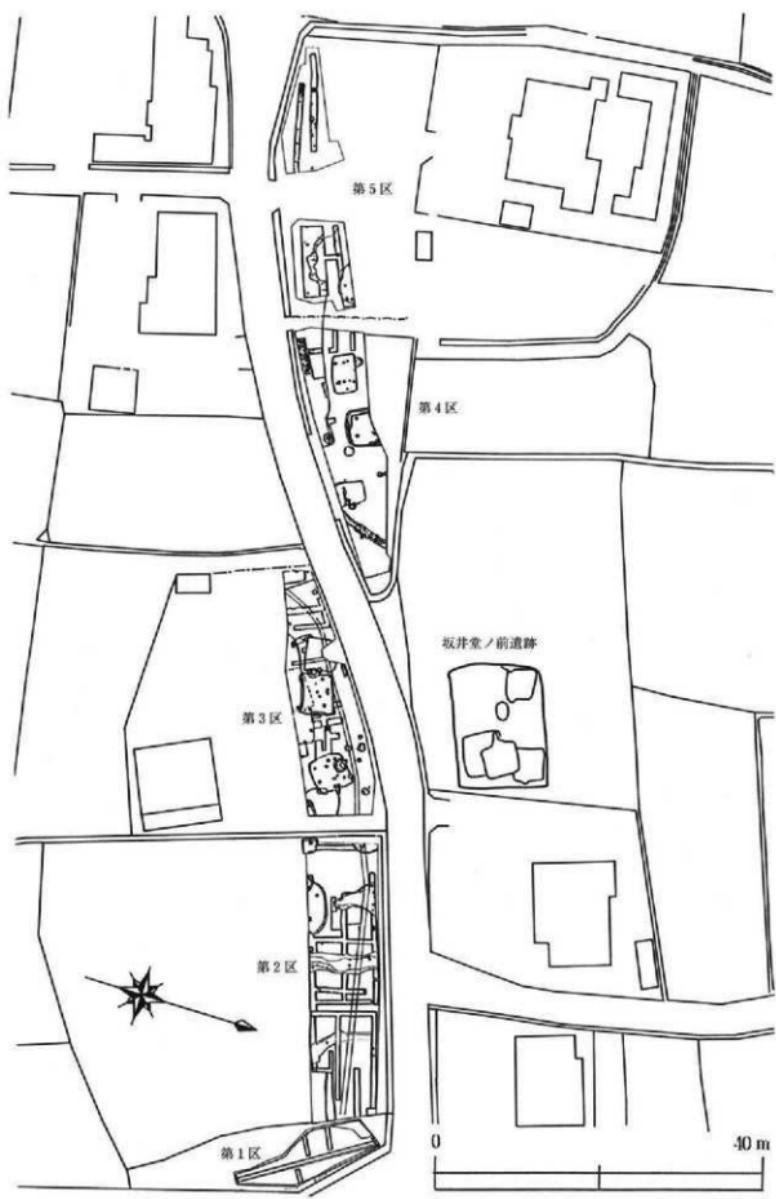


第6号住居址出土土器



第8号住居址出土土器





みやのまえ 2 宮ノ前第5遺跡

所在地 茂崎市藤井町駒井字宮ノ前2248-1番地

調査原因 茂崎市立北東児童センター建設

調査期間 平成8年4月23日～7月24日

調査面積 約400m²

調査主体 茂崎市教育委員会

担当者 山下孝司(茂崎市教育委員会社会教育課)

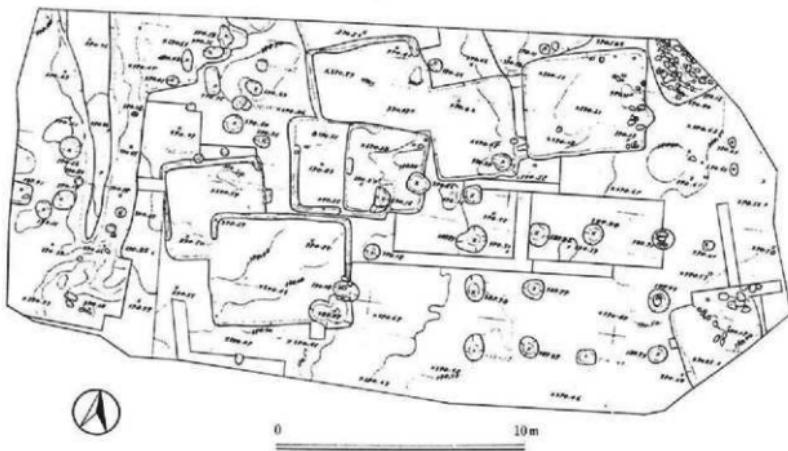


宮ノ前第5遺跡位置図 (1/25,000)

発掘調査の概要

平成8年3月に茂崎市福祉事務所から、児童センター建設にかかる茂崎市藤井町駒井字宮ノ前2248-1番地の開発に関して埋蔵文化財取り扱いの事前協議が茂崎市教育委員会にあった。当該地域は宮ノ前遺跡の周辺でもあり現地を踏査したところ遺跡の存在が予想されたため、本市教育委員会では直ちに遺跡有無確認の試掘調査を行った。その結果、土師器破片が出土し遺跡の存在を確認したため、本市教育委員会と福祉事務所側で協議を行い、遺跡名を宮ノ前第5遺跡、調査主体を茂崎市教育委員会として、建設工事に先立って面積約400m²を対象として発掘調査を行った。

調査は重機により遺物出土面乃至遺構確認面まで排土作業を行い、地形等を考慮し測量の基準として、任意に5m間隔の方眼を設定し、鋤籠等を用い精査を行い遺構確認後振り下げを行った。調査区域は東西方向が長いほぼ長方形の範囲で、西側には溝が南北方向にはしり、住居址は東側に発見され、北西側には斜めに凹地が横切っていた。発見された遺構は、堅穴住居址12軒、掘立柱建物址1棟、溝1条、溝状凹地1基、凹地1基である。出土遺物は土師器・須恵器が主体で、奈良・平安時代の遺跡となっている。



宮ノ前第5遺跡全体図 (1/200)

3 滝下遺跡

所在地 須玉町大藏字滝下

調査原因 町営滝下団地建設

調査期間 1995年1月9日～3月25日、7月10日～8月31日

調査面積 9,100m²

調査主体 須玉町教育委員会

担当者 山路恭之助



調査の経過と方法

滝下遺跡を含む須玉町大藏字滝下地区の水田に、滝下団地造成工事が計画されたことに伴い、工区内における埋蔵文化財所在確認調査が平成6年3月に実施された。その結果、平安時代から中世、近世にわたる遺物と、竪穴住居跡、柱穴と思われる遺構を発見した。

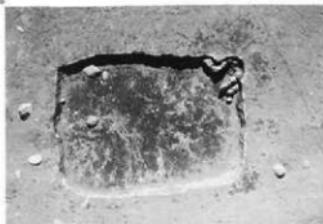
発掘調査は、工区の内堀川右岸端にあたる河床礫堆積層を除く12,000m²を対象に、重機により表土を除き、さらに精査により遺構等が濃密に分布する南傾緩斜面台地上の9,100m²に公共座標系によるグリッドを設定して、第1次、第2次と2調査区に分割して実施した。遺構実測図は航空写真測量によった。調査区域は耕作土の下に、やや灰色がかった、粗い粒子のもろい褐色土、粘性がありしまった褐色土(平安時代の包含層)、淡黄褐色土が堆積する。遺構は淡黄褐色土を掘り込んでいる。

遺構と遺物

検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡7軒(うち1軒はカマド及び柱穴等の付属施設をもたない)、方形竪穴遺構6基、北側に庇を設けた2間×4間(4m×8.2mで庇幅1.2m)の純柱式掘立柱建物跡1軒、土坑41基、ピット多数、溝状遺構17条、暗渠2条である。純柱式掘立柱建物跡の北側庇から30cmには、幅25~30cm、深さ5~6cmの溝が設けられていた。庇から流れ落ちる雨水排水路と思われる。

遺物は、平安時代の土師器、須恵器を主体に、灰釉陶器、青青磁器片、鐵錐、鐵器、煮沸用土器のほか、縄文時代の土器片、黒曜石剝片が少量、常滑焼の壺、室町時代以降と思われる染め付け陶磁器片、天目茶碗、波来鉢などが出土している。

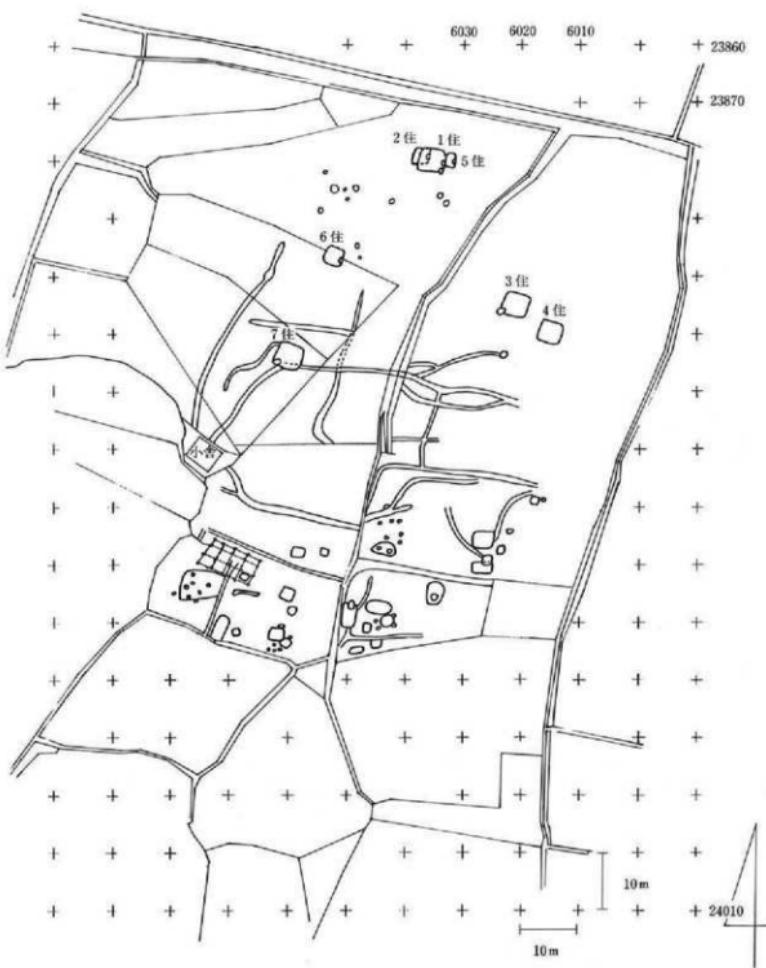
7軒の竪穴住居は出土遺物から9世紀第3~4四半期から12世紀前葉までの遺構と思われる。平安時代4世紀にわたる住居跡を検出できたことは、この時期の遺構の変遷、土器様相を検討するうえで、重要な資料である。



滝下遺跡3号住居址



滝下遺跡3号住居址カマド



澗下道路遺構配置図（グリッドは10m×10m）

4 平林遺跡

所在地 明野村上手字平林9339-1ほか

調査原因 農地転作

調査期間 1996年8月19日～12月13日

調査面積 2,450m²

調査主体 明野村教育委員会

担当者 佐野 隆

遺跡の立地と経歴

明野村が位置する茅ヶ岳山麓は八ヶ岳を北に臨む緩やかに南西に傾斜する丘陵地である。山麓西端は秩父山系に発する塙川に画され、2～3面の河岸段丘が形成されている。茅ヶ岳から発し、塙川へ注ぐ河川は北からウナギ沢、湯沢川、柳沢川、南沢川、正樂寺川とあるが、いずれも小河川である。平林遺跡は柳沢川が山麓を開析、形成した広い尾根上、標高580m前後に展開する。現在の柳沢川流域との距離は約500m、比高差はおよそ20mである（写真1）。遺跡がある永井集落は、かつて永井七池と呼ばれた湧水が点在する地で、今なお残されている湧水もある。平林遺跡も湧水を取り込むようにして展開しているらしい。

平林遺跡は地元で以前からよく知られた遺跡であった。遺跡周辺は昭和31年に山梨県農業試験場茅ヶ岳試験地が設置されたが、昭和40年頃には試験場が移転し、跡地は昭和35年に明野中学校用地、昭和47年に明野村立小学校として、自衛隊の手により造成された。造成の際には、縄文時代中期竪穴住居の炉跡、土器などが発見された。昭和37年、明野小学校北に隣接して、明野村営旭ヶ丘住宅が建設される。ここでも縄文時代の竪穴住居が多数発見され、遺跡発見の話題は、報道機関にも取り上げられた。

さらに、永井地区内で昭和39年に消防用防火水槽が建設された際には、縄文時代中期末葉曾利式の大型深鉢が出土した。逆位で埋められていたという深鉢はすぐに復元され、村文化財指定候補となったほど、村内では話題となっていた。山本寿々雄氏ら山梨県考古学史資料室研究同人会が昭和40年に、遺跡の保護、保全を図るよう村教育委員会に申し入れたのも、これら一連の土木工事がきっかけであった（註1）。

当時、明野村教育委員会教育長であった五味省三氏（現村文化財審議会委員）らは、遺跡の重要性を認め、有志とともに遺跡の発掘調査を行い、竪穴住居跡を複数基発見した。調査を行った地点は平成8年度調査区の西側約20m地点で、明野小学校東に隣接した畠である。現在は果樹畠などになっている。出土した土器などは現在も村教育委員会が保管しているが、遺構の詳細は不明である。



写真1 遺跡遠景（西方より）

こうした経歴をもつ平林遺跡であるが、組織だった発掘調査は平成5年に、県営圃場整備事業にともない遺跡南西端部で発掘調査が実施されたのが初めてである（註2）。近年、遺跡周辺では、養蚕の斜陽とともに桑畑が普通畑に転作されたり、転用宅地化が目立ってきた。

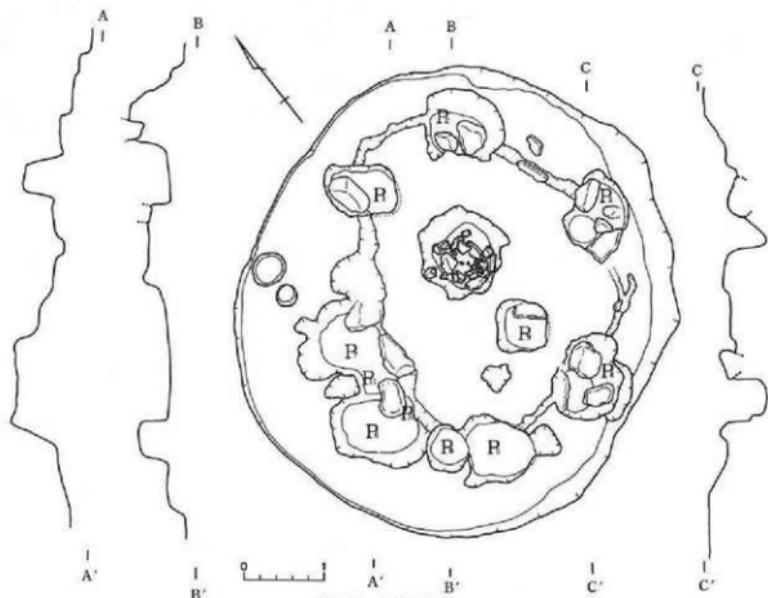
茅ヶ岳山麓は表土がごく薄く、30cmほどの表土を除くとすぐに堅穴住居址が顔を出す。重機を用いて桑抜根が行われると、遺跡はひとたまりもない。そこで村では農地転作の際に、地権者の協力を得て発掘調査を実施しているが、平成8年度に村教育委員会が実施した調査もそうした転作を原因としている。本報告の桑畑は平成6年に抜根の申し出があったが、着手は8年度となってしまった。調査の主旨を理解し、調査着手までの2年間を待っていてくれた地権者福田日出男氏に感謝したい。

遺跡の概要

調査方法と遺跡の概要を報告する。

今回の発掘調査では、極力遺跡の現状保存を図る方針が取られた。桑抜根が行われる予定の畑では表土が厚く、一部を除いて、遺構確認面まである程度の間層を確保できる見通しがあったからである。事前に地権者と協議し、調査後もヤマイモ、ゴボウなど深耕作物は栽培しないこと、天地返しなど掘削行為は行わないことなどを条件に保存協定を締結し、その分発掘調査期間は短く取ることで合意した。

こうした方針のため、遺構の大半は位置を確認記録することにとどめたが、一部表土の浅い地点の遺構を発掘調査した。調査は2m×2mのグリッドを設定し、遺構を確認、位置を記録した。遺構確認面までの遺物はグリッド単位で取り上げた。その結果、縄文時代中期後半藤内式～井戸尻式期と思われる住居跡2軒、中期末葉曾利式期の住居跡1軒、土坑數十基を確認し、藤内式～井戸尻式期の住居跡1軒は発掘調査を行った。



第1図 3号住居跡

3号住居跡

発掘した3号住居跡は、30cmほどの豊穴を残す。茅ヶ岳山麓では比較的の良い豊穴住居址である。疊がやや多い地山を掘り込んだ豊穴は、しまりのない黒褐色土を主とした覆土が堆積し、長径5.8m、短径5.2mの楕円形プランをもつ。レンズ状に堆積した覆土からは、井戸尻式の土器が投棄されたかの状態で出土している。炉跡はやや小ぶりの扁平な礫を長方形に並べてしつらえてある。住居中心軸と炉軸はややずれている。周溝で連結された柱穴が、6本(P₁～P₄、P₈、P₁₁)検出されている。炉傍からは土偶頭部片も出土している。周溝内部で固く踏みしめられた床面が良好に検出された。この床面を切り込んで、土坑3基(P₆、P₈、P₉)が検出された。

P₆号土坑について報告する。P₆は長軸120cm、短軸80cmの楕円形の土坑で深さ約50cmである。疊の多い地山を掘り込み、しまりのない暗褐色土が堆積し、小ビットP₁₉号に切られている。土坑中からは疊、敲き石とともに、横倒しになって、完形の人面把手付深鉢形土器が出土した(第2図、写真3)。土器は風化のためかやや脆く、取り上げの際、把手の一部が粉砕し欠損してしまった(第3図、写真4)。人面が斜め上を向くようにして出土している。

胸部がやや括れ、屈曲底の土器は、高さ30cmで人面部高さは9cmである。3カ所に環状把手をもち、人面の後ろ側は結った髪が下がっているように、高く隆起が盛り上がり、4つの環状把手を形成する。人面は半截竹管で沈線を弧状に描き眉とし、竹管を刺突して丸い目とする。口は深く穴が穿たれている。口縁部に楕円形の櫛状紋、脇部にも楕円紋を施紋する。人面を正面にして左右には西肋を表現したような隆起が貼り付けられている。赤褐色で、長石、石英、雲母、赤色粒子が混じるややキメの粗い胎土である。器面は若干風化しているものの、器内面の焼け付着、外面の煤付着、被熱痕は観察されない。

縄文時代中期後半によくみられる人面把手付深鉢

であるが、茅ヶ岳山麓での発見は初めてで、しかも完形個体である。土器を見つけた作業員さんは、発掘調査に参加して日が浅く、終始興奮気味に仕事をしていたのを思い出す。

平林遺跡は、平成5年度、8年度の調査の結果、中期後半井戸尻式壙に集落として営まれはじめ、曾利式末まで住居をともないながら利用されていたことが分かった。加曾利EIV式の土器と多孔石をともなう土坑も検出されている。後期初頭の土器も若干出土しているが、客体的である。遺跡の北300mの、柄沢川左岸には、後期壙之内2式から加曾利B1式の敷石住居2軒が発見された清水端遺跡がある。住居を営む土地利用としては、加曾利EIV式から後期前半壙之内1式までが空白期になる可能性があるが、中期から後期へと遺跡立地が変化し、より柄沢川へ近づいているのが興味深い。



写真2 3号住居跡 (西方より)



写真3 P₆号土坑

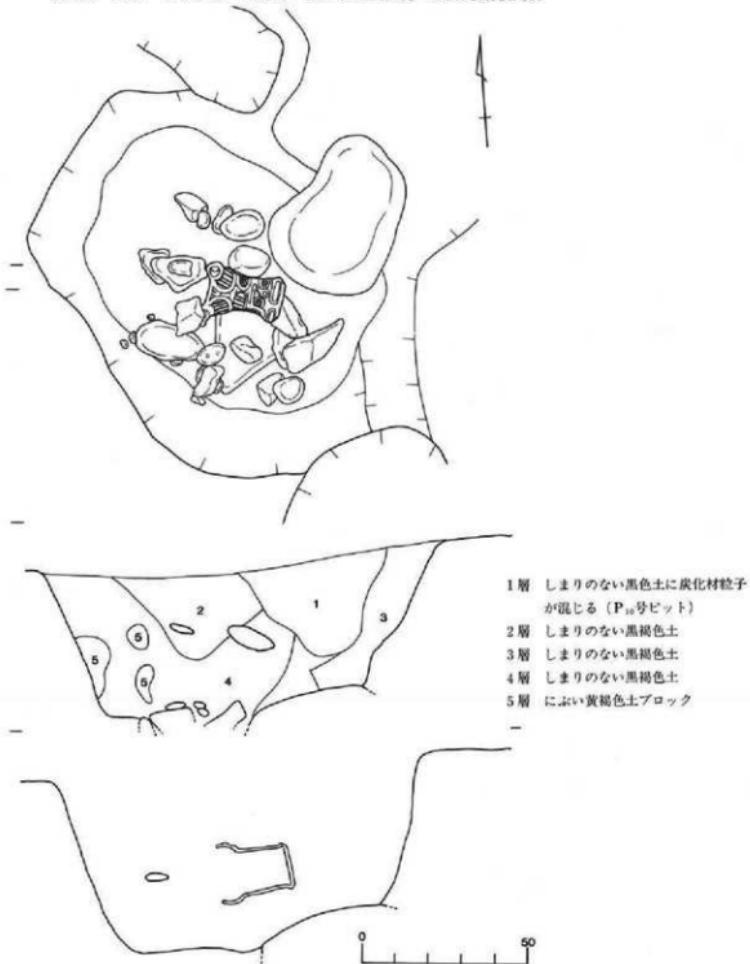
調査報告書の刊行は平成11年度の予定である。調査記録、出土遺物は明野村教育委員会が保管している。

註1 川崎昌宏 1966 「北巨摩郡明野村中学校庭出土の中期绳文式土器等について」

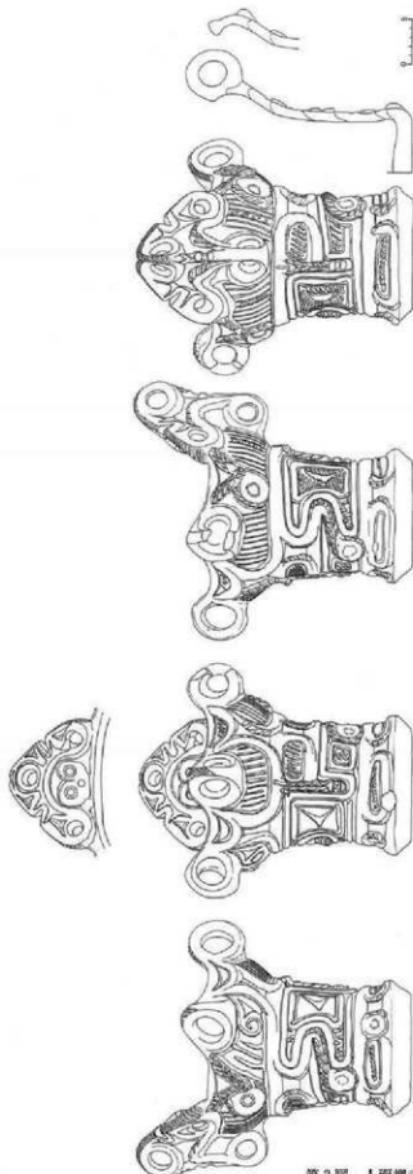
塩島由喜男 『甲斐考古』 1

註2 曾利III式期の住居跡1軒が発見されている。

佐野隆 1995 『村之内II・III遺跡・高台中谷井遺跡』 明野村教育委員会



第2図 P₁号土坑



第3図 人面把手土器

—

71



写真4 人面把手土器

5 新井遺跡

所在地 高根町藏原字新井1270-53番地
調査原因 特定環境保全下水処理場中央処理区本体工事
調査期間 平成8年8月27日～平成8年10月7日
調査面積 1,500m²
調査主体 高根町遺跡調査会
担当者 雨宮正樹

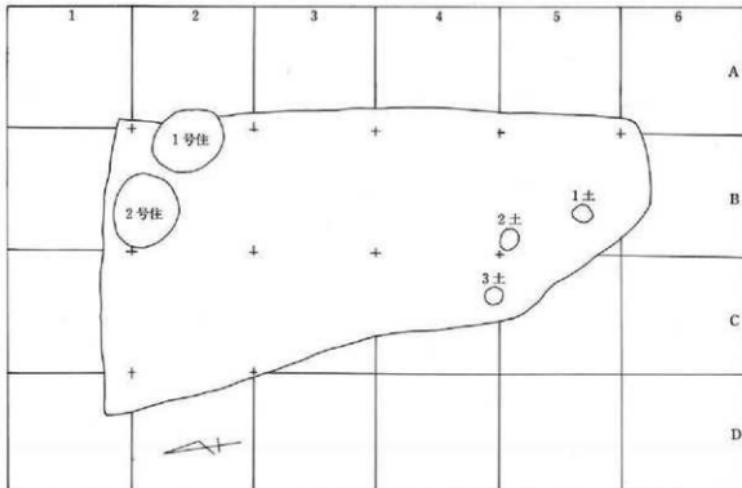


当遺跡は、八ヶ岳南麓の緩やかに南に開けた比較的広い尾根の頂上部に位置する。この台地の南と西側は南流する六ヶ村堰（俗称、川久保沢）により舌状に侵食され比高差約100mを測る急斜面となっている。東はこの六ヶ村堰（俗称、川久保沢）へ合流する形で比較的浅いかくれ沢が形成されているが、現況は水田ないし畑となっている。

この地域は、昭和61年に高根町教育委員会が行った遺跡分布調査によれば、新井B遺跡として比較的広範囲に広がる縄文時代中期・平安時代の遺跡として周知されていたが、下水処理施設本体が建設される場所は、山林となっており遺跡の所在は空白であった。

この地区に下水処理施設本体建設が予定されることにより平成8年3月13日に試掘調査を行い縄文時代中期の遺跡として確認された。

検出された遺構は、縄文時代中期の住居址2軒、時期不明土坑2基、集石土坑1基の5遺構である。住居址が検出された所は舌状に侵食された先端部分ではなく、北側に広がる台地との接合部分であり、確認され



第1図 新井遺跡全図 (1/40)

た2軒は非常に近接した状況であった。このことは、中期における特徴ともいえる2軒1対で住居址が検出されることの証例と思われるが全体の調査面積が少ないと検出された遺構が少ないとことなどから断定はできない。

住居址は、いずれも曾利期のものであり、現在整理中であるため現地調査中の所感にとどめたい。

第1号住居址

調査区域の東北部より検出された住居址であり、短軸約5m、長軸約6mを測る楕円形を呈する。周溝は南の山入口と思われる部分を除き全周する。遺構確認は現地表面より20cmほど下げた時点で確認され、確認面から床面までの深さは約40cmを測り、依存状況は非常に良好であった。このことは、現況が地区的共右林であったことによるものであろう。遺物の出土状況は住居址中心部よりやや北側に奥まった状況で比較的高い位置から床面まで断続的に出土している。

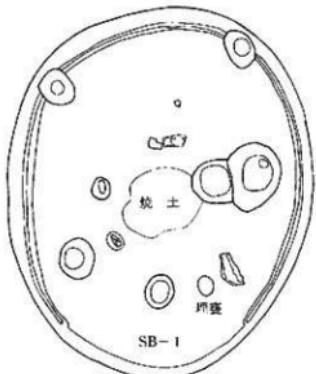
南側の出入口付近に埋甕が1固体見られ、この埋甕によれば曾利III式と思われる。

第2号住居址

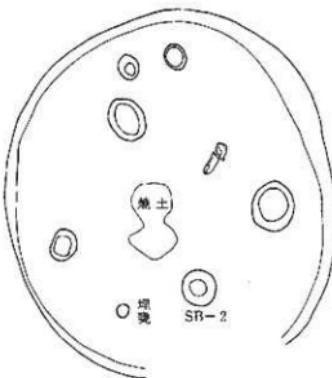
試掘調査により確認された住居址であり、調査区の最も北の部分で検出されている。遺構確認は前述の1号住居址と変わりはないが、遺構自体の埋込みは非常に浅く、依存状況は不良であった。平面プランは短軸約5m、長軸約6mを測る楕円形を呈し、壁の立ち上りは5cmほどであった。遺物の出土状況は遺構内にはほぼ満遍なく出土している。

南側の出入口付近に埋甕が1固体見られ、この埋甕によれば曾利III式と思われる。

以上のとおりごく簡単に遺跡の内容を記述したが、整理作業の途中であり、詳細については随時報告していきたい。



第2図 第1号住居址実測図 (1/80)



第3図 第2号住居址実測図 (1/80)

ながさかわみじよう
6 長坂上条遺跡

所在地 長坂町長坂上条字西新居

調査原因 住宅建設

調査期間 1997年1月20日～3月4日

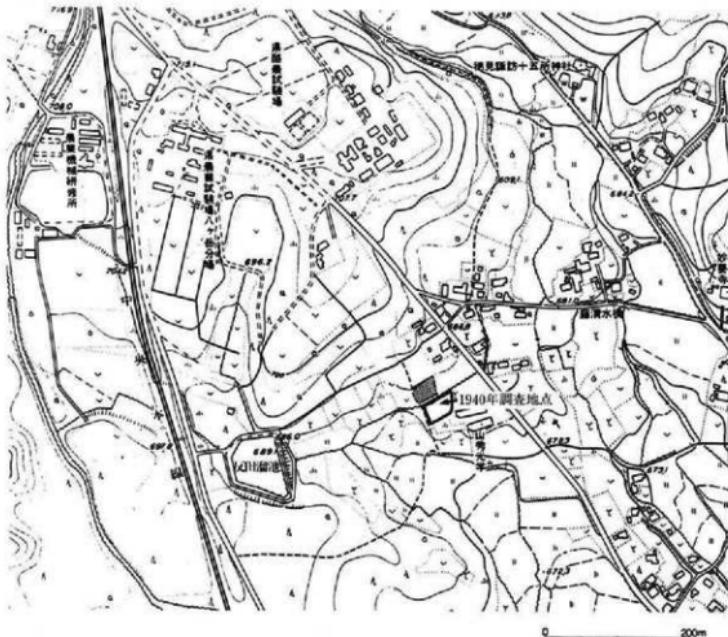
調査面積 550m²

調査主体 長坂町教育委員会

担当者 小宮山隆（長坂町教育委員会埋蔵文化財担当）



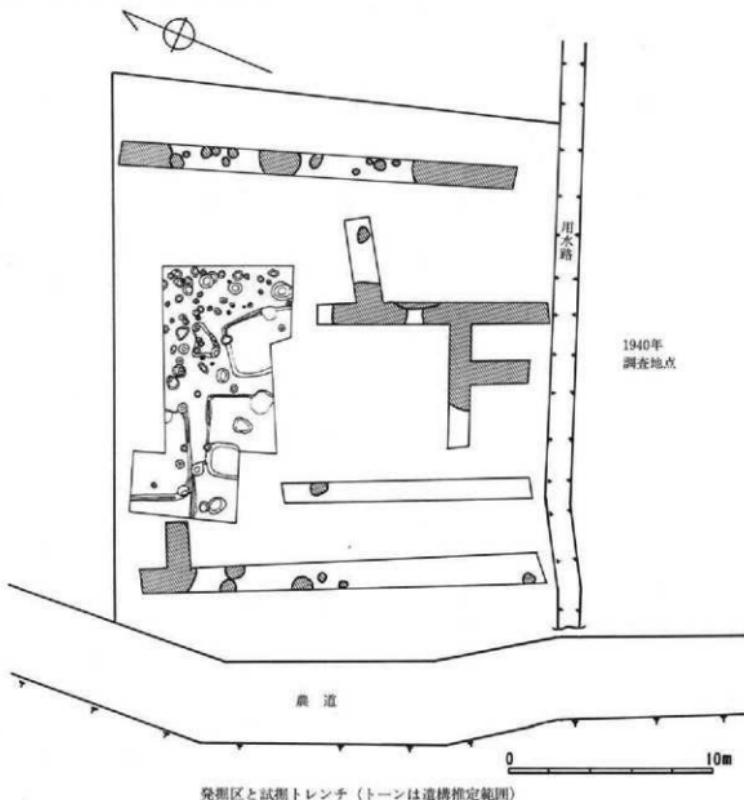
長坂上条遺跡は八ヶ岳南麓の大深沢と宮川に挟まれた標高685mの舌状台地端部の緩斜面に立地する。この台地北側の高位面には、八ヶ岳南麓を代表する縄文時代中期の大規模遺跡である酒呑場遺跡が立地している。本遺跡は1940（昭和15）年、井出佐重と竹下次作が大山史前学研究所の大山柏の協力を得ながら発掘調査した遺跡であり（大山柏はか1941「山梨県日野春村長坂上条発掘調査報告」史前学雑誌13-3）、山梨県内の本格的な学術発掘調査の嚆矢として考古学史に名をとどめるばかりでなく、戦後の考古学会においても中部山岳縄文晩期の標識的な遺跡の一つとして数多くの研究論文に紹介されてきた。



調査位置（トーン）

近年になって開発の波は本遺跡周辺にも押し寄せ、1980年代の農業基盤整備事業においては遺跡の一部が未調査のまま破壊されるなど、その史学的重要性とは裏腹に遺跡をめぐる環境は悪化の一途をたどっている。

1996年12月、長坂上条787-1地番に住宅建設の届出があり、町教育委員会は関係方面と協議の上で翌1月から厳寒のなか発掘調査にとりかかった。

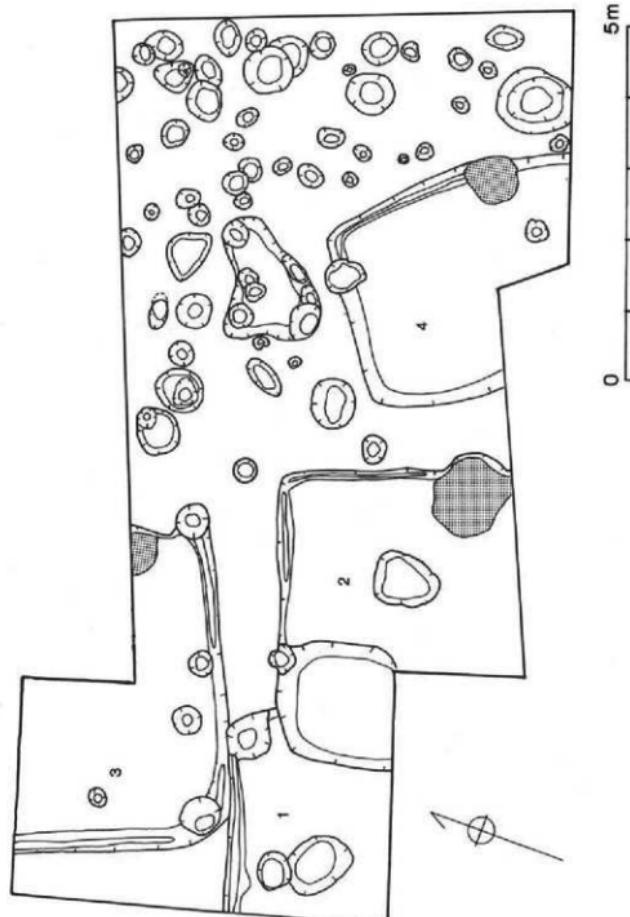


発掘区と試掘トレンチ（トーンは造構推定範囲）

今回の調査は約550m²の宅地全体について9本の試掘トレンチを設定し包含層の位置を確認するとともに、掘削工事が行われる住宅基礎部分165m²を発掘した。住宅基礎部分からは平安時代の住居址4軒と時代不詳の土坑54基が確認され、縄文時代から平安時代にかけての遺物が整理箱にして約15箱分出土した。また試掘トレンチでは確認できた造構だけに竪穴住居址と予測されるものが6ないし7軒、土坑と予測されるものが19ないし20基あり、遺物は整理箱約30箱分出土した。整理作業は未だほとんど進んでいないが、遺物は縄文時代中期後半から平安時代にわたる。とくに縄文後期中葉から晩期後半にかけての無文土器片と黒曜石チップが圧倒的に多い。また石鎚（ほとんどが有茎鎚）・多孔石・打製石斧などの石器類のはかに土製耳飾りや土偶などの土製品も出土している。隣接地である1940年の調査地点では縄文時代後晩期の配石墓群と推測される配

石が数基報告されているが、今回は確認されなかった。住宅基礎部分の調査では、その大半が平安時代の住居構築により縄文時代後晩期の文化層が搅乱されているようであったが、平安時代住居址が存在しない調査区東側のわずかな空間には54基もの土坑が密集していた。これら土坑群の覆土から出土した遺物は大方が縄文時代後半から晩期にかけてのものである。今回の調査に関わる遺物や図面等は長坂町教育委員会で保管している。

短い調査期間中、調査区周辺の畠地で後晩期の精製土器片や石鐵などを多量に表採したが、そのなかには内面朱塗りではなく完形の土器耳飾まであり、遺跡の荒廃が著しく進行していることを実感した。



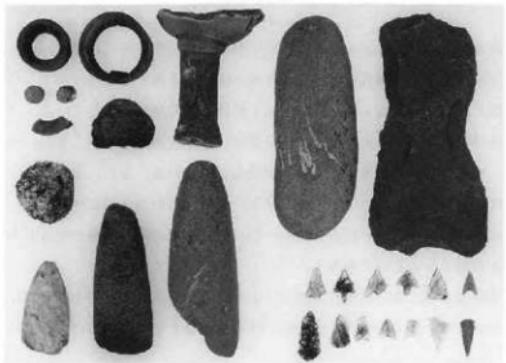
発掘図（トーンは焼土範囲）



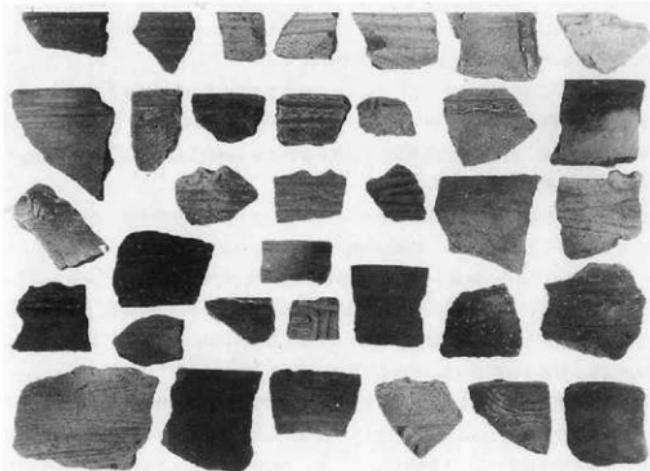
发掘区全景



土坑群



出土遗物



出土遗物

7 寺所遺跡

所在地 大泉村西井出314-1

調査原因 特定環境公共下水道事業処理場施設等建設

調査期間 1996年6月17日～11月22日

調査面積 7,539m²

調査主体 大泉村教育委員会

担当者 伊藤公明



寺所遺跡は標高765～775mを測り、南北200m、東西150mほどの範囲に形成された平安時代の集落跡である。この集落跡は、西側は比較的広い沖積層を挟んで西衣川が、東側も狭い沖積層を挟んで泉川が流下している。集落跡の南半は流れ山地形の頂部に該当し、比高4～5mの崖面を形成して沖積層に達している。

近隣の遺跡としては、平安時代の集落跡では木の下・大坪遺跡、原田遺跡、城下遺跡、寺所第2遺跡、豆生田第3遺跡、東姥神遺跡、中村遺跡、東原遺跡、大八田原田遺跡等が調査されている。また、その分布に特殊性が窺われる鉢帯の出土した遺跡はこの周辺に多く、寺所第2、城下、原田、中村の各遺跡から出土している。これらは平安時代にこの地域に設置されたと言われる官牧の一つ、柏前牧との関連を窺わせるもので、当地域の古代史を解明する上で大きな鍵となるものであろう。

なお、本遺跡は昭和54年度の県営圃場整備事業に伴い県教育委員会により発掘調査された上で今回の調査に臨んでいることから前回を第1次、今回を第2次発掘調査と便宜的に呼称することとする。また、遺構の名称は第1次調査の続番号を使用している。

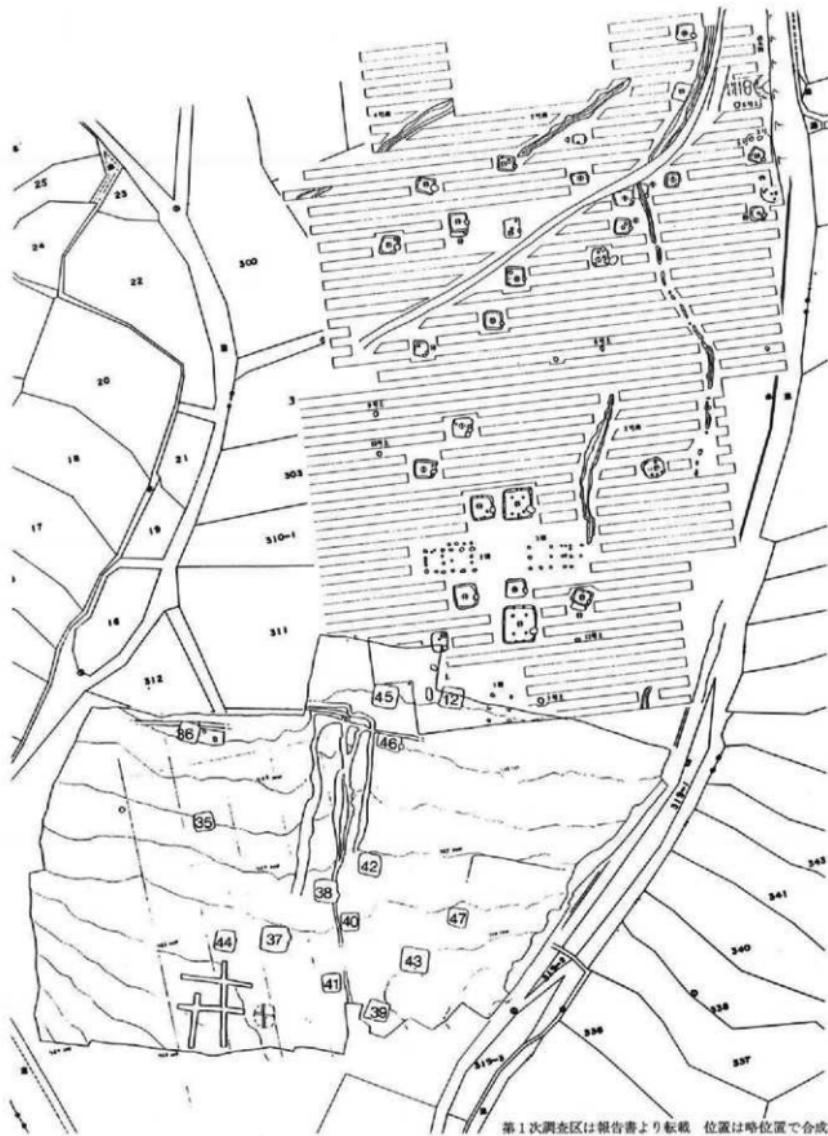
第2次調査は第1次調査区との重複167m²を含む7,539m²を発掘調査したが、この調査区から平安時代住居跡13軒（35～47号住居跡）、時期不明の土壙6基（13～18号土壙）、近・現代の溝状遺構4条（5～8号溝跡）、近世以降の長方形竪穴状遺構1基が検出されている。

今回調査された35～47号住居跡の中には、一辺6mを越すような大型の住居跡は含まれていない。その中で37号住居跡は比較的大きなもので5.69×5.38mを測る。覆土も最大65cmと深い。カマドは他の住居跡と同様東辺に構築されている。出土遺物に特殊なものは無いが刀子が1点出土している。時期は甲斐型土器編年第XII期のものが中心に出土している。

43号住居跡も5.58×5.24mを測る比較的大型のものである。カマドは本集落中唯一確実な隅カマドとなる。武藏型の甕の出土は八ヶ岳南麓では極めて少なく、高根町川又坂上遺跡等（E11）に次ぐものである。時期は甲斐型土器編年第X期のものが中心に出土している。

44号住居跡は4.11×4.47mを測るこの集落跡では規模の集中するものの一つである。この住居跡の貼床下から床下土壙2基が検出されている。遺物としては須恵器短頸壺（口頸部欠損）、刀子2点等が検出されている。時期は甲斐型土器編年第XII期のものが中心に出土している。

さて、寺所遺跡は第1、2次調査を通じて、まだ南側残地林中に若干の遺構の存在は想定されるものの、ほぼ集落域全域を掘り尽くしたと表現できよう。その成果からこの平安時代の集落は、住居跡44軒、掘立柱建物跡3棟とから構成されていることが明らかとなった。この規模は、八ヶ岳南麓では住居跡60軒以上、掘立柱建物跡7棟以上の規模を有する長坂町柳坪遺跡（E2）、集落跡想定範囲の約半分を調査したのみで住居跡



第1図 寺所遺跡 全体図 ($S = 1/1,000$)

37軒、掘立柱建物跡 2 棟が検出された寺所第 2 遺跡^(註 3)に次ぐものとなる。その成立過程を見るには第 2 次調査の整理作業未着手の段階では限定されたものとなるが、概ね第 2 次調査分では甲斐型土器編年第 X ～ 還期の遺物が出土しており、ほぼ第 1 次調査の成果と共通している。の中でも X ～ 還期が中心となり、還期は少ない傾向にある。

また、この集落では、大型住居跡と掘立柱建物跡から、集落の中に有力者が存在したことが窺われる。即ち 13・25 号住居跡と 2・3 号掘立柱建物跡がそれである。また、この集落はこれらの遺構を中心として、1・2・10・11・12・14・15・45・46 号住居跡の一群と、それ以北、以南の住居跡群に分類が可能であろう。つまり、北群、中群、南群という住居群でこの集落は構成されていると判断される^(註 4)。

さて、先述の 13・25 号住居跡、2・3 号掘立柱建物跡を中群の中核的建物群と便宜的に呼称すると、出土遺物から 13 号住居跡が時間的に先行して建てられたものの、ほぼ同時期に帰属するもので、これらの配置等を考慮に入れると中核的建物群は全て同時存在した可能性が高く、散在的に住居が点在する中に忽然と中核的建物群が出現した様子が見て取れる。

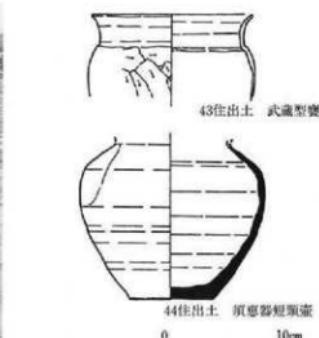
また、墨書き器についてであるが、第 1 次調査では 13 号住居跡を中心に多量に「修」の文字が見られ、第 2 次調査では「修」の文字は今まで確認されておらず「中」の文字等が散見しているのみである。第 1 次調査で大量に「修」の墨書きが発見されたのは、この文字を用いた祭祀的行為の結果とも考えられているが、時間的差異から第 2 次調査では見られなかったものではないかと判断している。

(註 1) 他に高根町湯沢道路で出土している。また、甲府盆地でも蘿崎市北下条遺跡、甲府市桜井畠遺跡が知られるのみである(保坂康夫氏、瀬田正明氏御教示)。

(註 2) 中央自動車道敷地部分、インターチェンジ部分をカウントした。その後、長坂町教委により周辺部が調査されている。

(註 3) 伊藤 1996 「II 8 寺所第 2 遺跡」『年報一平成 7 年度一』 北巨摩市町村文化財担当者会

(註 4) 第 1 次調査の報告中、八巻氏は既調査分の集落を三分割して考えている。ここでは第 2 次調査分を含めて三群に分割して考えている。



第 2 図 出土遺物 (S = 1 / 4)

◆寺所遺跡俯瞰写真



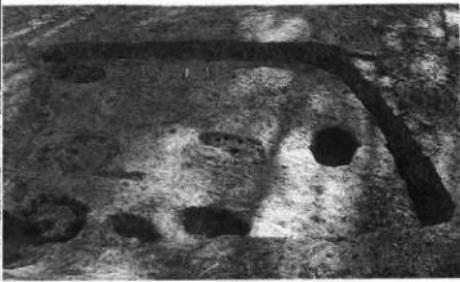
▲37号住居跡



▲37号住居跡遺物出土状況



▲37号住居跡カマド



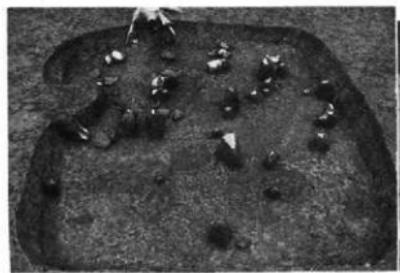
▲43号住居跡



▲43号住居跡遺物出土状況



▲44号住居跡



▲44号住居跡遺物出土状況



▲44号住居跡カマド

8 寺所第2遺跡

所在地 大泉村西井出2895

調査原因 特定環境公共下水道事業管渠敷設工事

調査期間 1996年9月25日～10月5日

調査面積 325m²

調査主体 大泉村教育委員会

担当者 伊藤公明



本遺跡は八ヶ岳南麓斜面に位置し、標高約810mを測る尾根上に立地した遺跡である。平成7年度には県営圃場整備事業に伴い約10,000m²が調査され、縄文時代中期の住居跡93軒、平安時代の住居跡37軒等が調査されている(註1)。今回の調査は下水道管渠の敷設が本遺跡内の未調査部分で工事されるに伴い急拠実施することとなったもので、時間的にも、予算的にも不十分なものとなってしまった。この工事は周知の遺跡の範囲をクランク状に1.2m幅で縦横断する形になっており、大部分は工事の立合いで済ませた。この内一部は予め重機のバケット幅で遺構確認面まで掘下げ、調査に当たった。その結果、縄文時代前期初頭の住居跡1軒が調査されるに至った。この住居はトレンチ調査のため全掘はしていないが、楕円形を呈し、壁高は66cmを測る。遺物は少なく、小破片のみだが、無文で、胎土中に多量に纖維を含んだものが主体を占める。この時期の遺構は平成7年度調査部分からは全く検出されておらず、この集落の成立を考える時、大きな成果であったと言える。また、近隣には同時期の遺構が検出されたものとして、山崎第4遺跡(註2)、甲ヶ原遺跡が存在する。なお、遺構は検出されていないが、縄文時代前期後葉の遺物の集中している部分があり、周辺に該期の遺構の存在を予感させる。周辺には該期の集落として天神遺跡、山崎第4遺跡、御所遺跡、甲ヶ原遺跡等があり、同様に注目される成果といえよう。

(註1) 伊藤 1996 「II 8寺所第2遺跡」『年報－平成7年度－』 北巨摩市町村文化財担当者会

(註2) 1989・1992年大泉村教育委員会調査。未発表。



写真1 T-66号住居跡



写真2 写真スナップ

9 おおはら 大原 1 遺跡

所在地 白州町白須字大原8589-2

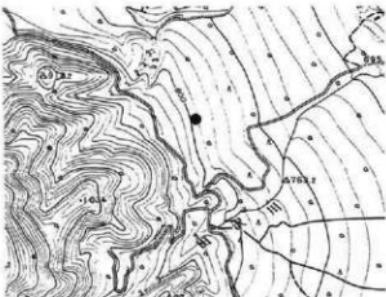
調査原因 個人住宅

調査期間 1995年5月8日～6月2日

調査面積 185m²

調査主体 白州町教育委員会

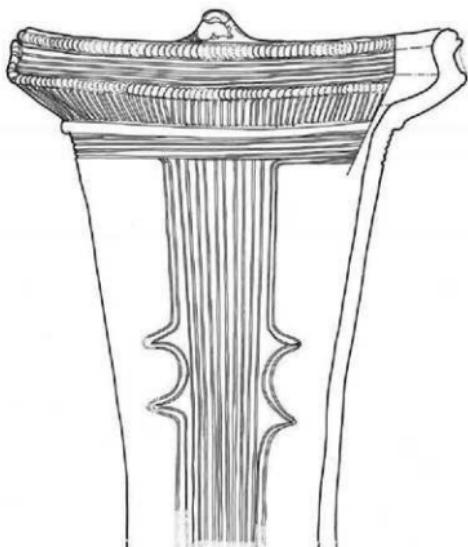
担当者 杉本 充



本遺跡は、明石山脈の北部、甲斐駒ヶ岳の前山群を構成する巨摩山地東麓に位置し、東側を北西から南東に流れる釜無川が形成した河岸段丘高位面に立地している。現況は、別荘が点在する山林である。標高は770～780mの間にあり、町内では最も高い地点の遺跡である。縄文時代中期後半を中心とする遺物が、南北200m、東西130mの広い範囲に散布しており、規模の大きな拠点的集落が推測される。

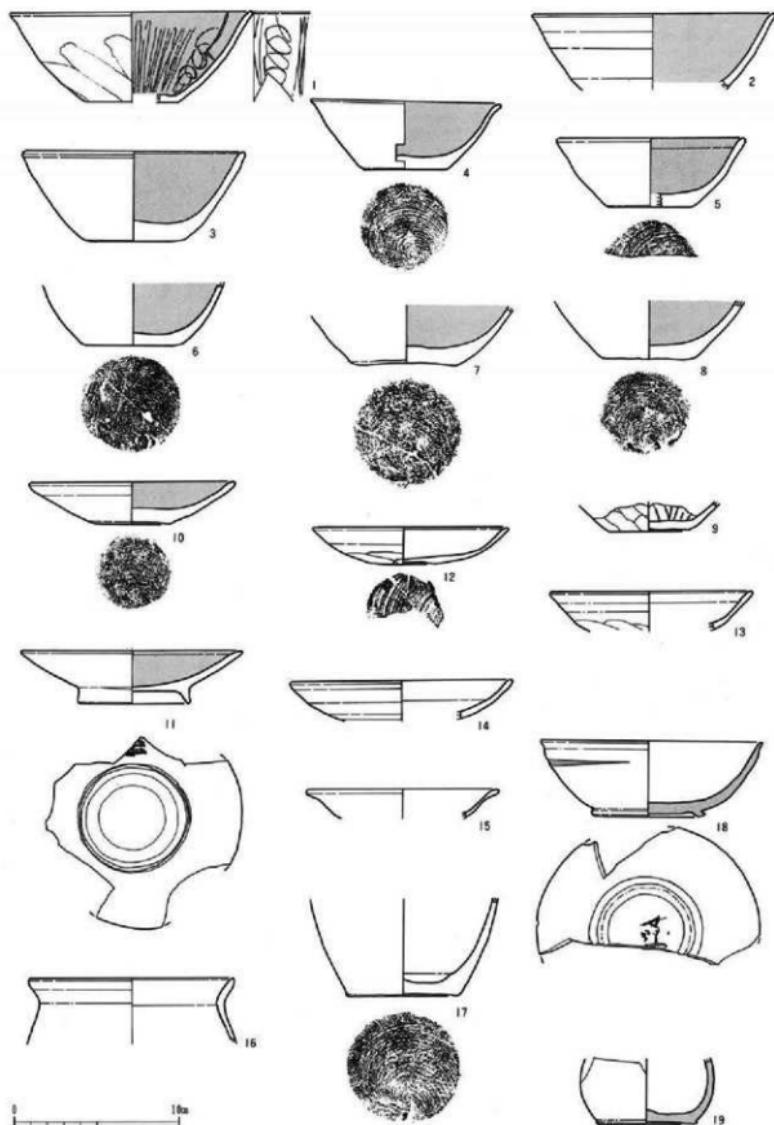
本調査では、住宅建設予定地(55m²)と畑として利用される箇所(130m²)の2地点で発掘調査を行い、住宅建設予定地から、縄文時代中期初頭の土坑1基と平安時代の竪穴住居址1軒が検出された。

土坑は調査区の南西隅に位置し、プラン確認面で85×78cmの円形を呈し、深さは72cmを測る。遺物は、プラン確認面より若干上位ではば完形の五領ケ台式土器(第1図)が出土している。



竪穴住居址は、4.4×4.2mの隅丸方形を呈し、壁高は50cm前後を測る。覆土は、砂を含む黒褐色土である。カマドは、東壁やや南寄りに築かれている。支脚石の上には、壺(第2図-7)が伏せられていた。床面は、硬化した部分はなく全体に軟弱である。柱穴と思われるピットが検出されているが、いずれも深さは10～15cm程度である。遺物については、壺のはとんどが内面黒色処理されたもので占められていた。

第1図 1号土坑出土遺物(1/3)



第2图 1号住居址出土遗物 (1/3)

10 真原A遺跡

所在地 武川村大字山高

調査原因 民間開発に先立つ試掘及び確認調査

調査期間 1996年6月10日～1996年11月20日

調査面積 1,100m²

調査主体 武川村教育委員会

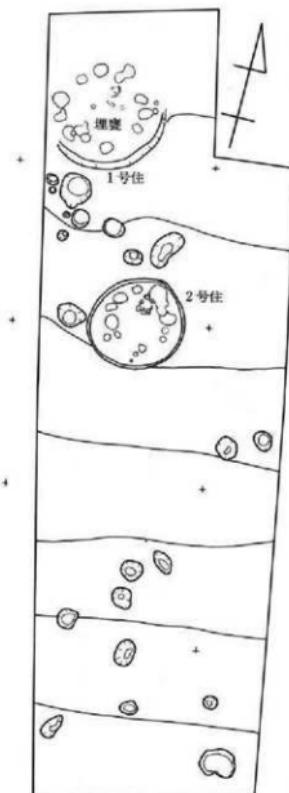
担当者 竹田真人

真原A遺跡は、北西側を石空川、南東側を黒沢川に挟まれた北向きの緩傾斜をなす台地上に立地し、標高は約710mほどである。真原A遺跡では、昭和57年に村誌編纂事業に伴い発掘調査が行われており、縄文時代中期後葉の曾利式期の住居跡が1件検出されている。今回調査を行った地点は、住居跡が検出されている地点から、東へ200～300mの地点と推測され、同時期の遺物・遺構の検出の可能性が考えられた。しかしながら、真原地区は、昭和初期の開拓時に地割りによって、人力に頼った所と重機によって大規模に造成した所があると言われ、遺構が破壊されている可能性もあった。このため、遺物の所在の濃淡を把握するために、全点測量を原則として調査を行った。

調査を進めていくと、径6mほどに遺物が集中する地点がみられ、さらに調査を進めると、竪穴式住居跡の一部の立ち上がりが確認された（1号住居跡）。この住居跡からは確認面から床面まで多量の遺物が検出された。径は約6m円形の住居跡で、7～8本柱穴であると思われる。炉跡は、北よりに石圓炉と思われるものが1基に南西よりに焼土が床面上から確認されている。また、住居跡の南西により、高さ70cm、口径部徑45cmほどの埋甕が逆位で検出された。

1号住居の南、斜面の上側7mに最大径約4mの2号住居跡が検出された。2号住居跡からはまとまった遺物の出土はほとんどみられなかった。炉跡は石圓炉が中央よりやや南東により検出されたが、焼土はほとんどみられなかった。

遺物は、縄文時代中期後葉曾利II～III式の中にはほとんどのがおさまるようであるが、1個体のみ堀之内式の深鉢が出土している。現在までに本村では縄文後期の遺構は発見されておらず、今後の調査が期待される。



真原A遺跡発掘区全体図 S=1/300



真原A遺跡発掘区全景（南側から）



1号住居跡覆土遺物出土状況



1号住居跡



1号住居跡口埋甕



2号住居跡

11 双葉町内遺跡詳細分布調査

所在地 双葉町全域

調査期間 平成8年1月26日～平成8年3月14日

調査主体 双葉町教育委員会

担当者 高須秀樹

双葉町では昭和37年と47年に県教育委員会が、59年に山梨大学考古学研究部によって遺跡分布調査が実施され、43か所の遺跡が確認されている。そして今回の遺跡詳細分布調査において、新たに22か所の遺跡が発見され、合わせて65か所の遺跡を把握することができた。

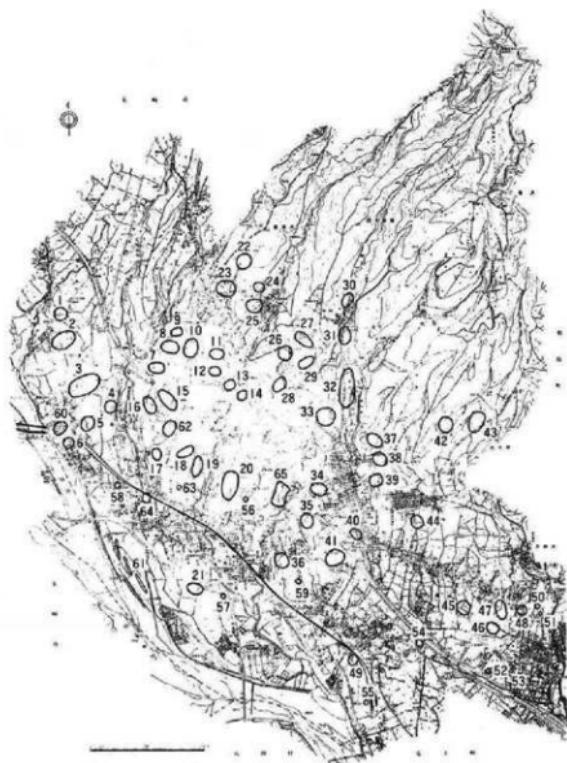
本町は、八ヶ岳から茅ヶ岳の南麓一帯に分布している縄文時代の遺跡の東端に位置している。山地に接している台地や、釜無川に近い台地の南端部に分布している。この中で宇津谷から岩森にかけて分布している遺跡は、遺物が濃厚に散布していることから、良好な集落遺跡の可能性がある。

弥生時代の遺跡は、確認されている例は少なく、戦後間もない頃、宇津谷字金剛地の桑畑から偶然土器が発見された以外は、まとまった遺物が採集された例はない。

古墳時代の遺跡は、台地の先端部に後期古墳が点在している。竜王町との町境に広がる赤坂台地には多数の古墳が点在し、赤坂台古墳群と呼ばれていた。しかし近世以来の開発によって、そのほとんどが消滅してしまった。発掘調査は、昭和51年度～52年度に中央自動車道建設に伴い、二ツ塚古墳等を山梨県教育委員会が行っている。また竜地石下の往生塚古墳は、墳丘部の一部が崩壊しているものの、石室は完全な形で残っている。この古墳は、平成6年度に町教育委員会が範囲確認調査を行っている。この台地上からは、古墳時代の集落が発見されていないことから、古墳の被葬者の支配地域、つまり古墳築造の主体者達の生活の場は、賀川から荒川沿いにかけての平坦部にあったと考えられる。また釜無川の沖積地には舟石古墳が存在する。この古墳に関しては、平成7年度に町教育委員会が地中レーダーによる調査を行ったところ、この古墳が築造された頃は、釜無川の川床は現在よりも低く、微高地に古墳が築造されたものと思われる。

古代以降は、遺物・遺跡は少なく、土師器やカワラケ等がわずかに採集された程度である。中世・近世の遺跡として、今井登之越に経塚（現在消滅）があり、昭和30年前後に地元有志が発掘を実施し、経筒2基と138枚の鏡貨を発見している。また霞堤や陣屋跡、また遺物もなく史料的根据に乏しいが、宇津谷金剛地の勝山城址が知られている。この他に宇津谷藤原と峰の腰に近世の窯跡があり、前者は昭和60年1月に県埋蔵文化財センターが調査を実施している。さらに今回の調査によって、光照寺の境内であったとされる薬師山は、小規模ながら石積みや土塁のような遺構が確認された。この山には光照寺の本堂や薬師堂等、寺の中心部があったという説があり、今後の調査が待たれる。





双葉町遺跡分布図

1 古森遺跡	14 西原B遺跡	27 東峰A遺跡	40 着物沢A遺跡	53 ニツ塚2号古墳
2 駒沢遺跡	15 山ノ神遺跡	28 東峰B遺跡	41 着物沢B遺跡	54 2号古墳
3 唐松遺跡	16 岩の腰A遺跡	29 東峰C遺跡	42 伊豆ノ宮遺跡	55 3号古墳
4 八ツ倉遺跡	17 炙の腰B遺跡	30 大沢遺跡	43 中新井遺跡	56 4号古墳
5 清水塙A遺跡	18 鳥塙A遺跡	31 堀上遺跡	44 北浦遺跡	57 お舟石古墳
6 清水塙B遺跡	19 鳥塙B遺跡	32 曾利遺跡	45 古氏神遺跡	58 5号古墳
7 狐石A遺跡	20 山の神遺跡	33 中原遺跡	46 鳥塙A遺跡	59 堀之越城
8 狐石B遺跡	21 間々下遺跡	34 坊沢東A遺跡	47 鳥塙B遺跡	60 勝山城址
9 朱沢遺跡	22 汗合A遺跡	35 坊沢東B遺跡	48 鳥塙C遺跡	61 震堤
10 狐石C遺跡	23 汗合B遺跡	36 市子石遺跡	49 主水遺跡	62 岩の腰窪跡
11 宇津核A遺跡	24 浜井場A遺跡	37 久保入遺跡	50 1号古墳	63 践跡神社窪跡
12 宇津核B遺跡	25 浜井場B遺跡	38 日向遺跡	51 往生塚古墳	64 一橋陣屋跡
13 西原A遺跡	26 小林遺跡	39 堀西遺跡	52 ニツ塚1号古墳	65 光照寺跡

北巨摩市町村文化財担当者会
八ヶ岳考古（平成8年度年報）

平成9年3月25日 印刷
平成9年3月31日 発行

発行 北巨摩市町村文化財担当者会
事務局 山梨県北巨摩郡双葉町下今井236-2
双葉町教育委員会

印刷 ほおずき書籍株式会社
長野県長野市柳原2133-5
TEL (026) 244-0235

